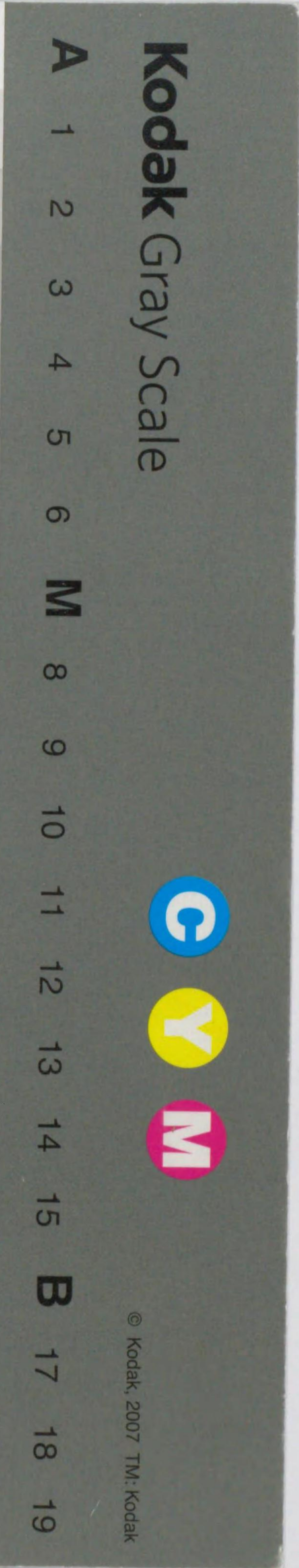


555-47

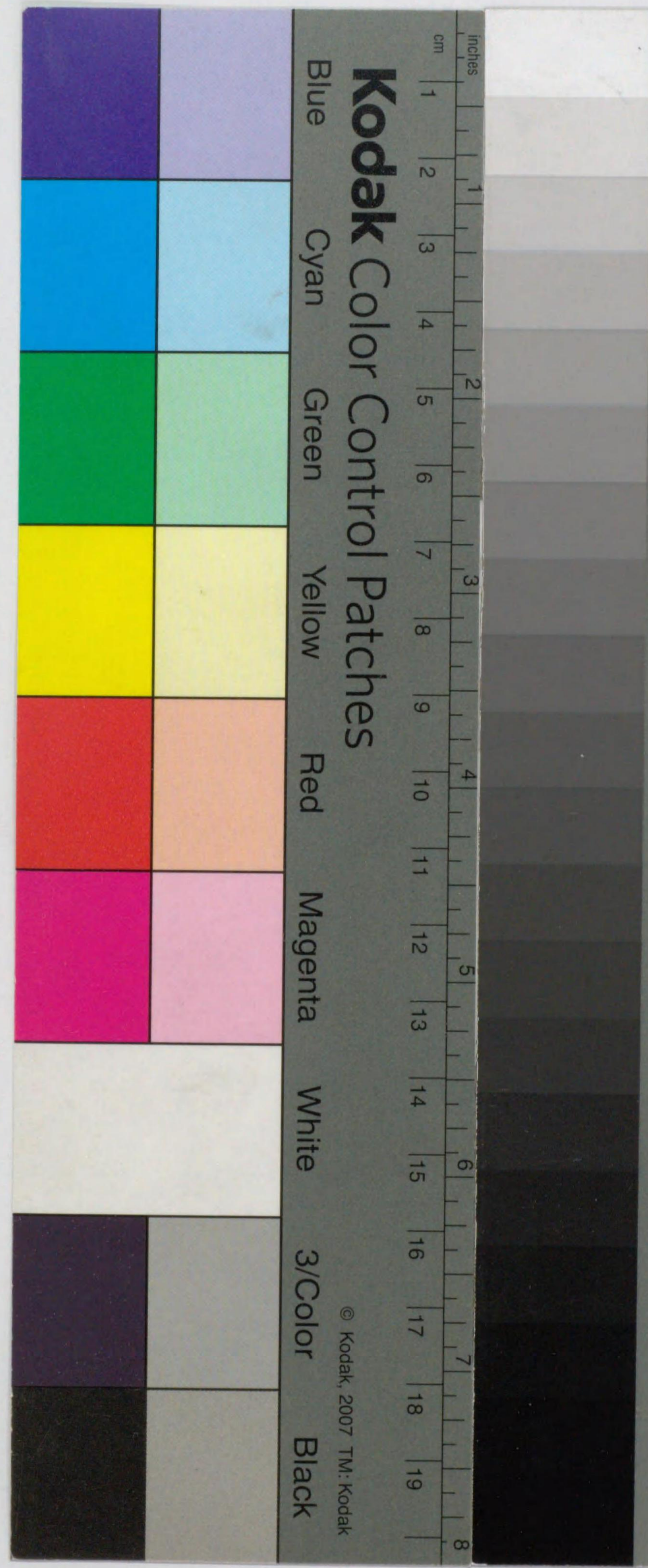


555
47

複製



© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

35.5.20

帝國大學助教授
文學士

山田珠樹譯註

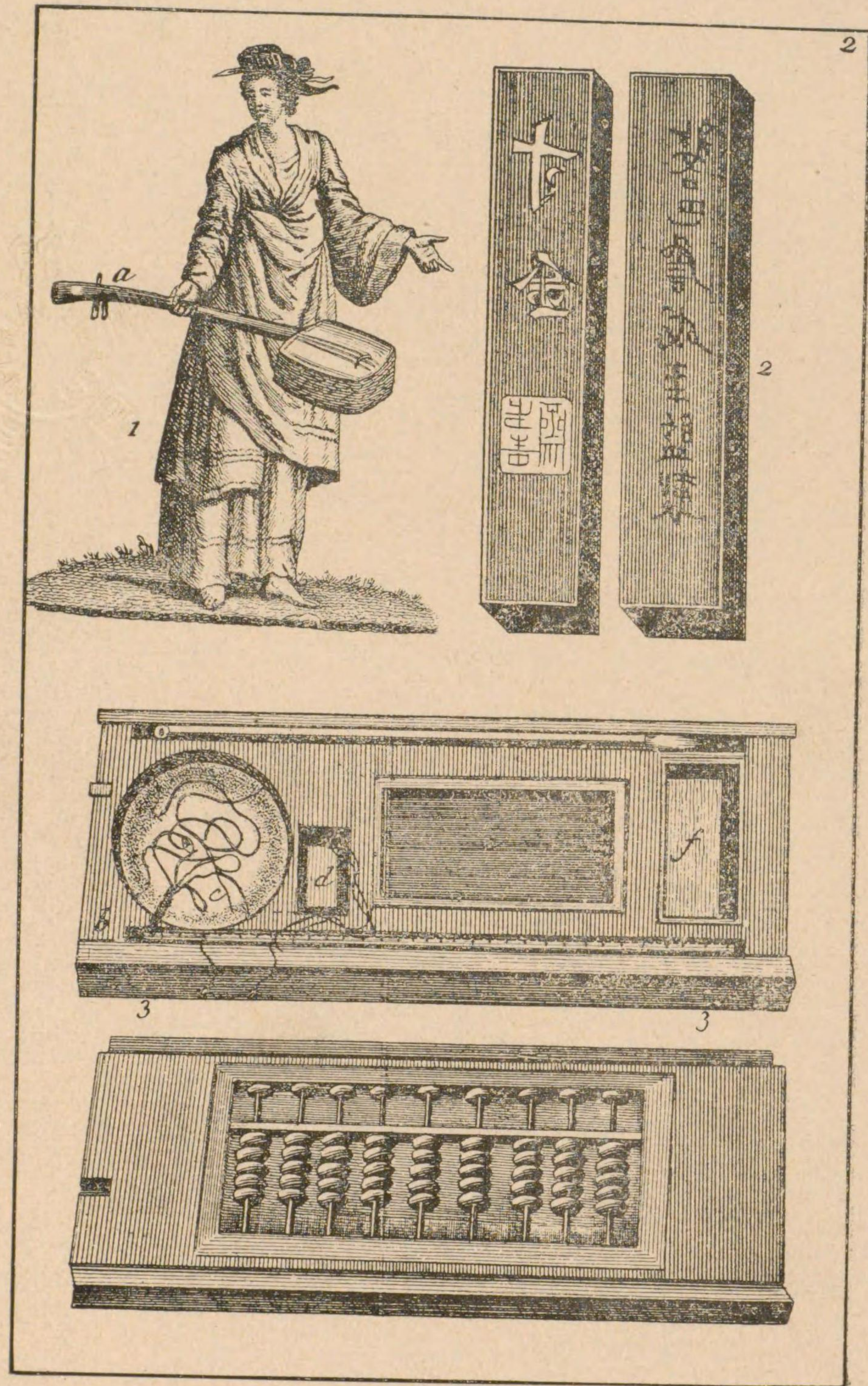
ツェベルグ日本紀行



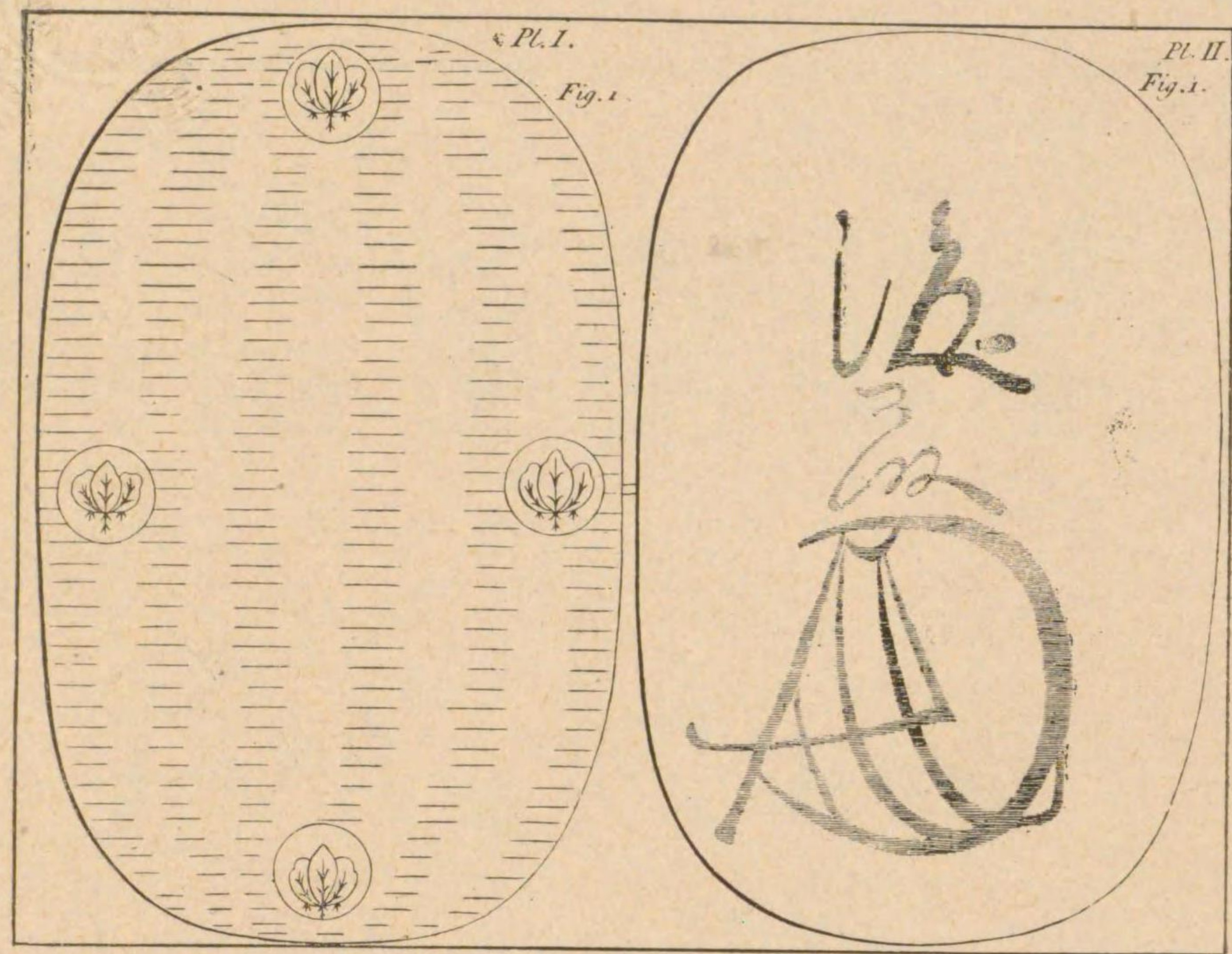
東京 駿南社發行



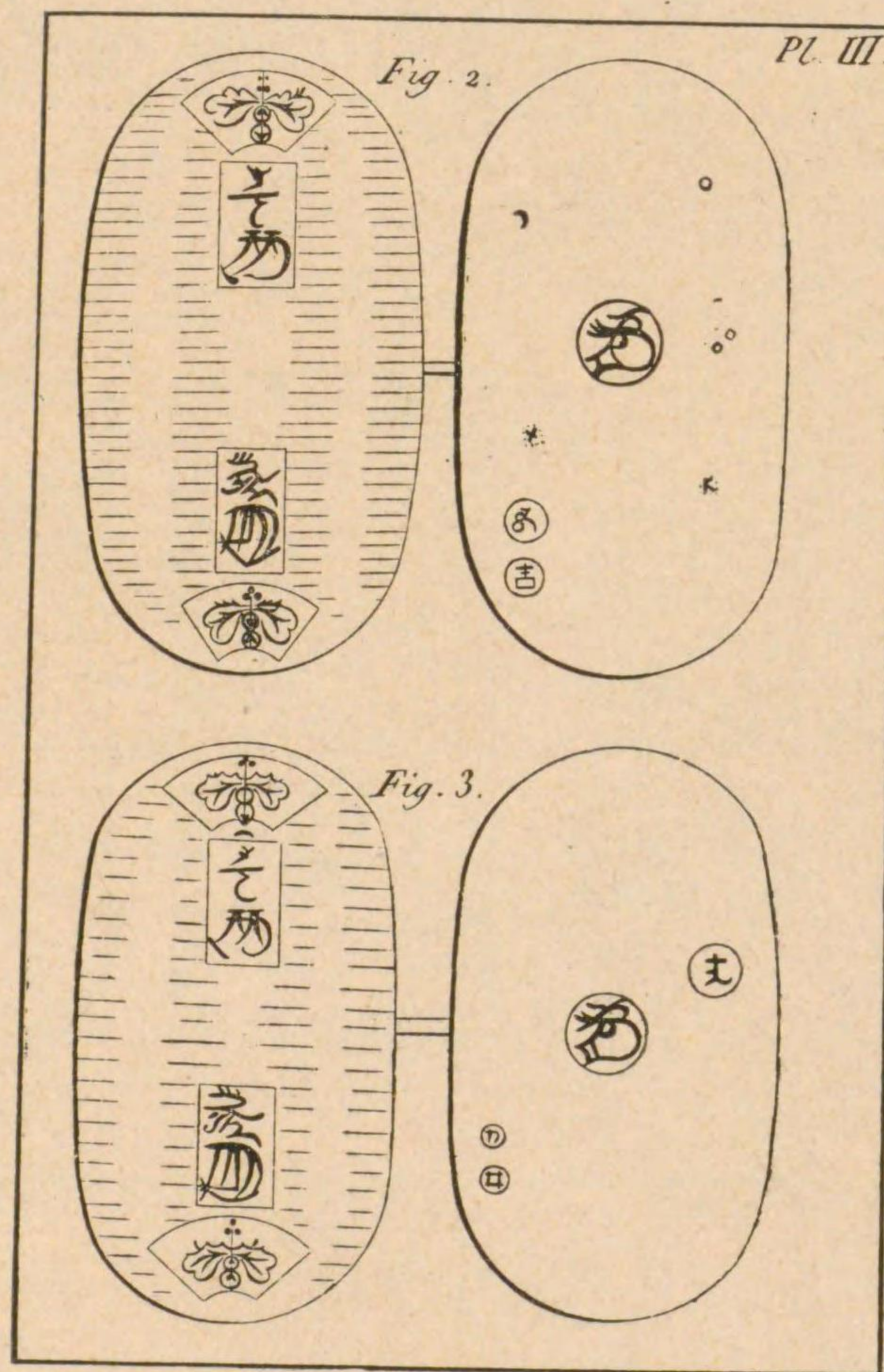
(然自の峯望喜は景春) 像 肖 グ ル ベ ン ツ



1. 日本婦人
2. 墨
3. 算盤、秤、重り、硯、水入、筆
を具備する文具

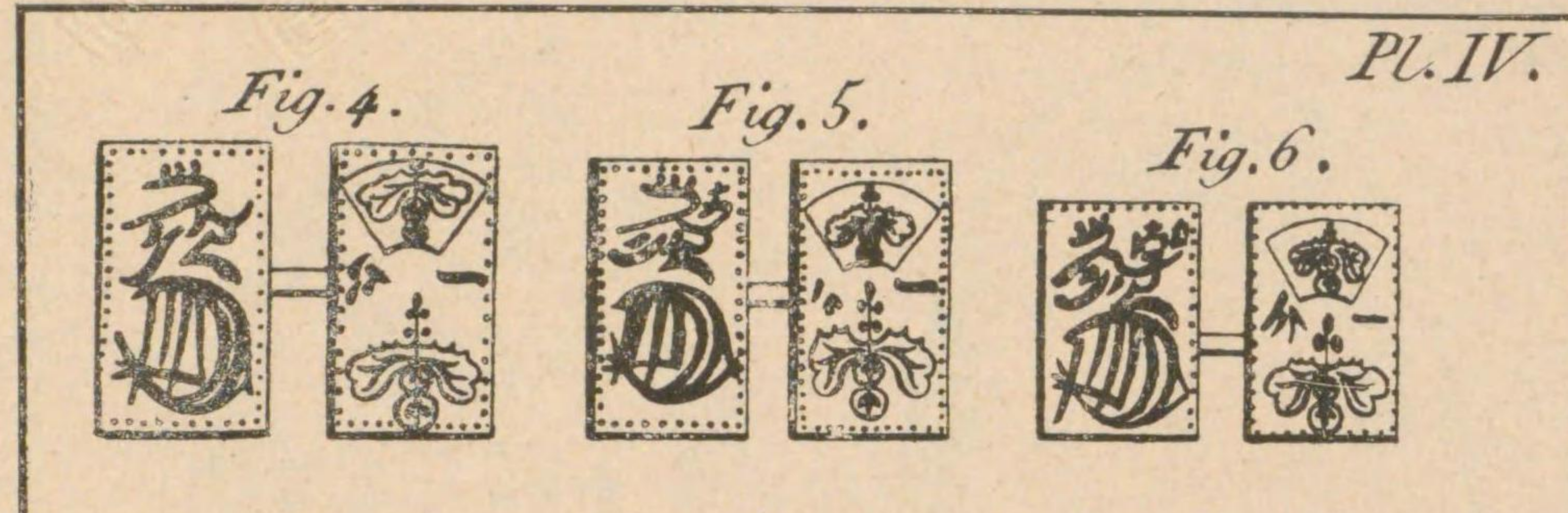


判 大 圖 二 第 及 圖 一 第 考 幣 貨

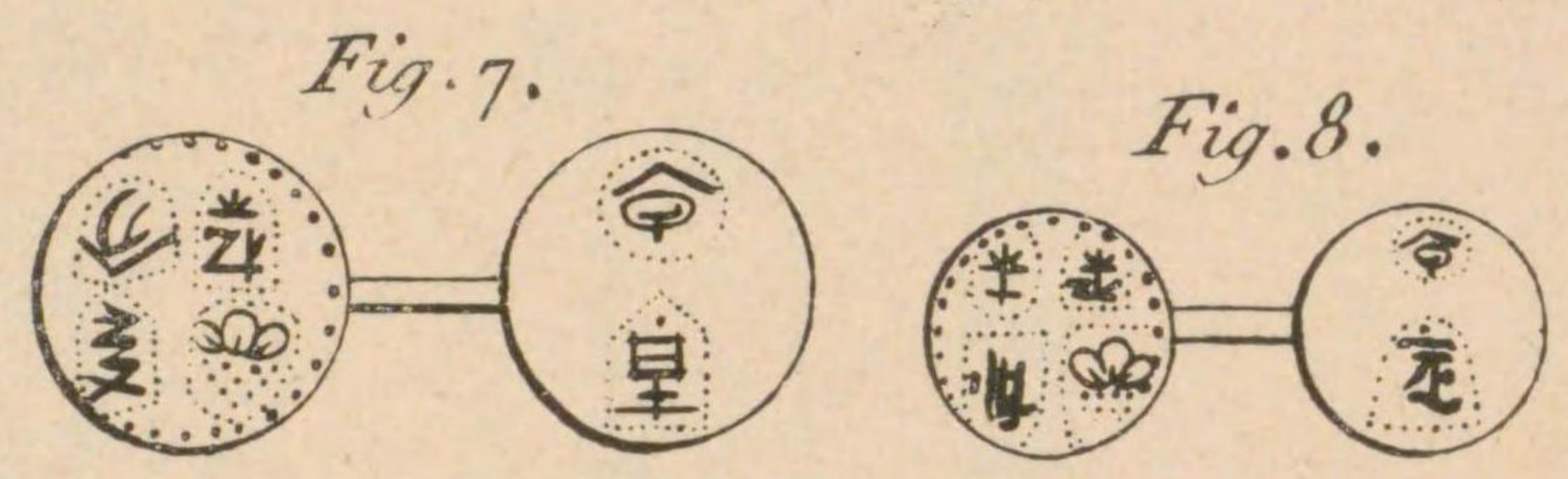


判 小 圖 三 第 考 幣 貨

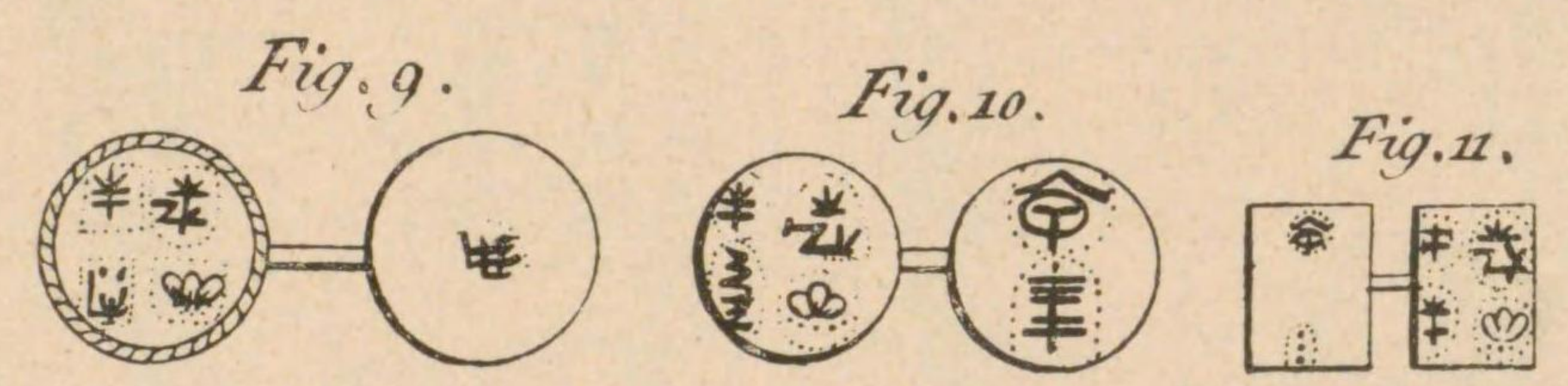
一分金



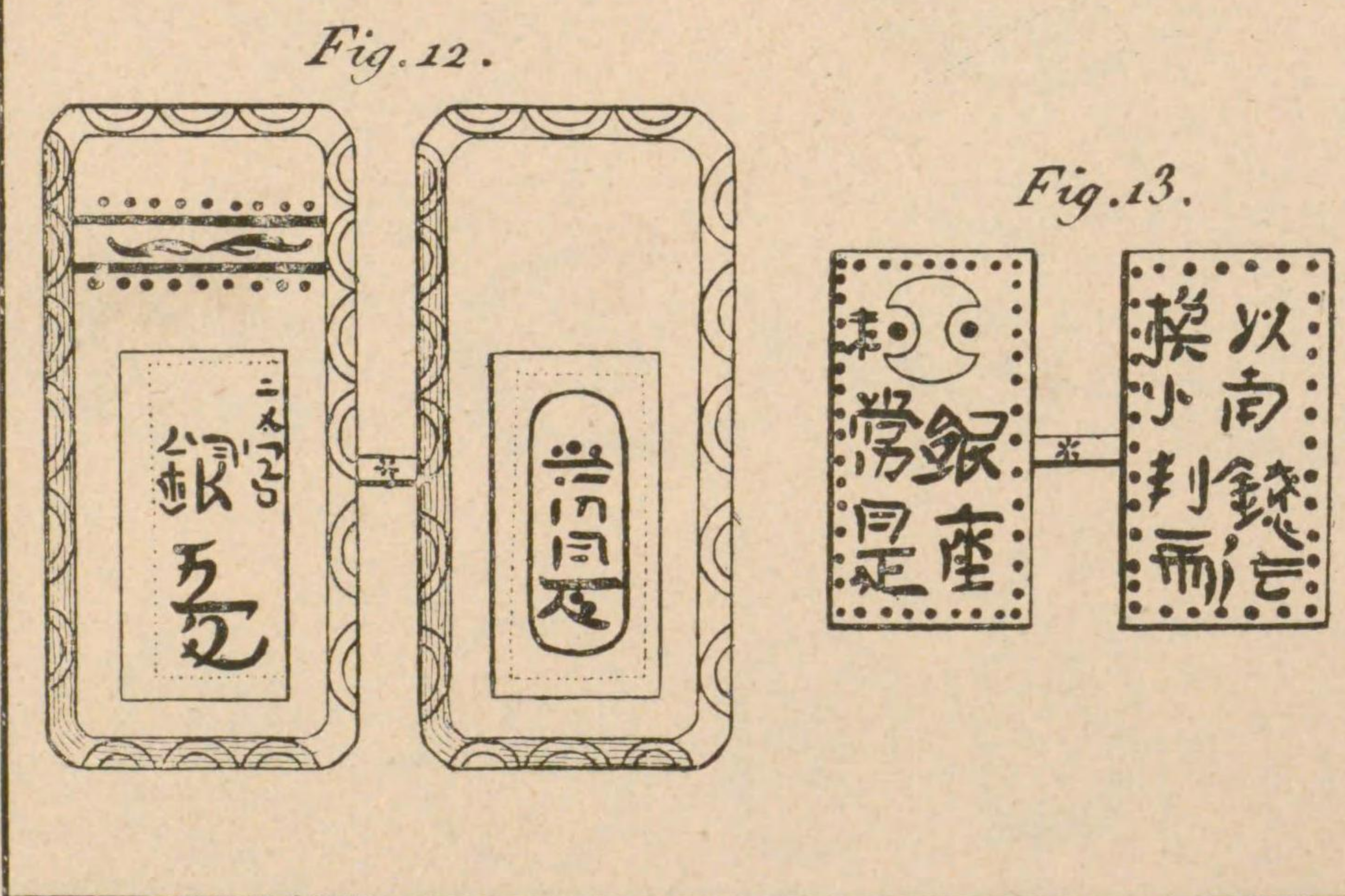
甲州



金



五匁銀



南錄銀

圖四第考幣貨

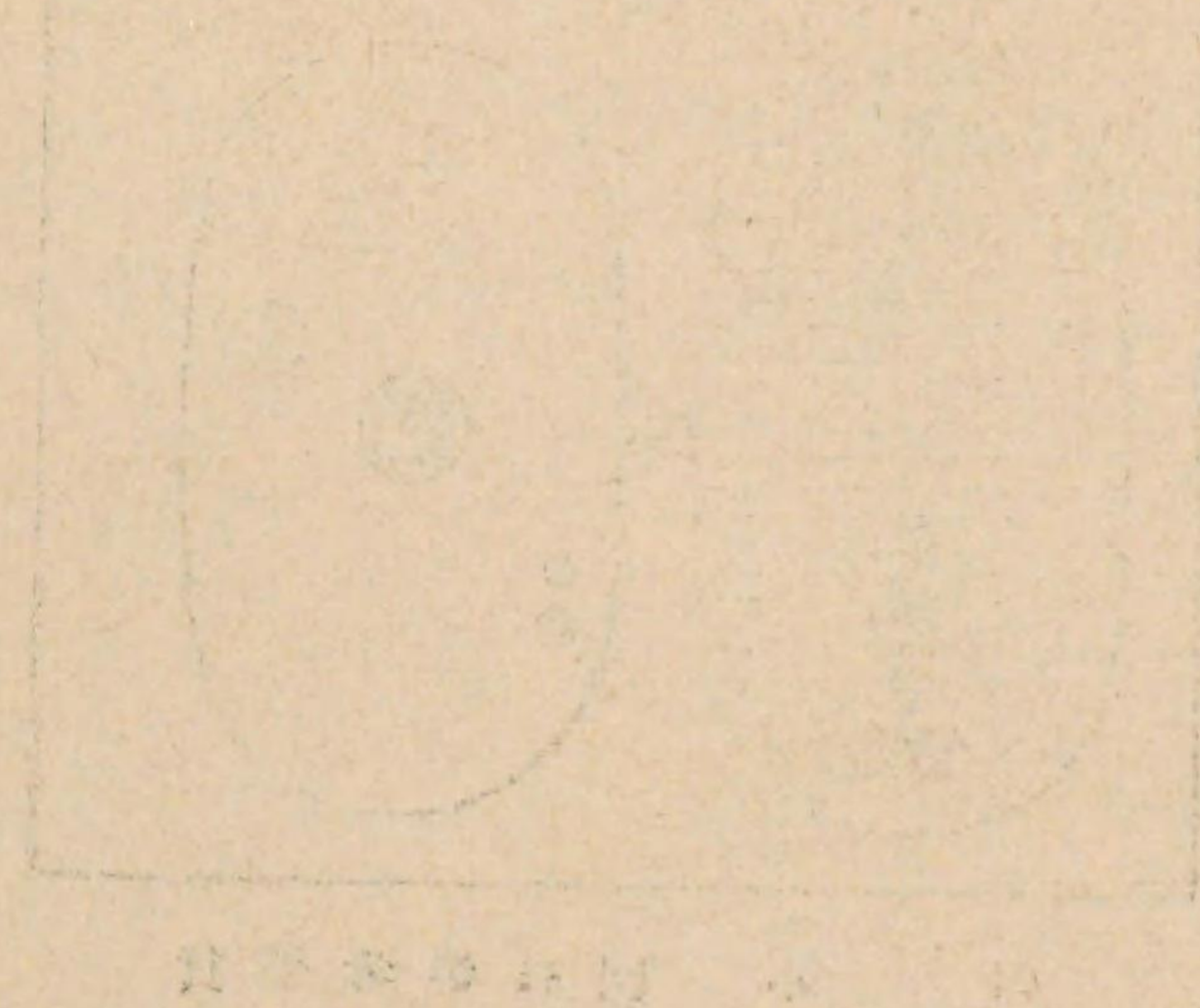
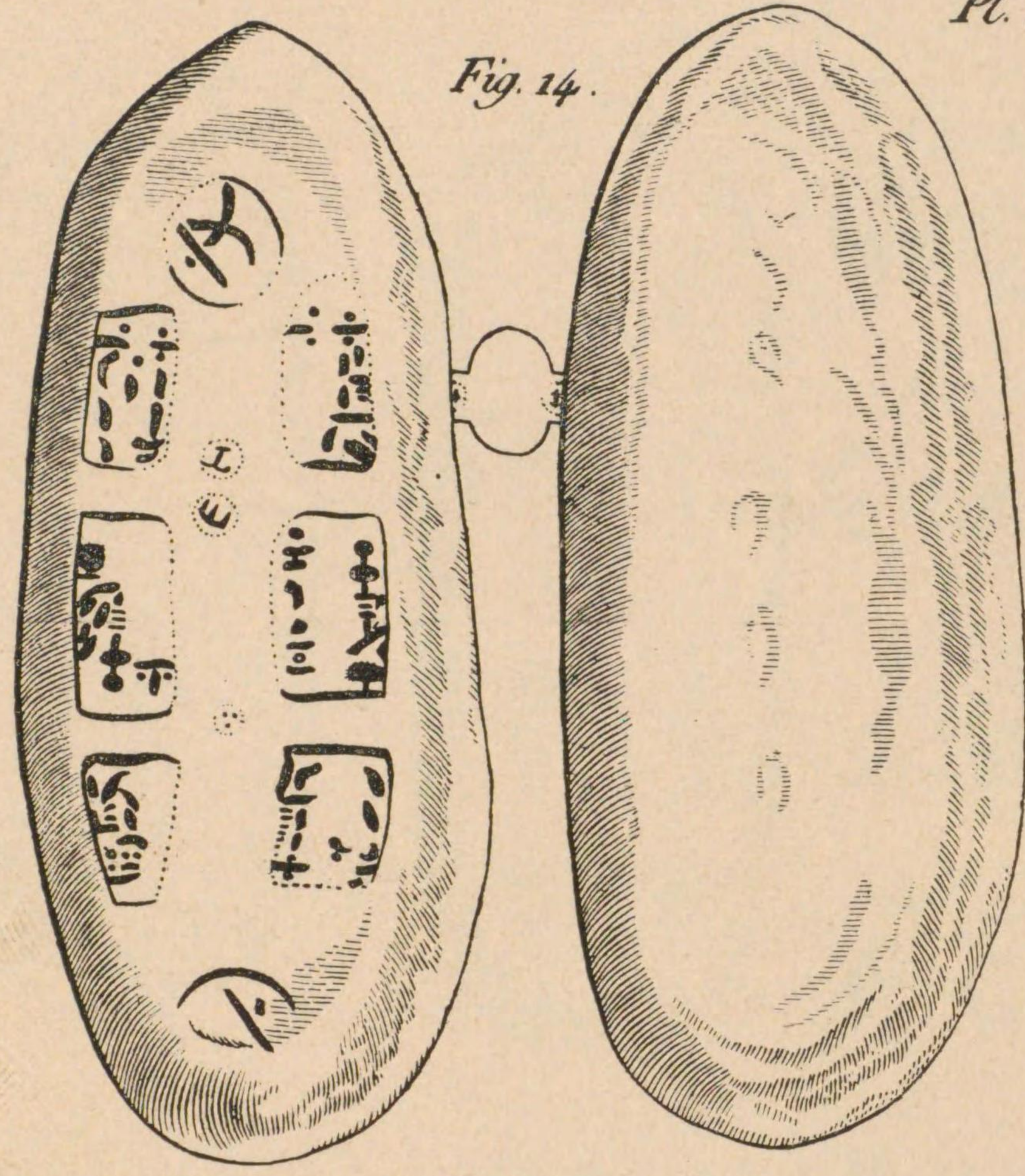


Fig. 14.



大
板
金

Fig. 16.

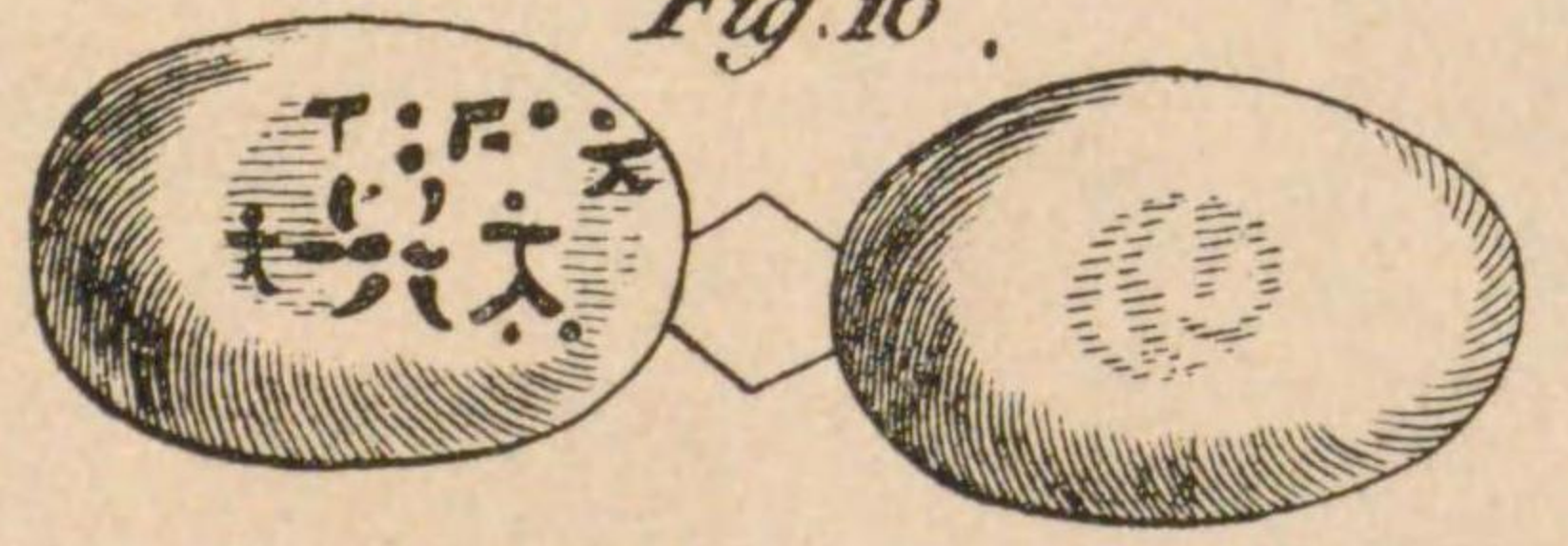
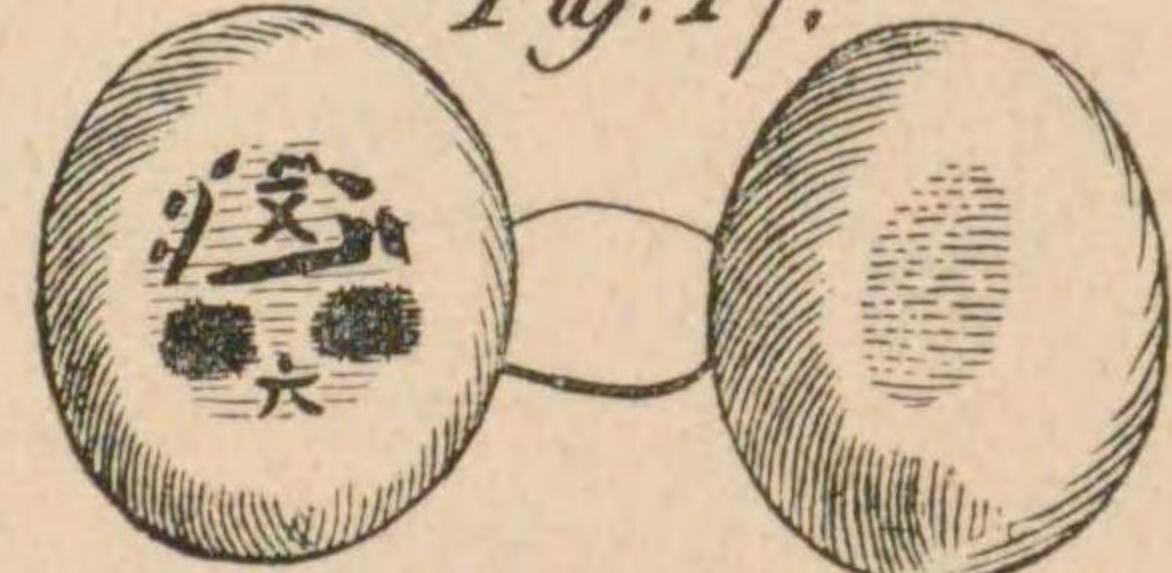


Fig. 17.



小

Fig. 18.

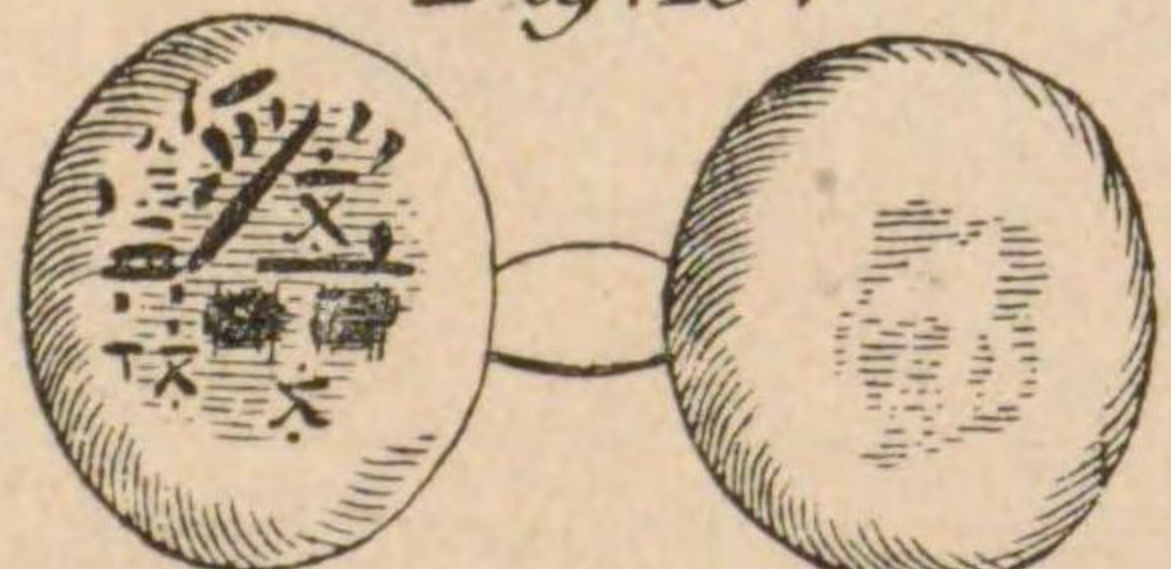
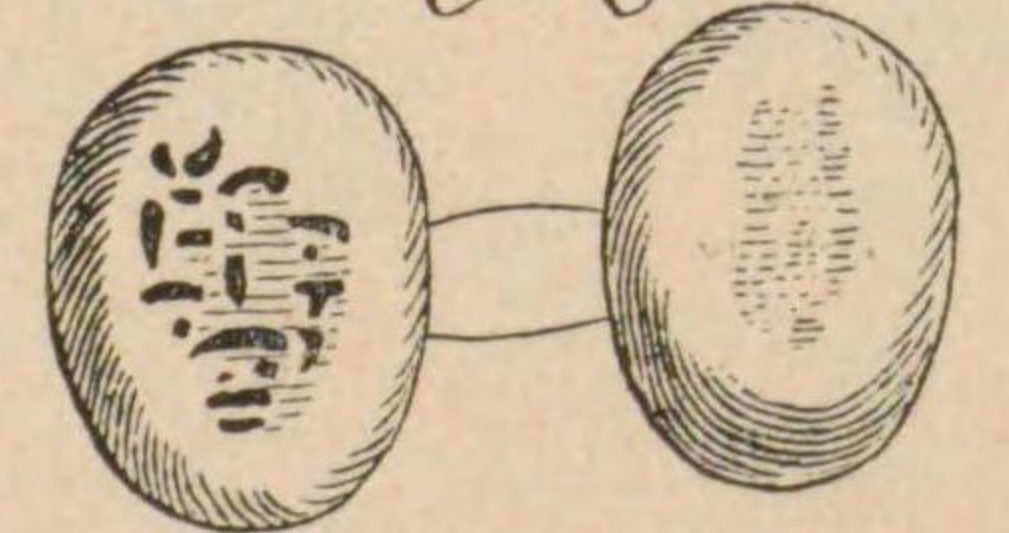


Fig. 19.

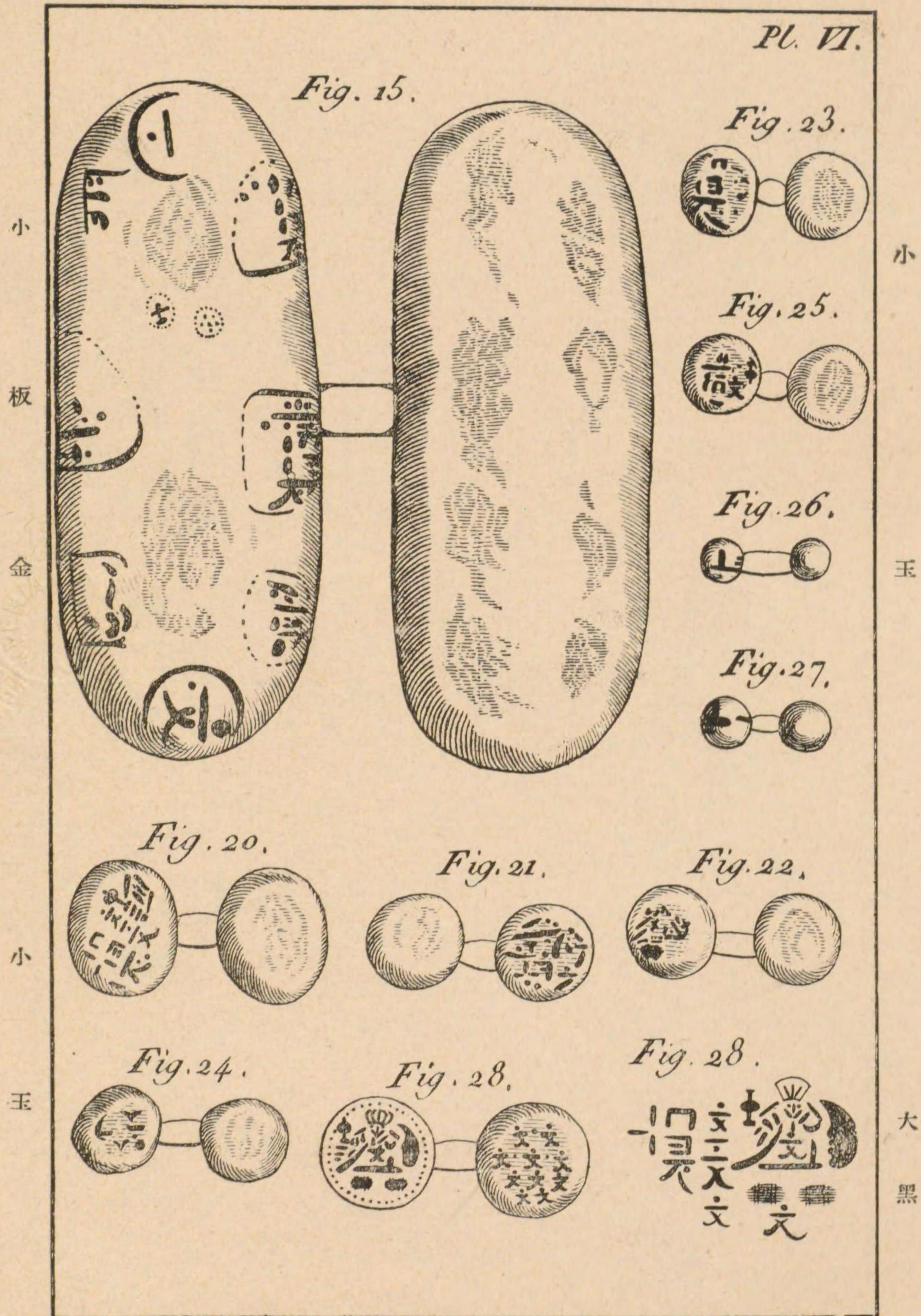


玉

圖五第考幣貨

貨幣考第圖

Pl. VI.



小

板

金

小

玉

小

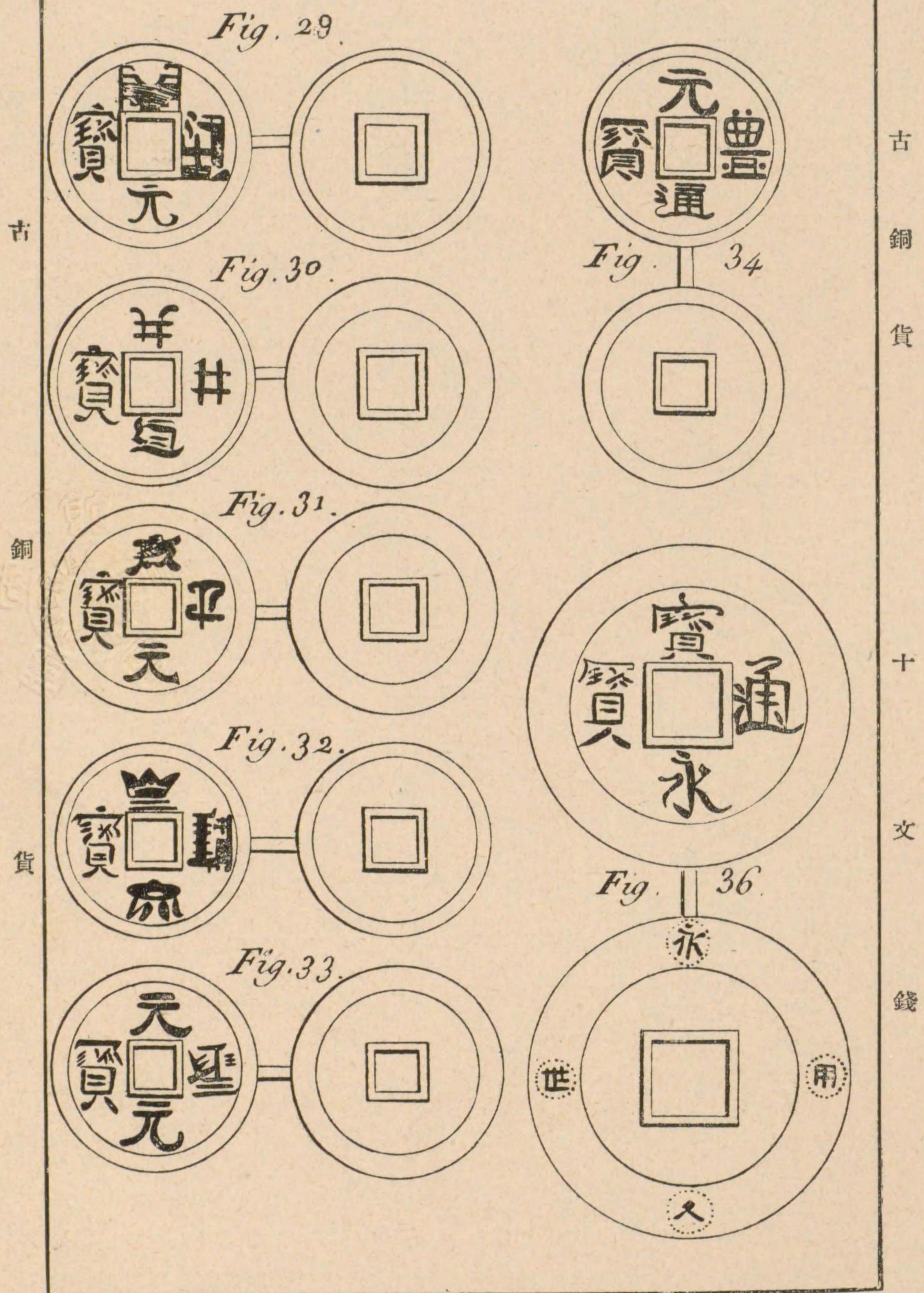
玉

大

黑

圖六第考幣貨

貨幣考第圖



古

銅

貨

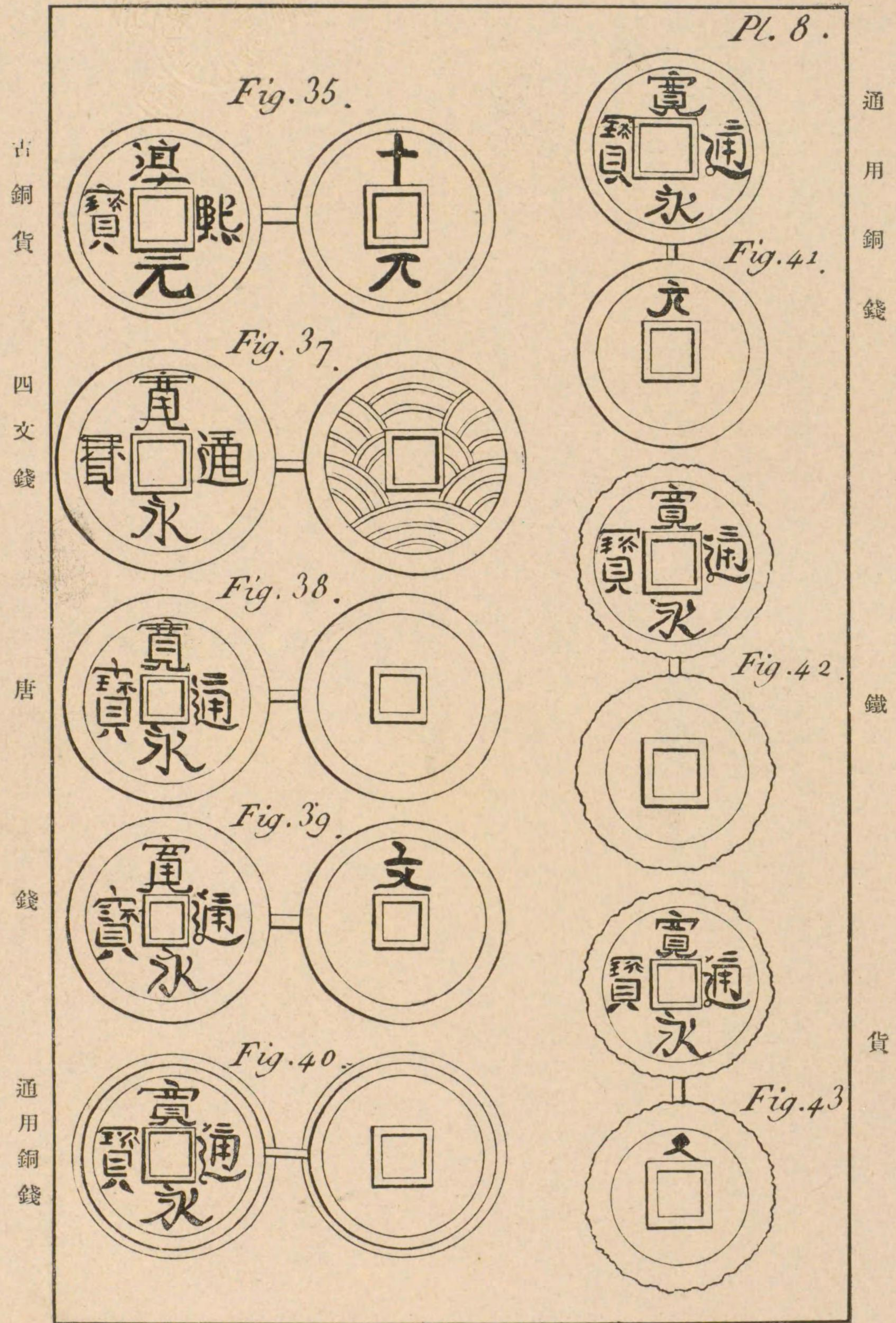
古
銅
貨

十

文

錢

圖七第考幣貨



圖八第考幣貨

555-47

序

ツンベルグの旅行記 *Resa uti Europa, Africa, Asia, förrättad åren 1770-1779* の日本紀行の部分だけを千七百九十六年巴里出版の、同地國立圖書館東洋文書係エル・ラングレ (E. Langles) の手になつた佛譯本によつて邦譯したものがこの本である。



ツンベルグ (Care Peter Thunberg) は千七百四十三年十一月十一日に瑞典のヨンケエピンク (Jonköping) で生れた。父は牧師であつたとも云ひ、或は炭坑の圖書係をして傍ら小商賣をしてゐたものであるとも云ふ。何れにしても早く死んでしまつて、その子供たちは余り樂でない境遇に置かれたのであつたが、幸にして母が商人フォルスベルグ (Forberg) と云ふ人と再婚したために苦しまずに濟んだと云ふことである。ツンベルグは十八歳までその土地の學校で教育をうけたが、非常に優秀な學蹟を示したので、遂に千七百六十一年にウプサラに送られ、その大學で更に研究を積むことになつた。主とし

ツンベルグ日本紀行——序

1600
1690
1780

圖書印

て學んだものは醫學及び博物であつた。ことに當時同大學には植物學の世界的大家大リンネ(Linnæus)が、齡六十三歳で猶嬰鑠として教鞭をとつてゐたので、これに厚く師事した。かくて在學九ヶ年の後 De Ischade と云ふ論文を呈出して博士の稱號を獲るに至つた。當時學資裕かならざる優秀の學徒にして旅行をして研究を完成せんと欲するものに學資を供する事を目的としてケホリング(Koehling) (一書に Koehzing とある) と云ふ人が獎學資金(Stipendium Kohleannum) と云ふを作つてゐたので、ツンベルグはこの補助をうけることになつた。依つてこれに僅かながら自分の貯金を加へて、千七百七十年八月十三日にウプサラを出發して、研究旅行の首途に上つた。丁抹を通つて、十月初めに和蘭アムステルダムに到着し、リンネの紹介により植物學者ブルマン(Burmah) に逢つたところが、非常に優遇され、その所藏する東洋の各種博物見本を分類し且つ命名することを托された。ツンベルグは之の仕事に美事な成績を示したので、ブルマンは非常に喜んで、他日ツンベルグを和蘭政府に喜望峯の博物調査を完成せしむるに最も適當な人として推薦するの決心をした。ツンベルグは和蘭に滞在すること僅にして、更にその旅行を續け

十二月初めに巴里に出た。巴里では王立植物園やゴブラン織工場を見學したり、病院で教授連中に従つて診察したり、又その講義を聽いたりした。そして翌年の七月末に又和蘭に歸つて行つた。ブルマンは一層ツンベルグに好意を示し、彼を喜望峯の動植物研究に派遣するために非常な努力をして呉れた。その結果二三の富裕なる特志者がこの費用を負擔して呉れることになつた。同時にリンネはツンベルグに、その生産物が餘り歐洲に知られてゐない日本に是非赴くべきことを慫慂した。幸にしてツンベルグの保護者たちはこの日本行の費用をも辨じて呉れることを約して呉れた。かくて準備的研究を終へた後、和蘭東印度商會の員外船醫と云ふ資格をうけ、極東に至る前に少くも二年間は喜望峯に留るべきことを約して、歐洲を出發した。千七百七十一年の十二月三十日にテクセル(Texel) から出帆し、翌年四月十七日にケープタウンに到着した。ツンベルグは直ちに研究に従事した。初めケープタウンの近郊を歩いて種々の調査をしてゐたが、續いて當時植民地と絶えず

闘争してゐたカフル種族、ホツテントツト種族の住む、阿弗利加内地に危険を冒して三回の大旅行をした。そのうちにこの地方の博物材料を悉く蒐集し得たし、又日本行の都合もついたので、千七百七十五年の三月初にこの地を出發して、極東に向つた。五月十八日にジャヅアのバタヅアに到着した。下船後直ちに日本行隊長船の主任醫に任じられたけれども、出帆までには三ヶ月の餘裕があつたので、この間にジャヅア島の産物習慣などを視察し、且つジャヅア語の語彙すら作つてゐる。六月二十日に愈々日本に向つてバタヅアを出帆し、八月十四日に長崎に入港した。時にツンベルグは三十三歳である。翌年和蘭使節に従つて、江戸に參府した後、豊富な研究を貯へて、十二月三日に日本を離れた。バタヅアには一月四日に到着し、七月までこゝに滞在して調査を續け、更に錫倫島に移つて、こゝにも半ヶ年滞在して調査をなし、漸く千七百七十八年二月六日にコロンボを發し、ケープタウンを経て和蘭に歸ることが出來た。歐洲を見ざること七年間、この間に完全にその學徒としての任を果たし、阿弗利加、印度、日本の豊富な博物材料を蒐集しえたのである。

和蘭で東印度會社の職を辭するや、英國に渡り、諸地訪問の後千七百七十九年三月十日に故國瑞典のイスタルド (Ystad) の地を踏むことが出來た。この九ヶ年間の大旅行を記述したものがこゝに一部を譯出した旅行記である。ツンベルグは不在中にウプサラ大學の植物學講師に任ぜられてゐた。依つて直ちに任に就き、更に千七百八十一年に小リンネ (大リンネは千七百七十八年に死す) が海外旅行中代つて植物園長をしたこともあるが、同年十一月に格外教授 (Professor extraordinarius) となり、八十四年に小リンネが死するや、植物學及び醫學の正教授に任ぜられた。この職を非常に眞面目に盡くし、八十五年には國王よりブアサ (Vasa) 勳章を授けられ、千八百十五年にはブアサ勳位のコンマンドゥル (Commandeur) に叙せられたが、これは學徒としては前例のない名譽であつて、大リンネすらこの榮をうくるには至らなかつたものである。ツンベルグの餘生は將來した莫大な植物標本の整理に費された。その結果は千八百二十三年に出版された喜望峯植物誌 Flora Capensis 及び千七百八十四年に出版された日本植物誌 Flora Japonica となつて表はれたのであ

る。猶前者に先だつて喜望峯植物誌前説 *Prodromus plantarum Capensium* を發表し、後者に續いて日本植物圖譜 *Icones plantarum Japonicarum* を出版してゐる。これらの著述は多くの新種を世に發表してゐるのみならず、リンネの植物整理法に改竄を加へたところが少くない。猶新種の發表に就いては以上の四著では勿論足りないので、少なからぬ数の小論文が發表されてゐる。かゝる學術的著述の外に彼は旅行記を千七百八十八年から九十三年にかけて四冊に分かつて出版したが、これは非常に興味のあるものとして、間もなく英佛獨各國語に翻譯された。かくてその學名漸く歐洲に高く、各國の多數の學會の會員に推薦され、ライデン及びロシアからは大學教授として赴任することを懇願されて辭退に苦しみ、リンネの高弟として出藍の譽があつた。四十二歳の時妻を娶つたが、彼女は子なくして千八百十五年に死んだ。かくて千八百二十八年にウブサラに近きツナベルグ (*Tunabets*) で永眠したが、常に健康であり、且つその隔てなき性格と親切な心とは万人から愛され、ことに學生から愛されてゐた。瑞典の或る學者は次の如く云つてゐる。『リンネ及びツ

ンベルグの二大學者は同じ方面を別な道で歩いて行つたものである。リンネは一般法則を求め、ツンベルグは特殊を離れずにゐた。リンネは時代に先行し、ツンベルグは常に時代と共にゐた。リンネは新植物を増加することはしなかつたが、ツンベルグは數萬の新種を發表した。リンネは過去の材料を整理したものであるが、ツンベルグは新智識を人々に授けたものである。』

かゝる高名の學者が百五十年の昔に日本に訪れたと云ふことは、日本にとつて非常な幸福であつた。長崎出島の和蘭屋敷に關係のある多くの外人が忘れられても、ツンベルグの名は、ケンペル、ジーボルトと共に、常に記憶に新なのは當然のことである。かゝる人の著述があればこそ、歐羅巴人は初めて極東に日本と云ふ文明國のあることを信ずるに至つたのである。かゝる人の訪日によつてこそ初めて泰西の文化が我が國に輸入されたのである。その功績は忘れることの出来ないものである。ツンベルグの名は桂川甫周、伊藤圭介の名に親しむ人々により日本の醫學界、植物學界の一大恩人として廣く知られてゐる。しかしツンベルグが同時に日本文化の鋭い觀察者であつ

たことは餘り深く知られてゐない。その理由はツンベルグの旅行記が之れまで翻譯紹介されなかつた故であると思ふ。この旅行記の翻譯がこれまでなされなかつたことは、思へば不思議なことである。先年長崎の故藤川次郎氏により獨譯本から邦譯されたことがあつたが、不幸にして出版する書肆なく、その勞は報られなかつたと聞いてゐる。誠に不思議なことである。これなども、日本人はツンベルグを植物學者、醫學者としてはよく知つてゐるが、日本文化の鋭い觀察者であつて、自然科學者としては珍らしい心理的洞察眼を持つてゐたといふ點を看過してゐる證だと思ふ。

ツンベルグの日本紀行が邦人に親まれない理由の一つとして、この瑞典原版は勿論のこと、英佛獨各國語の譯本も、容易なことでは手に入らない事があるであらう。譯者は震災後東京帝國大學圖書館に職を奉じてゐたため、復舊圖書の一つとしてツンベルグの佛譯本が圖書館に購入さるるや、幸にしてこれを讀む機會が與へられた。譯者は歴史の専門家でもなければ、東洋學に親むものでもない。さればこの尊むべき著述の歴史學的價値は臆げにしかわ

からない。たゞ素人考からして、日本文化史に關係のある人々にとつて貴重な文献の一つに違ひないと推察するに過ぎなかつた。私には歴史學的價値よりも別なこと、この本が面白かつたのであつた。譯者は久しく泰西の圖書にのみ没頭してゐたせむか、近時ことに歐洲の旅から歸つてからは、反動的に日本が知りたくてしかたがない。日本と云つても現代の歐亞混然たる日本でなくて、純粹の古い東洋的日本が知りたいのである。この希望に駈られて日本の古い本を見て見るが、いつもしつくりと來ない。私の頭のうちにいつか泰西と東洋の兩分子が融け合つてしまつて、古い日本の著者の見方だけでは満足出來なくなつてゐるのである。今ツンベルグを讀んで初めて、これでよしと云ふ氣になれた。ツンベルグを讀んで初めて自分の血のなかに流れてゐる、日本人の姿を捉むことが出來たやうな氣がした。誠にお恥しい話ながら、私はこれを讀みながら、死んだ祖父にでもめぐり合つたやうな氣がしてきて、思はず目頭が熱くなつたこともある。

かゝる因縁のある本であつたものだから、異國叢書的一篇として、本旅行記

が撰まれ、底本として佛譯本がとられた時、數の少い佛蘭西文學專攻者のうちに譯者が見出し難くて弱る旨を編纂當事者からきくに及んで、一も二もなく邦譯の依頼を承諾してしまつたのである。

然るに譯し始めてから大變なことを引受けたことに氣がついた。専門家が充分の時日をかけてなすべき事業であることがわかつたのである。譯者は一昨年十二月に翻譯を開始する豫定であつたが、以前の出版書肆の失脚から本叢書も倒底出版の見込のないやうに聞いたので、遂に放擲しておいた。然るに昨冬に至つて村上博士より再舉の運びに至つたから本年三月一杯に譯了すべき御命令をうけた。唯々諾々、本年正月に勢よく譯筆の稿を起したのだが、進むに従つて、金錢の數へ方、度量の數へ方、地名、人名、動植物名など數へ切れない難點に出會うので筆の溢ること夥しい。新出版者は豫約者から舊出版者同様に見られるのが苦しいとて、矢のやうに催促を寄越す。ほと／＼困り果てた。それでも吳秀三博士、村上博士、新村博士、さては石田學士の如き、斯界知名の學者から懇篤なる御教示を度々賜つたことに力を得て、漸く四月の中旬から印刷所に原稿を渡す運びになつた。思へば空恐ろしいことをしたものである。二度かゝる大膽な輕諾はすべきものでないと深く覺つた次第である。

藤川氏の原稿を借覽願ふ餘裕のなかつたのは至極残念であるが、幸にして石田學士の御好意により、東洋文庫所藏の瑞典原版及び英譯本の借覽を得たので、對照するの便を得た。譯者は瑞典語を解さないので、瑞典原版は充分に參照出来なかつたが、英譯本はとにかく通讀しておいた。

參照の結果、佛譯本は英譯本と非常に違ふことを發見した。英譯本は瑞典原版をそのまま譯したものである。佛譯本は譯者の意思により、原本の段落を變へたり、章を新に分けたりしてゐるばかりでなく、原本が覺書風に種々の事項が紀行のうちに混然と入つてゐるのに手を加へて、植物は植物、動物は動物と一纏めにしてしまつてゐる。そのために同じことがすぐ後に重出したり、或は叙述が突然外に飛ぶ不便は起こしてゐるが、まとまつた概念をうる便宜はあるかと思ふ。私はこれが體裁を整へ、少くとも重出の箇所は省略した

いと思つたが、遂にそれを敢行する勇氣なく、そのまゝ譯しておいた。

佛譯本には特に最後に著者の日本貨幣考が追加して譯されてゐる。そのために旅行記の江戸滞在中の記事のうちにある、日本貨幣の説明の條が省かれてゐる。私は英譯本に従つてこれを補はふかと思つたが、やはり佛譯本のまゝとしておいて、その代り日本貨幣考を譯出して、附け加へることにした。

佛譯本にはラマルク (Lamarck) の註及びラングレの詳しい註が入つてゐる。この故に佛譯本が有名なのであるが、私はこれを省いてしまつた。私の譯出した日本の部分では、ラマルクは動植物について、極く簡単に註を加へてゐるのみで、その數も少く、且つ舊い學說であるから、一般の讀者にはことに興味がないと思つた。ラングレの註は文化史關係のことで、その數も多く且つ詳細を極めてゐるが、大部分ケンプエルやシャルヴォアによつた註か、或はフランスの海外政策の批判である。前者の原本は皆この叢書のうちに譯出されるし、後者は一般讀者に興味が少ないからと思つて、共に譯出しなかつた。

譯者は村上博士の御意見に従つて、更に日本語彙を省略してしまつた。こ

れは徒らに多くの頁數を増すものであるし、且つこれを譯すと日本語を日本語に譯すと云ふ妙なことになるからである。然しツンベルグのこの事業は忘れてならないものである。又蘭人の日本語の誤、習慣、古語、方言、地方的發音などが分るものがあるので、省略するのが惜しい氣もしたこともある。この語彙も佛譯本は特色を持つてゐる。瑞典原版及び英譯本は瑞典語及び英語をアルファベット順にならべ、これに一々相當する日本語が書いてあるのだが、佛譯本では日本語をアルファベット順に並べ、これを一々佛譯してあるのである。

譯者が試みに加へて見た註その他凡て譯者の加筆には特に「」形括弧をつけて、「」形括弧をつけた著者の註とは區別しておいた。譯者の註の數の少く、當らざるものが多いことについて批難あるべきことは、譯文の拙なこと及び誤譯といふことについて批難されると共に、豫め覺悟してゐる。

昭和三年五月

ツンベルグ日本紀行——序

追記

Thunbers の正確なる發音は結局日本字では書けないらしい。誤つた讀方かも知れないが、最も普通に使はれてゐるものに從つて、ツンベルグとしておいた。

五十二頁二行目「一マースは百コンデリンである」とあるは「十コンデリンである」の誤である。従つて五十三頁一行目に「百分ノ一マース」とあるのも、「十分ノ一マース」と訂正して頂きたい。

ツンベルグ日本紀行 目次

第一章 バタヴィアより日本に至る危険な航海……(一)

- 準備(二)——乗船(三)——任務——使節——補助船(四)——出帆(五)——ブウロサバト島(六)——暴風(七)——ラ、ソール(八)——支那魚船(九)——間歇熱——大雨——温度(一〇)——燐光——臺灣島(二)——大颶風(三)——難破の編年史的記述(四)——ブルグの難破(六)

第二章 長崎到着 密輸入に對する日本人の要愼……(一九)

- 長崎入港準備(一九)——乗組員表(二〇)——船長の服(二一)——入港(二二)——幕府の新制限(二三)——ブルグ號事件(二四)——番所衆の來船(二五)——日本人の警戒(二六)——

乗員點呼—人夫(二)—旅券—不時の場合の船と陸との交通(二九)—
重な検査(三〇)—その原因(三一)—密輸入(三二)—賠償金(三四)

第三章 日本に通譯……………(三)

通譯の必要—階級(三六)—筆生(三七)—通譯の蘭語—智識慾(三八)—醫學研
究(三九)

第四章 歐洲人の交易……………(四)

初期(四〇)—制限(四一)—千六百八十五年の制限(四二)—花銀(四三)—交易方法
(四四)—商館長—歸航の積荷(四五)—銅器—往航の積荷(四七)—個人の商品
—ウニコルン(四八)—人參(五〇)—禁輸出品—陶器—衝量(五一)—カンバン
錢(五二)—個人の買入品(五三)

第五章 支那人の交易……………(五)

歴史—支那人の取扱(五五)—交易品—交易時機(五六)—日支兩國人風俗
上の差異(五九)

第六章 長崎の町及港 出島……………(六)

概況(六二)—市政—長崎と外國船(六三)—地勢—日本船の漕法(六三)—長崎
奉行(六四)—出島の設備—橋(六五)—出島の家屋(六六)—通譯學校—オトナ
—出島の監視(六七)—下痢(六八)

第七章 江戸に出發まで長崎滞在中の記事……………(七)

役人との親交—本草の發見(六九)—植物採集の願出—許可取消の理
由(七〇)—再許可(七一)—家蓄の陸揚(七二)—家蓄の飼養—鳩を羨む(七三)—日
常用品の陸揚—船の検査—銅の積荷(七四)—貴人の訪船—水夫の死
(七五)—醫官の交代—滞留歐人の精神状態(七六)—その日常生活(七七)—日

本人の奴僕―火鉢(七)―滞在歐人の費用―個人買品の積込(七)―高
鉾島―鼠島(八)―和蘭船の出帆―西暦の元旦(八)―奴隸の逃亡(八)―
總決算(八)―植物採集(八)―參府準備―献上品(八)―日本の大晦日―
日本人の利息―日本の元旦―繪踏(九)―商館長の暇乞―荷物の檢
査(九)

○節八章 江戸參府紀行……………(九)

出發―使節及隨員(九)―見送―隨行の番所衆(九)―大通詞―料理人
(九)―乗物(九)―道具類(九)―歐人の寢具―日本人の旅行法(九)―一行
(九)―諫早―日本の宿の待遇(九)―小遣―大村―彼杵(一〇)―嬉野―
牛津―溫泉―鹽田の土甕(一〇)―肥前―肥前の陶器(一〇)―嘉瀬川―
佐賀(一〇)―村落と都會との區別―佐賀地方の婦人―田代(一〇)―
悲劇的事件―飯塚―冷水峠―旅中の外人の待遇(一〇)―日本の道

路―里程標(一〇)―道路の整備―旅行法(一〇)―草鞋―脚絆―股引
―袴―馬(一〇)―駕籠―乗物―輿夫(一〇)―木屋瀬―小倉(一一)―祝
儀―庭(一一)―家内の模様(一一)―寢具―調度(一一)―下ノ關海峽―
太閤遭難記念碑(一一)―下ノ關港―その商業(一二)―遊廓―下ノ關
の位置(一二)―アハ海苔―西班牙煙草―商品注文―乗船(一二)―船
室割―乗船の構造(一二)―下ノ關出帆―家室―上ノ關(一二)―地ノ家
室―日本人の沐浴(一二)―御手洗―鴨―兵庫(一二)―西ノ宮―神崎
―淀川通航―大阪の宿(一二)―密柑―熨斗―祝儀(一二)―大阪滞在
―大阪(一三)―大阪城代(一三)―大阪出發(一三)―伏見(一三)―車(一三)
―掛茶屋―都の宿―所司代謁見―都の形勢(一三)―貨幣鑄造―神
職―小遣錢(一三)―商人に注文―都出發(一四)―琵琶湖の鮭―草津(一五)
―關(一五)―肥壺の惡臭(一五)―四日市―熊野の比丘尼(一五)―桑名
(一五)―宮灣―宮(一六)―池鯉鮒―岡崎―吉田(一六)―新居―濱名湖

―新居の關所―舞坂(二四)見附―掛川―大井川(二四)渡河設備―渡河(二四)島田―江尻―蒲原―三島(二五)―富士川―富士山(二四)―箱根山越―植物採集(二四)―箱根材(二四)―箱根の關所(二四)―小田原―酒匂川(二五)―小磯―馬入川―戸塚(二五)川崎―品川―江戸の海(二五)―見物の群(二五)―日本橋―使節館(二五)―所要日數(二五)―通過國名(二五)

學者の訪問(二五)―天文學者との對話―醫者との對話(二五)―岡田養仙―栗崎道巴―桂川甫周―中川淳庵(二五)―日本に傳來された洋書―著者の評判(二五)―江戸の火災(二六)―江戸の家屋―祝儀―謁見の準備(二六)―貴人の道中―柳營(二六)―その警備(二六)―靜座の苦痛―諸侯の好奇心(二六)―使節の謁見(二六)將軍の好奇心―謁見室(二七)―百壘敷―宮殿の家具―世子の宮殿(二六)―元老訪問(二六)―奉行訪問―暇乞の謁見(二七)―日本人からの贈物―離婚された

女(二七)―江戸の町―諸侯の下屋敷(二七)―家具の賣込―桂川甫周及中川淳庵(二七)―貴人の病(二七)―花柳病藥(二七)―日本醫の診察法(二七)―刺絡―修業證明書(二七)―公方の日光參拜(二七)―その準備(二七)

江戸出發(二八)―貝細工―小田原(二八)―箱根越―セキコク―イハオモダカ―富士山(二八)―府中―島田―府中の買物―蚊(二八)―掛川―乞食―眼病―京の謁見(二八)―金員の贈呈法―荻野臺洲(二八)―寺院見物―大佛殿(二八)―大佛像(二八)―三十三間堂(二八)―伏見―淀川下り―大阪(二八)小鳥の通―植物園(二九)―鑄銅作業(二九)―二種類の下僕(二九)―兵庫出發―祝儀(二九)―檢閲―長崎到着(二九)

節九章 日本の位置及び氣候 ……………(二九)

日本の位置―日本の名稱(二九)―日本發見―日本の近海(二九)―江

戸の海—高山(二六)—土質—暑氣—寒氣—雨(二九)—氣温(三〇)—天候(三〇)

第十章 日本人の顔貌及性格……………(三〇)

體格—皮膚の色—顔貌(三〇)—特質及缺點(三〇)—文明の程度(三〇)—自由(三〇)—外人に對する態度(三〇)—禮儀(三〇)—好奇心(三〇)—發明心(三〇)—經濟(三〇)—寡慾—清潔(三〇)—忍耐—正義(三〇)—盜心—猜疑心—迷信(三五)—自負心(三〇)—勇猛心(三七)—怨恨(三〇)

第十一章 日本人の姓名及服裝……………(三一)

姓名(三一)—女の名—稱號—國民的服裝(三一)—帶—襟(三四)—袖—脫衣法—勞働者の服裝(三五)—羽織—袴(三三)—股引—袴—着物の布(三七)—日本着の便不便(三三)—脚絆—足袋—草履(三九)—草鞋—

下駄—雪駄(三〇)—足袋—男子の結髮(三三)—婦人の結髮(三三)—冠物—雨合羽—紋(三三)—懷紙(三四)

第十二章 日本の政治組織……………(三五)

行政區劃—大小名—宗教的皇帝(三五)—神武帝(三三)—内裏の稱—その權力(三七)—聖體(三三)—食器—衣類—妃—財政(三九)—高位の宗職—内裏の住居(四〇)—所司代—内裏(四二)—王朝と幕府(四二)—頼朝—秀吉—公方(四三)—歴代天皇の稱—歴代將軍の稱(四五)—家治—世子(四六)—諸侯(四七)—統治法—村—町(四八)—道中の設備(四九)

第十三章 日本の宗教及儒教徒……………(五〇)

日本の宗教組織(五〇)—寺院(五二)—二大宗派(五二)—神道(五三)—神社(五五)—參拜法—神官(五五)—佛教(五七)—寺院(五八)—祭日—五大

祭日(二五) | 祭日の行動 | 伊勢詣(二六) | 盲人 | 山伏(二六) | 誓事 | 尼寺(二四) | 宗教 | 基督教輸入(二五) | 迫害(二六) | 日本役人モロの事件(二七) | 島原の亂(二八) | 儒教(二七)

第十四章 日本語……………(二七二)

支那語との干係 | 著者の學習(二七) | 和蘭人の日本語に對する態度(二七) | 辭書(二七) | 文法(二七) | 外來語(二七) | 日本の圖書(二八)

第十五章 日本の司法行政……………(二八四)

法の精神(二八) | 死刑 | 連座(二八) | 牢獄 | 課税(二八) | 課税法(二八) | 警察制度(二八) | オトナ | 警官 | 木戸 | 火災の要慎(二九) | 處刑の數(二九) | 法の公示(二九)

第十六章 遊女……………(二九四)

遊女 | 遊女の歴史(二九) | 遊女の名稱(二九) | 滯留外人と遊女(二九) | 遊女に對する批判(二九) | 禿 | 混血兒(二九) | 遊女の後身 | 節制(三〇) | 日本婦人の化粧(三〇) | お齒黒(三〇)

第十七章 日本人の風俗習慣……………(三〇三)

土産(三〇) | 噫氣 | 侍童 | 婦人の袖物(三〇) | 眉を剃る | 育兒法(三〇) | 學校 | 子供の非禮 | 結婚(三〇) | 貞操(三〇) | 妾 | 葬式(三〇) | 回向 | 墓地 | 大名行列(三〇) | 國主と蘭人(三〇)

第十八章 日本に於てなしたる動物學的觀察……………(三二四)

馬 | 牛(三二) | 豚 | 羊 | 犬 | 猫(三二) | 家禽 | 狼 | 狐 | 犬 | 猫 | 鼠(三二) | 兎 | 水牛 | 馬 | 江戸の珍獸(三二) | ベリカン | 鴨 | 白鷺(三二) | 漁業(三二) | カミキリムシ | 鱸(三二) | マツカサ | キタマクラ | 鰻

(三二) | ヤマンコ | コチ | 江戸で見た動物(三三) | 鯨 | 昆虫(三五) | 螢 | 蟬 | 蛇 | 山椒魚
(三三) | シガキ | 魚類(三四) | 鯨 | 昆虫(三五) | 螢 | 蟬 | 蛇(三七) | タ
ツカソ | 貝類(三八)

第十九章 日本の鑛物……………(三三)

金銀の發掘 | 金(三三) | 銀(三三) | 銅 | 鐵 | 琥珀(三四) | 硫黃 | 石炭
| 瑪璃 | 馬腹中の石(三五) | 其の他の鑛物(三六)

第二十章 日本人の食物其他家事に關する物……………(三八)

日本の食物 | 食事法(三八) | 食事の回数 | 米飯 | 味噌(四〇) | 鯨肉
| 料理法(四二) | 果實 | 鯛 | 練 | 鮭(四二) | 介魚 | 肉食 | 藁麥(四五)
| 奈良漬(四四) | 梅干 | 飲料(四五) | 酒 | 茶(四六) | 濃茶 | 道中茶器
| 煙草(四七) | 煙管 | 煙草盆(四八) | 煙草入(四九) | 石鹼 | ランプ |

蠟燭(五〇) | 發火法(五一) | 封印(五一)

第二十一章 日本人の祭、娛樂及遊戯……………(五三)

二大祭日 | 盆(五三) | 諏訪神社の祭(五三) | 芝居(五七) | 藝者(五九) |
雙六(五九) | 花札(六〇)

第二十二章 日本人の武器……………(六一)

弓矢 | 小銃(六一) | 大砲 | 刀劍(六一)

第二十三章 日本の農業……………(六五)

日本の農夫(六五) | 肥料(六七) | 草刈 | 山上の田畑(六八) | 畑 | 農産
物の種類 | 米作(六七) | 藁麥(七〇) | 小麥 | 大麥(七二) | 菜種 | 豆類
(七三) | 蔬菜類(七四) | 生姜 | 灌漑法(七五) | 香料 | 果實(七六) | 觀賞

用植物(三七七)―染料植物―綿―桑(三七八)―竹―樅―漆―樟腦の製法(三七九)―油類―砂糖(三八〇)―日本の農政(三八二)

長崎附近の植物―サルトリイバラ―無花果―朝顔(三八三)―イヌサ

ンセウ―蔓―麻(三八三)―歐洲蔬菜―甘藷(三八四)―杜松―石菖―茗萆

―常春藤(三八五)―黄楊―竹(三八六)―ニシキギ―アカザ―葵―薄荷(三八七)

―ヤマノイモ―唐辛子(三八八)―煙草―鈴蘭―藁麥(三八九)―昆布―油

搾取法(三九一)

江戸參府途上所見の植物(三九二)―菜種(三九三)―豆類―巴旦杏(三九三)―

梅櫻林檎梨―柏―クロモジ(三九四)―ヘビノボラズ―スカンポーウ

ツギ―歐洲産植物(三九五)―楓(三九六)―クチナシ―南星科植物(三九七)―

杉―海苔(三九八)―菱―榛―躑躅―棕栢(三九九)―枇杷―味豆―胡麻(四〇〇)―

―ヤマボオキ―茶―ナギ―江戸所見の植物(四〇一)―モクサ(四〇二)―

ミヅイテフ―黄楊(四〇三)―蓮―シキミ(四〇四)―センダン(四〇五)

再度の植物採集―印肉―蘭(四〇六)―百合―蕃茄(四〇七)―サザンカー
松露―大豆(四〇八)―ヤマモ、(四〇九)―茶の製法(四一〇)

第二十四章 日本の暦……………(四一三)

太陰暦―十二時(四一三)―計時法―年齢計算法―日本紀元―十二支

(四一四)―日蘭對照の暦(四一五)―潤年(四一六)―年中行事(四一七)

第二十五章 日本の科學藝術及産業……………(四三三)

日本の科學及産業(四三三)―建築(四三四)―厨房(四三五)―便所―庭―倉―

風呂(四三六)―採暖法(四三七)―家具―扇(四三九)―鏡―屏風(四四〇)

天文學(四四一)―物理學化學―法律學(四四二)―言語(四四三)―倫理―歴史

(四四五)―兵術―印刷(四四六)―版畫―幾何及地理(四四七)―詩及音樂(四四八)

醫學―按摩(四四九)―内科(四五〇)―灸(四五二)―鍼醫(四五三)―疝氣―眼病―

風邪—リウマチ—下痢(四三)—痘瘡—麻疹—粟粒疹熱(四四)—花柳病(四五)

航海術—方位(四七)—漂流日本人(四九)—船の虫害豫防(四五)

産業—ソハ(四五)—硝子—時計—刀劍—製紙(四五)—米糊—オレニの汁(四五)—普通の紙(四七)—外國の紙—漆器(四五)—紙布(四〇)

第二十六章 日本人の商業……………(四六)

内地の商易(四二)—衝器(四二)—茶—醬油—絹—陶器(四三)—支那との交易(四四)—葡萄牙との交易(四五)—和蘭との交易(四七)

第二十七章 日本出發までの記事……………(四七)

漁火の美—蘭船到着(四七)—尾張侯の死(四七)—船員の病氣—ウニコルン—新奉行の訪船(四七)—長崎奉行の名—出發の決心(四七)

乗船—出帆(四七)

日本貨幣考

第一章 金貨……………(四七)

金貨—大判(四七)—小判—舊小判(四七)—新小判(四八)—一分金(四八)—舊一分—通用一分—舊半一分(四八)—甲州金(四八)—甲州判—甲州一分(四五)—二朱金—一朱金(四六)

第二章 銀貨……………(四七)

銀貨(四七)—五匁銀(四八)—南鐐銀(四九)—丁銀(四九)—小玉(四九)—大黒(四九)

目次

第三章 銅貨 (四九六)

ゼニ—丁百及九六百(四九六)—支那錢(四九七)—古錢(四九八)—十文錢(四九九)
—四文錢—唐錢(五〇〇)—通用錢(五〇一)

第四章 鐵貨 (五〇二)

ド—サ錢—通用貨幣(五〇二)



ツンベルグ日本紀行

帝國大學助教授 山田 珠樹 譯註
文學士

第一章

パタゴニア出發—日本諸島に到るまでの危険な航海—千六百四十二年より千七百七十五年に至る間に日本近海に起りし有名なる難破の編年史的記述。千七百七十五年〔安永五年〕六月二十日より八月十三日に至る。



ツンベルグ日本紀行

準備

ツンベルグ日本紀行

日本行の舟が出帆すべき時期が近づいて来た。かねて私に對して特別の友誼を示して呉れてゐた參議官ラデルマヘル氏は、私をパタゴニアに引き留めて置かうと思つてあらゆる手段を講じた。徒らに奨めるよりも私に利益になるやうなことが却つて効力があるだらうと思つて、當時缺員であつた或る醫官の席に私を推薦して呉れたりした。この醫官の職は年に五六千リクダールの収入があるものであつた。然しいかにするとも私が義務と信ずるところを動かし、又和蘭にゐる保護者たちと私が堅く約した約束を無にさせることは出来なかつた。それに、僅か三ヶ月この島にゐただけであつたけれども、この土地では余り正直すぎるとんだ厄介を引きうけなければならなく、幸運に一足とびに行きたいなら、そんな厄介は御免蒙るべきものだと言ふことを深く考へさせられてゐた。それで、切角私に非常に爲になる世話をして呉れた友人を悲しませるのは心苦しかつたけれども、私は兎に角

乗船

日本行の旅に必要な支度を悉く調べた。絹の服を數組、飾組のついた毛織の服を數組、その他各種の贅澤品を注文した。これは新しい土地に素晴らしい様子で出たい爲めであつた。それといふのが、日本人は我々博物學者が稀有な珍らしい動物を調べる時と同じに、歐洲人に對して鋭い注意を向けるからである。

Stavenisse

結局千七百七十五年六月二十日にスタヴェニッセ號船上の人となつた。これは日本行の三層甲板の船である。和蘭東印度會社が日本に二艘より外に船を差し立てなくなつたのは余程前からのことである。この遠征には大概パタゴニアの攝政が指揮をとつて行く。攝政はゼラント州の木材で造つた三層甲板の船二艘を特にこのために用ひるのである。止むを得ざれば少くとも一艘は特にこの種の船とした。東印度のうちこの近海が最も危険な區域であることは衆知の事實だからである。

ツンベルグ日本紀行

任務

航海中の私の位置として、派遣隊の主醫官と云ふこととなつてゐた。そして日本に着いたなら、使節に扈從して、皇帝の居所なる江戸に行く。その時は使節の侍醫と云ふ資格になる筈であつた。然し印度會社が私に授けたこの職務から生ずる仕事の外に、私は和蘭にゐる時、私が遍歴する遠隔の土地で、出来るだけ種子や草花や灌木や樹木を聚集して、アムステルダムAmsterdamの植物園その他和蘭の知名の人々に持ち歸ることを約してあつた。

使節

Van-Essファン・エス氏を船長とする我々の船には、日本に於ける貿易の長であり且つ皇帝に對して派遣される使節である、Foethフェイト氏が乗り込んだ。この人はこれで四回目の航海であつて、商務上の補助者として、貨物掛Halingaハリンガ氏及び四人の助手をつれてゐた。

補助船

吾々の船の補助船として行を共にすべき今一艘の船は、Bleyenbungブライエンブルヒと云ふ船名であつた。吾々の船よりやゝ小型であつて、これに

は貨物掛一人及び助手一人が乗組んでゐた。船長は上級の役人たちに對して食事を供したが、その費用の一部は彼が負擔し、一部は印度會社が負擔した。更に船長はリキユールやビールをも振舞つた。

兩船上の役人たちは船中及び少くも一年はかゝる日本滞在中の私用を辨ぜしむるために、皆各々一人乃至數人の奴隸を連れてゐた。日本人は百余年來この許可を與へてゐた。然し奴隸は和蘭商館を出ることは許されてゐなかつた。最も寛大な時にも和蘭商館の所在地である長崎の町を出ることは許されなかつた。

出帆

七月二十一日の午前十時に吾等は錨を上げた。大砲を發ち、帆をあげてバタヴィアの淀泊所を出た。然し間もなく淀泊所の外でまた錨を下ろした。吾々は航海に必要なものを整理するために、こゝにその口及び次の日を送つた。

二十六日の朝、風と潮の都合よく、Bancaバンカ海峡に入ることが出来た。

この海峡はほぼ英佛を隔ててゐる海峡位の幅がある。左手にスマトラの陸がある。平淡で低い。右手にジャバの陸がある。兩島とも海岸は森に蔽れてゐる、

二十七日は僚船を待つために投錨してゐた。僚船は吾々の船より速力が遅いから、その結果後に残こされてしまふのである。

二十八日には共に錨を上げて、再び航海を續けた。

三十日には幸ひに海峡を出て、大洋に浮ぶことが出来た。ブライエンプルヒは數發の大砲を放つて我が船に禮を致し、我が船も亦之に應じた。役員たちは互に航海の幸あらんことを祈りあつた。

七月三日に赤道を通過した。

サブウロ、
サバトロ岩

八日にポウロ、サバトロ岩を望んだ。この岩は遠くから見れば船に似てゐて、近くで見ると踵を切り捨てた靴に似てゐる。この形からして今の名がついたのである。(西班牙人は Poulo Zapato と書く。Sapato と

暴風

は葡萄牙語で靴の意である。Poulo とはマレイ語で島の意である。御覽の如くとんでもなく離れた二つの土地に發した二つの言葉が、併合して出来たもので、言葉は互に嘘ぞ驚いてゐることと思ふ。

十日に支那の陸地を見ることが出来た。支那の土地は、航海者に今渡海中如何なる位置にゐるかといふことを知らせて呉れるので、日本に行く航海者が特に見たがる陸地である。

十二日には、現在我々があるやうな高緯度の地點ではよくある例の暴風の洗禮をうけた。船長は賢明な経験家であるから、直ちに帆の一部を絞り、高いマストを低くし、帆架を引きよせさせた。航海中暴風に襲はれる毎に常にこの注意は繰り返して行はれた。收めえた良効なる結果はこの注意の賢明にして有効なことを證して余りある。ブライエンプルヒは其だ不良なる帆船なので、常に我が船より後れてゐる。帆の有らん限りの力を出してゐるのだが、第一に今の暴風にマストの

頂を折られてしまつたし、續いてマストは一つ一つ順次に取られてしまつた。やがて餘り横揺れがひどいし、浸水が激しいので、^{Macao}マカオに着かないうちに危く沈む所であつた。マカオから^{Canton}カントンに曳船され、こゝで修理をうけることになつた。その結果日本行の航海を續けることが出来なくなつた。積荷の大部分は黒砂糖だつたので、悉く駄目になつてしまつた。

十七日に我等は、激しい雨風を伴ふ恐ろしい暴風に見舞れた。雷鳴はなかつた。二日間寸時も止むことなく續いた。

二十日になると、暴風も収り、轉覆した支那の漁船が洋上に漂ふのが見えた。どう見ても、漁夫は溺死してしまつたもののやうであつた。

二十二日に再び支那大陸を望んだ。四艘の漁船がやつて来て、吾等の船に數種の魚を呉れた。そのうちに、^{La sole}ラ・ソールと呼ぶ綺麗な海扇があるのを見た。透明であつて、赤と白の殻がついてゐる。この故に和

ラ・ソール

蘭人はこれを月の殻 (^{La sole}Maan Schulp) と名づけてゐる。 (^{La sole}ラ・ソール・Ostrea pleuronectes) 凡て動物質のものは多少とも磷酸を含有する。腐敗すれば益々その量は増す。同時に動物質のものは熱素を發散させる。そこで、多分磷酸と熱素との結合が行はれるのだらう。よく海上に現れる燐光はこれに基くものである。大氣中に乾されてゐる海魚も時々同種の光を出す。猶又大鰻や外套蟹 (^{Cancer nautis}Cancer nautis) をも見ることが出来た。我々は、この魚と交換に、米や火酒を與へたところが、非常に欣んで受け取つた。

支那漁船

支那の魚船は大きく又長いが、薄い木の板で造つてあつて、船首船尾共に丸く、甲板を一個持つてゐる。舳は鱸よりも幅廣く、且つ舵の方に向つて凹んでゐる。帆檣一本、帆一枚である。乗組員は四、五人で、荒海に夜と晝となく漁に出かけるのである。この近海を既に度々航海した我が船の役人たちの話によれば、天氣晴朗の日には、海は見渡す限り

間歇熱

この支那魚船で蔽れるに至ると云ふことである。
バタヴィア出帆以來、數名の水夫が間歇熱に冒かされてゐた。しかし寒氣が増し、大風が度々起るに従ひ熱も退いて行つた。ボンチウスPontiusによれば、(Jacobus Pontius, De medica Indorum) 彼の時代には隔日熱は印
度では稀に見られるだけであつたといふ。今日ではあらゆる種類を、
しかも甲乙なくどの地方にも見ることが出来る。

大雨

暴風の後に續いて來る大雨も亦暴風に劣らず厄介なものである。
なぜなら、あらゆる品物が大抵濡れてしまつて、展げて乾かす勞をとつ
ても、それでも大變傷んでしまふ。

温度

天氣の良い日には、我等の現在在る高緯度の土地の氣温とバタヴィ
アの氣温とは大差を見出し難い。バタヴィアの町では華氏の寒暖計
が八十度から八十六度に昇るが、この地では七十九度から七十八度以
下には降らない。

燐光

蝦や鯨科のものやその他の魚類を乾かして保有しておいたが、夜に
なると誠に美事な眺を呈して呉れる。私の船室内でそれらのものが
燐光を發するのである。私は蝦の體は一部分が光るだけで、主として
尾の近くが光り、他の部は暗いことを觀察した。

部屋から出して、甲板のやうな所で大氣中に曝しても、別に光は増さ
ない。私は切りにその體上に、この現像の原因と考へることが出来る
やうな海棲蟲類を探して見たが、無駄であつた。光を發する個所を爪
で搔いて見たが、光は増しも減りもしない。

二十三日に無數の鯖が群をなして現れ、海上に飛躍した。

二十六日にメットMet-tyl-gatt・ジン・ガットと呼ぶ島(穴がある)を周つて、臺灣
島に接する海峡に向つて舵をとつた。

臺灣島

二十九日に臺灣島を見出すことが出來た。この島はその昔和蘭の
亞細亞の於ける領土の一つであつたものである。この島は長く、廣く、

且つ豊穰である。日本行の船はこゝに立ち寄り、一息入れることが出来た。今日では暴風に悩まされた時に避難することが出来る港一つさへない。和蘭人はこの重要な領土を千六百六十二年に失つてしまつた。領守コエツトは、九ヶ月間の籠城の後國姓爺に【ゼーランダの】城を引き渡さねばならなかつたのであつた。國姓爺は千六百四十四年に滿蒙人が支那に侵入して來て之を奪つた結果本國を逐れた、支那人である。和蘭人の敗北及びその臺灣島を逐はれた次第は、シイエスと云ふ人の千六百七十五年アムステルダム出版四折本臺灣失脚史 (Het verwarloos de Formosa) に詳細に互つて記述されてゐる。この島は今日では支那皇帝に屬し、歐州人は最早少しも交易に従事してゐない。

大颶風

三十日に二、三回雨を伴ふ小颶風に逢つたが、時間が短かつた。

八月四日に雨を伴はない暴風に見舞はれたが、これは七日まで續い

た。海は大荒に荒れ、波は恐ろしく高く、風に逐はれた波は、絶へず雨の如くに船の上に冠ぶさつて來た。それがため、役人たちも水夫も、餘り度々服や下着を着換えたので、乾いたのが一つもなくなりさうになつてしまつた。帆は一枚を漸く取りとめただけであつた。

船の後方に帆の切れ端を張つて、浪が絶えず水を冠らすのを少しでも免れやうとした。こんな避難所を作つても、水を冠らないだけ儲け物で、外の危険はやはり絶えず冒かさねばならなかつた。これは私が自ら経験した。私は氣持のよい空気を吸いたいために、暴風の最も激しい時でも、好んで甲板に立つてゐた。突然私は甲板の一方の端から他の端まで投げ飛ばされてしまつた。甲板は水のために大變滑り易くなつてゐるのである。東印度に向ふ船では船縁を高くしてあるが、この高さがなかつたら、船縁を越して海に飛びこんだかも知れなかつた。右脚を挫かなかつたのは、没稀の幸であつた。たゞ踵の下が林

檣ほどの大きさに膨れただけですんだ。そんなにひどく打ちつけられたのである。

十日にまた一つ雨を伴はぬ暴風に逢つた。バタヴィアを出て以來これで五回目である。この航海の危険にして疲勞多きものなることを人が云ふのは決して誇張した言葉ではないことを自ら知ることを得た。臺灣近海は特に論外に荒れ易い。一年中の最も良い季節、即ち船が日本の港に確かに到着しうる三ヶ月か四ヶ月の間でもさうなのである。この暴風のことは既にケムプエル博士がヘフォリオ版日本文明史第一巻、頁三十五及三十六、恐ろしい然し忠實な記述をしてゐるから、屋上に屋を架するの愚はしないで、私はたゞ百年間の經驗によれば、日本に向つて出發する舟五艘のうち無事に歸ることを期待しうるはそのうち四艘に過ぎないことを、注意するに留める。次の難破船の表はこの觀察の正しいことを證して呉れやう。そのうちの或る船

航海の危険

Koempfer

は全破したのである。

千六百四十二年には *Buys Maria* 及び *Guinan* の二隻がギナム灣で沈没した。

千六百五十一年には *Koe* が同じ運命にあつた。

千六百五十二年には *Sparver* 及び *Iam*。

千六百五十三年には *Iam*。

千六百五十八年には *Swarte* 及び *Bul*。

千六百五十九年には *Harp*。

千六百六十四年には *Hector* が支那人と鬭争中に爆破した。

千六百六十六年には *Roode Hart* 及び *Roode Hart*。

千六百六十八年には *Achilles* 及び *Achilles*。

千六百六十九年には *Hoog Caspel* 及び *Vrydenburg*。

千六百七十年には *Scherner* 及び *Scherner*。

ツンベルグ日本紀行

千六百七十一年にはキユイレンブルヒ。
 千六百九十七年にはスバレン。
 千七百八年にはモンステル。
 千七百十四年にはアリオン。
 千七百十九年にはメーローグ及びカタリナ及びスロット・ファン・カ
 ペレ。

ブルグの
難破

千七百二十二年にはヴァルケンボス。
 千七百二十四年にはアポロニア。
 千七百三十一年にはクナッペンホフ。
 千七百四十八年にはユイス・テ・ペルシン。
 千七百五十八年にはスタドヴィク。
 千七百六十八年にはフリデーデンホフ。
 千七百七十年にはガンゼンホフ。同年ブルグは餘儀なく支那に寄

港して、日本には行かず。

千七百七十二年に同船は歸途日本に差し向けられた。同船には派
 遣隊の長が乗船してゐた。この第二回の航海は第一回の航海に比し
 一層無慘なものであつて、舟を見捨ててしまはねばならなくなつた。
 舟は風に押し流されて日本の海岸に持つて行かれた。七月三十日にこ
 の船がメア島の附近まで来た時に、東北東より暴風が起り、二日間續い
 た。マストは折られ、前檣も通路も壊され、火薬室その他の各部に大き
 な水の通路が穿たれた。八月一日に隊長のダニエル・アルメノオルト
 及び船長のエヴァイヒと云ふ人々は、ステンデッケルと云ふ人を船長
 とする僚船マルガレタ・マリアを認めることが出来たので、會議を開い
 た結果、船を見捨てることになつた。次の日に各人はその所持金と所持
 品その他貴重なるもの、必要なるものを携へ、全員マルガレタ・マリアに
 引き移つた。マルガレタ・マリアは同月六日に長崎に入港した。數日

ツンベルグ日本紀行

後に或る日本漁夫が長崎港に和蘭人を見捨てた舟を曳行して來た。舟は薩摩の海岸を數日間浪と風とに押されてゐたのである。港に着いた時には舟中には豚一匹の生残してゐるものはなかつた。後に説くが、船員たちが天候のよい時なら僚船の後にこの舟を曳船するか、或は會社の規則に従つて、燒棄するかしなかつたのは大失敗だつたのである。

千七百七十五年には吾々の船に従つて來たブライエンブルヒが、既述せる如く、支那に寄港を餘儀なくされ、水穴を閉じたり、その他暴風の爲めに起つた捐所を修繕しなければならなかつたのである。修繕後この舟はバタヴィアに歸つた。その間に我が船は日本に向つて航海を續けたのである。我々は間もなく日本に着いた。

第二章

長崎到着——密輸入に對する日本人の要領

長崎入港
準備

十三日の朝に、高かい尖つた山がある、メア島が眼界に入つて來た。午後になつて、日本の陸地を望むことが出來た。そして夜の九時には長崎港の入口に錨を下ろした。非常に高い山が半月形に並んでゐて、この港の入口を護つてゐる。和蘭の船が來る時節になると、日本政府はこの山の頂に監視を幾人か配置する。監視は小望遠鏡を持つてゐるので、遙かの沖にゐる船を發見して、その到着を長崎の奉行に知らせる。監視は我々を認めるや直ちに數個の火を焚いた。そこで我々が錨を下ろすや否や、日本の役人が來て、私等の持つてゐる書籍と武器とを取り上げてしまつた。このことは後に又説く。この日のうちに私

等は水夫の持つてゐる祈禱書及び聖書を一箇所に集め、これを箱に入れて嚴重に釘づけにしておいた。この箱は日本人に渡した。日本人は出帆に當つて初めてこれを歸して呉れる。日本人は、基督教に關する書籍の輸入を防がんとために、この用心をするのである。甲板に天蓋のついた寢臺を一つ設へた。舟に來る日本人の座席に供するためである。

乗組員表

乗組全員の點呼をした。凡てで百十人に上つた。そのうちには三十四人の奴隸も含まれてゐる。各人の姓を巻物に記載した。これは検査の役人に渡すべきものである。然し出生地は別に記載しなかつた。なぜなれば凡て和蘭人といふことになつてゐるからである。その實船中には丁抹人、瑞典人、獨逸人、葡萄牙人、西班牙人がゐるのであつた。船が着くや直ちに日本人はこの表により乗組全員の點呼をする。この儀式は、船が積荷をしたり、或は荷揚をする日には、朝と晩に繰り返

えされた。それはこの日には商館と船との間の交通が自由だつたからである。尤も特別の許可なしには陸に留ることは出来なかつた。十四日は風が強くて錨を上げることが出来なかつた。十一時頃に錨繩を切つて帆を上げた。

船長の服

間もなく小舟が一隻岸を離れて我等の方に向つて來た。船長は直ちに青絹の服を着た。これには銀の飾紐がついてゐて、幅廣く、且つ前面に大きな蒲團がついてゐる。この服は古くから密輸入の用に供せられたものである。商館の長と船長だけが檢閲をうけることがなかつたからである。船長は正確に日に三度船と商館の間を往復する。時には餘り商品を隠くして持つてゐるので、陸に上つた時に、二人の水夫が兩腕を支へてゐることもあつた。洋袴も亦法外に大きく、これも上着に劣らず有効なものであつた。この住復により、彼自身のため、又役人のために、密輸入によつて、數千リクダールを儲けたものであつた。

然し今回は切角の船長の着換も無駄になつた。後に説く、ある命令が我等に下つたからである。

港から来た小船は、商館長から出されたもので、荷役と助手三へが乗組んでゐた。彼等は私等に無事の到着を祝し、積荷の模様バタヴィアの様子など種々のことを尋ねた。

入港

私等は入港を盛んならしめるために、長旗短旗を幾流か掲げた。

港の両端に位置を占める幕府の警備隊の前に近づくや、敬意を表すために、我等は號砲を放つた。警備隊は一つを皇帝近衛隊と云ひ、他を皇后近衛隊といふ。長く且つ迂曲せる入口を周つて進んで行くうちに、美しい眺を樂むことが出来た。附近の丘や山は皆頂まで耕してあるやうに思へた。漸く到着したのは午近い頃であつた。我々は普通に船の投錨する位置に錨を下ろしたが、こゝは長崎の町から一射程の所で、和蘭商館のある小さな出島の間近かである。

商館から遣はされた人が、商館や個人の手紙を私等に渡して、退船する程もなく、日本に残留してゐた商館長が、新たに到着した館長、船長、荷役及び助手を出迎に來た。

幕府の新
制限

この人により、今度新に政府から送つて來た密輸入に對する嚴重なる命令が傳達されたのである。

第一。船長及び商館の長は他の乗組員同様に検査をうくべきこと。これは從來嘗つて行はれたことのないことである。

第二。船長は他の歐洲人同様の服装をなすべきこと。依つてかの尨大な服を着て、これにより密輸入を計ることが禁ぜられたのである。

第三。船長は常に船に留るべきことを嚴命する。若し陸にゐたいならば、滞留期間を通じて、船を二つの錨でとめるために、二回より外に船に歸ることを許されない。

この最後の條項の許可をうるにも、船に起つた損害は長崎奉行及び

將軍の責任となり、會社はその損害賠償を要求すべしと説いて、嘆願、恐喝交々用ひた結果漸く長崎奉行から與へられたものなのである。

この嚴命は、曩きに述べた如く千七百七十二年に放棄された後日本の海岸に漂着した、和蘭船ブルグの船中から發見したものがあつた結果なのである。この船の荷を降ろして見たところ、密輸入品を多量に發見したが、それらが主として商館長、船長その他の主なる役員に屬するものであつた。その名が箱に表記されてあつたのである。殊に日本人は船長所屬の一箱が貨幣及び贗造朝鮮人蔘で充たされてゐるのを見て非常に怒つた。これらの輸入は堅く禁じられてゐるのである。この箱は内容と共に商館の海向の門の前で燒棄されてしまつた。

この嚴命に従ひ、我々の船長は非常に残念がりながら、その幅廣い服を脱いで、自由な然しその體によく適つた服と着換えた。船長はかなり肥滿してゐる方ではあつたが、日本の人たちはその身輕るな華胥な體

ブルグ號
事件

番所衆の
來船

付に驚き入つた様子であつた。日本の人たちはこれはこれまで見つけた矢鱈に眞丸い和蘭船長の精であると思つたらう。

私等が長崎の町に初對面の挨拶をする暇もなく、二人のバンジョ

【番所衆】即ち日本の上級役人及び數人の下バンジョが、通譯及び供廻りをつれて、我等の船にやつて來た。

番所衆は私等が準備してゐた寢臺の上に座を占めた。寢臺には日本の疊を敷き、その上を更紗の被布で蔽つてあつた。この寢臺の傍に踏段を一つおいて、昇降に便した。天蓋の上には帆布を張つて、雨天に備えた。日本人たちは履物を脱いで、寢臺の上に座を占めたが、この國の慣習に従つて踵の上に腰を下ろすのであつた。日本人はこの姿勢に慣れてゐるとは云へ、長くなれば苦しいと見えた。屢々この姿勢を崩して、歐洲風に腰をかけるのを見てもわかる。煙草を喫し、茶を飲み、歐洲の火酒を一寸味ふ以外には、別に楽しむ風情がない。彼等の會

話は長くなく、又言葉數も多くない。船長は彫の入つたクリスタルの瓶と盃を出して、種々の火酒に添へ、別に菓子や皿に少し盛つて、彼等を饗應した。然しこれらには殆んど手も觸れなかつた。船が淀泊中の彼等の仕事は、船から陸に、陸から船に往來する、人及び荷物を全部調べたり、或は町の長官から命をうけたり、旅券その他商品、食料品などに伴つて來る人の出す書類に署名してやることであつた。

商品を船から降ろしたり積んだりする日には毎日、バンジョ、下バンジョ、通譯、筆生及び検査役は夕暮まで舟に留まつてゐて、やがて陸に歸り、そこで船上の歐洲人は初めて自由になる。この日には船でも商館でも旗を掲げてゐた。幸にして若し二隻の船が到着すれば、隔日に各船交互の上で働いた。

日本人の警戒

日本人は船の小舟を監視するに親船に對すると同様の注意を以つてした。歐洲人及びその商品を運ぶものは日本の小舟であり、日本の

水夫である。又夜陰に乗じて和蘭人同様に日本人が密輸入をすることが出來ないやうに、船に日本の役人が居なくなると、監視船を數隻適宜の距離に配置し、特に指揮者の乗つてゐる傳令船は毎時船を一周し、且つ船に極めて近く巡るのであつた。

これだけの要慎をしても未だ満足しないで、和蘭人をして火藥、彈丸、一言にして云へば、凡ての武器、及び曩きに述べた本入りの函をも忘れることなく、日本人に渡たさせるのである。貨幣及び凡ての錢は禁ぜられてゐるから、通貨は出帆まで預かられる。そこで私等は日本人に火藥を少しと、彈丸六樽と、六挺の銃劍付小銃とを渡して、これが我等の軍需品の全部であると確言してやつた。日本人はこれらのものを凡て一つの倉庫に入れて、歸航に際し正確に歸して呉れる。

舵を外したり、帆や大砲をとつたりすることは余餘以前から止めになつてゐた。これらの物は運搬するのが困難なものだから、この要慎

をするのが厭になつたのである。歐洲人に武器を携へることは禁じ
たが、劔を帯びることだけは許してゐた。

乗員點呼

我等が完全に武器を帯ばなくなつたと考へるや、乗組全員の點呼が
初まる。この不愉快極る儀式は、商品の積卸のある日毎に、朝と夕に繰
り返えされる。日本人は十を單位にして人及び商品の數を讀む。そ
して陸に行つた者、船に残つてゐる者及び病人について正確な記録を
とる。

人夫

検査役に指揮され監視されてゐる人夫が幾人かゐる。船で荷の積
卸をしたり、船に來たり陸に還つたりする小舟を漕いだりする。荷を
負つたり、舟を漕いだりする時は歌を唄ふのが習慣になつてゐる。そ
の歌は叫び聲や言葉に調子をつけたものである。昔和蘭人はこの人
たちを罰することを擔當し、棒で擲打して指揮して行かうとさへした
時代があつた。然しかゝる仕事の助け方はこの土地の人の氣に入る

旅券

筈なく、奉行は残酷なばかりでなく屈辱的なこの方法を禁じ、之を犯す
ものは嚴罰に處することになつた。
船から出島に、又出島から船に歸らんと欲する歐洲人は凡て、携帶品
の有無に拘らず、下僕が一人ついて來る上に、旅券を持つてゐなければ
ならなかつた。旅券にはその姓と共に時計その他の携帶品が記され
るのであつた。

不時の場
合の船と
出島の
交通

商品の積卸のない日には、日本の役人も和蘭人も船に來ない。商館
にゐるものは、港の海側の入口が閉められてゐるから、船と交通をする
ことが出來ない。なにか重要なことが起つて、船長なり醫師なりその
他の人に船上に來て貰いたい時には、旗を掲げて知らせる。その上特
に市の奉行の許可を乞ふ必要があつた。奉行が幸に許して呉れると、
通譯と役人が來て、迂回した道により、とある橋のところまで連れて行
く。そこにある小舟で船まで連れて行かれるのだが、その前に非常に

綿密な検査をうけなければならない。斯くの如くこの時にも海側の入口は開られないのである。番所衆及び通譯はついては来るが船には上らない。小舟のなかに残つてゐて和蘭人が呼び迎へられた用向を果すのを待つてゐる。それから同じ道を通り同じ手順を経て商館に連れて歸るのである。町のなかを通る時に、多数の群衆に必らず出逢ふ。小供の群は叫び聲Ho! Lande Orne（和蘭大目と云ふ）を擧げて、歐洲人の圓い大きな眼に驚いた心を表す。

嚴重な検査

海岸にも内地にも税關といふものを見ない。輸出入の商品にも、外國人にも内地人にも課税はされない。こんな没稀のうまいことはどこの國にも見られないことである。然しそれでも禁制品の輸入に對しては非常な注意が拂はれてゐる。検査後はアルギユ希臘神話に出る百眼の巨人の眼を持つてゐる。

凡ての歐洲人は先づ船で、次いで陸で検査をされる。ポケットのなかを探る。着物を撫でて見る。身體ぢうを手で撫て廻す。尻の方まで手をやることがある。下級の人たちは急所まで探られる。奴隸は髪のかなかまで手を入れられる。船に来る日本人も凡て同じ搜索をうける。これを免かれるのは上級番所衆だけである。ある下士官のツポンのなかから鸚鵡が出て来たことがある。飼主が調べられてゐる間に鸚鵡が怪きだしたのであつた。助手の猿又からリクダールなどの貨幣を發見したこともある。日本人は船に積卸する箱を自分達の眼前で開けさせ、一品宛箱の底まで出させる。板の類は空洞になつてゐる疑があるので錐で探る。バタの包やジャムの壺には鐵串を入れて見る。チーズには四角な穴を明けて、針であちこちを探つて見る。私の實見によれば、日本人は疑深くも私等がバターヴァイアから持つて来た卵を破つて見て、何物も匿してないことを確めるに至つたこともある。時々帽子のなかまで調べる。歐洲人は封をした手紙を受取

ることが出来ない。手紙は凡て通譯が目を通さねばならぬ。通譯はなほ他の書類全部に目を通す義務を持つてゐる。基督教に關する書籍は嚴重に禁じられてゐて、ことに繪入のものは喧しいが、歐洲人を樂まさんがために或る數の書籍は許されてゐる。拉典語、伊太利語、瑞典語、獨逸語の本は他の國語に比し容易に許される。それは、通譯はこれらの國語は讀めないからである。

嚴重な検査の原因

歐洲人の狡猾なこと、歐羅巴人が密輸入商品を入れる狡るい手段を考へれば、日本人のこの不信任な態度と要慎とは是認しうる。更に高級船員の一部の人々が横柄で破廉恥な態度であるといふことが加はるのだから無理もない。たゞさへ彼等の行爲は外國人の心に嫌厭と侮蔑の念を起こさせるのに、その傲慢な言遣ひや皮肉な微笑が一層この念を高めさせてしまふのである。外國人は高級船員相互の間の無作法なこと、及び部下の水夫たちを取扱ふ亂暴な態度にすぐ氣づくのである。

である。

この破廉恥なことばかりでなくその甚だ拙な行爲は、和蘭人の交易の妨をなすこと少からず、又益々日本人の不信任を強めるのである。今日となつては、検査役の要慎深い眼を掠すめることは甚だ困難になつた。検査の役人はまた外國人と知己になつて餘り深く馴れることを恐れて、時々人が換えられる。

密輸入

然しこれらの束縛は皆密輸入を妨ぐが爲めに制定されたものである。許された商品の交易は絶対に自由なのである。政府が販賣を禁じてゐる商品でも、少しも匿し立てする様子さへ見せなければ、許されるのである。個人は樟腦と鼈甲を買ふことを禁じられてゐた。この二品は會社の獨占になつてゐた。密輸入されるものは禁制品に限らず、法外な高價に賣れる種類のものもある。一體に交易は物々交換の形式でのみなされるから、歐洲人は支拂の代りとして、陶器漆器を

受取る。だから陶器漆器は毎年多量にバターに持つて歸られる。従つて買價よりもずつと低く賣らねばならぬことが多い。然るに内密に賣られるものは金貨で支拂はれる。従つて公然のものよりずつと高價に賣れる譯である。數年前には密輸入の量は莫大なものであつた。そして大部分は通譯の手を通じてされたのである。通譯は商品を商館から町へ運ぶのであつた。他方出島の塀を越して盛に荷物が投げ出された。すると日本の小舟が來て、荷を受取つて行くのであつた。然し大勢の土地の人及通譯が犯行の現場を見つけられ、その大部分は死罪に處せられてしまつた。

賠償金

密輸入を計つてるところを押へられると、和蘭人は莫大な賠償金を支拂ふのである。その額は近時非常に高くなつた。銅二百カチエツトCastjetに増額された。犯人は永久に國內に入ること禁ぜられる。若し密輸入が船の出帆後にわかると、會社の堪定から銅一萬カチエツトが

差し引かれ、船長及商館長は各々二百カチエツトを支拂はねばならぬ。

商館所屬の商品は到着に際し別に検査をうけない。然しすぐさま倉庫に入れられ、これに日本人は封印をする。そして賣る時に初めて倉庫から出されるのである。

第三章

日本の通譯

亞細亞の各國民、ことに日本人と商賣上及び政治上の交渉をなすに
通譯は除外出来ない程便宜なものであるから、これについては特別の
注意を向ける要がある。

通譯は凡て日本人で、かなりよく和蘭語を喋る。日本政府は出来る
限り歐洲人が日本語を覺へることを妨げてゐる。それは歐洲人には
日本のことを直接知らせまいとするのである。政府は四十名乃至五
十名の通譯を抱えてゐて、商館内に於て、又商事に於いて、和蘭人の用を
させる。

通譯には通常三階級ある。第一級は一番よく和蘭語を話すもので

階級

筆生

ある。一等通譯【大通辭】といふ肩書を持つてゐる。これより今少
し下手なものは第二級をなし、助通譯【本通辭】の肩書を有してゐる。
第三級は練習生【稽古通辭】である。練習生は以前は和蘭人の許に
入り、和蘭の醫者がこれに教授してゐたのである。今日では一等通譯
の許に習ひに行くのである。以前は好きな時に商館に來られて、和蘭
人の部屋に入れたのであるが、最早用のある日以外には來られなくな
つた。それもオトナ^{Ottoma}【與力の類か】が一人か二人、きつとついて來る。
筆生が、舟なり或は出島の學校なり、常に通譯について來て、船に積せた
り卸したりするものを凡て書きとめ、或は旅券を査證したりなぞする。
通譯は順送りに昇進する。そして通譯以外の仕事は決してさせられ
ない。各階級の通譯が一人か二人宛、日本人と和蘭人の間になされる、
政治的商業的談判に際して必らず臨席する。外國の役人が日本政府
に呈したい要求又は陳情を、通譯は口頭で通辨し、或は文筆により譯述

する。通譯は船又は商館で検査をする時に必らず列席し、また幕府に派遣される使節に随行しなければならぬ。

蘭語

年をとつた通譯はかなり正しい和蘭語を話すものが多い。然しその語は歐洲で話されるものとは、文章の構造に於いて、又發想法に於いて、非常に違つてゐて、時には想像以外の可笑しな言葉や、奇妙な云ひ廻しをすることがある。なかには全然和蘭語をよく了解してゐないものすらある。通譯は、日本語を書く時に使ふ筆で、和蘭語を歐洲流に左から右に常用の紙に書いて行く。その書體は傾斜體で、極く読みよく、極めて美しい。

智識慾

通譯の歐洲の書籍を慾しがる心は非常に強い。そして印度から新たに來た商人の誰れかから書籍を得たいと、常に努力を吝しまない。彼等はこの書籍を非常に深い注意を以つて學び、習ひ覺えたことは凡て忠實に記憶してゐる。餘り歐洲人に對する何か新智識を得たいと

醫學研究

云ふ要求の激しい爲めに時によると執拗になることがある。會話を交へても、結局物理學醫學博物學に關する絶間なき質問の連続となるのである。終には我慢がしきれなくなる。世界中で一番人がよく、又一番物識りの人の學識も盡きてしまふだらうと思ふ。然しいくら執拗でも、その好奇心の動機を善意に解釋してやることは出来る。

通譯は大部分醫學の研究に没頭してゐる。恐らく歐洲式によつて醫學を實施しうるのは、この國民のうちで彼等だけであらう。そして彼等は歐洲人が用ひる治療法を自分のものにしてゐる。彼等はこれを和蘭の醫者から學ぶのである。彼等にとつてこの業は、名を高め、産をなすに最もよき方法なのである。

第四章

日本に於ける歐洲人の交易—今日では和蘭人及び支那人にのみ許されてゐる—主なる交易品

初期

人も知るが如く、東印度に行く海路を發見した功績は葡萄牙人に歸すべきものである。全くの偶然の機會により、この勇敢なる航海者は日本諸島を發見しえたのである。千五百四十二年頃に、暴風に流されて、この國の海岸に吹き寄せられたのであつた。彼等は好遇をうけ、百年に近い間豊かな交易をしてゐた。續いて西班牙人が、葡萄牙、西班牙兩國が同じ統治下にあるに當つて、この仲間に加つた。英國人も亦暫くの間この遠隔の島と交易をしてゐた。然るに千六百一年に日本の皇帝と和蘭人との間に結ばれた條約により、和蘭人は他の凡ての競

制限

争者にとつて代つて、日本の交易を獨占することになつた。和蘭人はこの交易により日本から莫大な利潤を收めた。然し今日では甚しく制限を附せられて、極めて僅かになつてしまつてゐる。

始めは日本政府は和蘭人に今日とは違ふ自由を與へてゐた。和蘭人は平戸港に、金なり銀なりその他の商品を欲するだけ積んで、五艘六艘或は七艘の船を送ることが出来た。交易に制限は附されてゐなかつたのである。次の時代には日本政府は和蘭人に命じて長崎の町の近所の出島に商館を設立することを命じ、越ゆるべからざる交易の年額を定めた。この世紀の初めに、毎年和蘭人が差し立てうる船の數を三艘に、續いて二艘に制限した。最後には制限の手は延びて、交易品の量及び質にまで及んだ。この爲めに交易は二百フロランに減じてしまつた。

千六百八十五年に和蘭の商船隊が豊富な積荷と共に港に入るや、將た定められた制限

千六百八十五年に和蘭の商船隊が豊富な積荷と共に港に入るや、將

軍より命令が傳達され、從來和蘭人に許してゐた如く、その望むあらゆる種類の商品を商館内に置くことは、別に禁じないが、その商品は三十萬Threeテール或はリクダール以上を賣るべからず、残りは翌年に保留すべき旨を命じた。これだけでも既に和蘭人の交易にとつて大打撃であつた。更に和蘭人に心よからぬ或る奉行が、商品から和蘭人が得る収益を減ずる方法を案出したのである。そしてこの和蘭人の損失は當局の人及び長崎市民の利益となるやうにしたのである。

第一。和蘭商品が販賣される前に、百分率を以て課税される。そしてこれは買受人が拂ふのである。これに伴つて課税された商品の価格は當然引き下げられるのである。この損失は外國人がうけるのである。

第二。和蘭人に對して貨弊の價值が固有の價值より高められた。例へば小判一枚【著者の『日本貨幣論』によるにこの小判は新小判

と云つて、舊小判が十テールなるも、これはその十分の六より時價なしと云つてゐる】は國內では六十Parisマースに過ぎないのに、和蘭人との勘定の時には六十八マースになるのである。小判一枚につき和蘭人の損失八マースは、町の住民及び役人には直ちに非常な利益となる。和蘭會社は商品三十萬テールを限度として賣ることを許されてゐるのだが、實際交換に受取るものは二十六萬よりない。損失の四萬と云ふものは個人の勘定に廻はされる。個人はこれまでは、自分の勝手の量の商品を勝手の價格で賣る権利があつたのであつた。今日では商館長、商人、船長、助手及び他の役人がこの損失を蒙るのである。

日本人は歐洲の商品に對し昔より安く支拂ふのみならず、歐洲商人は花銀Kanaginと稱して、百分の十五を報酬として出さねばならない。この課税から入る収益は日本政府の役人及び町の人の間で分配されるのである。

交易方法

會社及び個人の商品が凡て検査後倉庫に入れられるや、この旨内地の商人に通ぜられる。そこで販賣が初る。購入者は長崎奉行の許に來て凡ての商品の見本を一覽し量及び價格について入札をする。購入者自身が續いて出島に來るか、或は店のものをよこして、數日間續けて商品を嚴密に調べる。そして和蘭人にその云ひ價を問ふことなしに、自分の差し價を云ふ。通常初めの差し價は非常に廉い。販賣者がこれを拒絶すれば價を高くつけて來る。そして最後に云ひ價を聞くのである。和蘭人は少し掛價を云ふ。若しその日本人がほんとに今商談をしてゐる品物が欲しい時には、結局價の折合をつける。若し正當な價格をつけて呉れなければ、持主は商品を翌年まで持ち越すか、さもなければバターに持つて歸るのである。日本人は價格を云ふ時にテールを以つてせず、マースを以つてする。例へば一角獸の角一束に銀六マースを以つてするが如くである。商談が整へば、商品を量

商館長

り、町に持ち運ぶ。そこで内地の商人がこれを買價以上の價格で買ひ取るのである。

以上の細説により、和蘭人の交易が以前に比し全く違ふことを證するに足りると思ふ。出島の商館長の役は以前は余程の後押しがあるものにでなくては與へられなかつたものである。事實に、二航海もすればこの役を捷ちえた者は莫大な産をなすに足りたのである。今日では四回乃至五回日本へ航海したもので、漸く衣食の資を得るに過ぎない。この役はバターPeithのArmenantの首席參議官により任命せられるのである。今回はフェイトPeith氏がアルメノArmenantオルト氏に交代して商館長となつたのであるが、氏はこれで四回目の航海である。船の出帆後も氏は出島に、奴隸を除き十二名乃至十五名の歐洲人と共に殘留してゐた。

荷航の積

今日では和蘭人は毎年船二艘より外は差し立てない。船はバターPeithを六月に發つて、年末に歸つて來る。歸航に際しての積荷の主な

ツンベルグ日本紀行

るものは日本銅未精製樟腦、漆器、陶器、絹布、酒米及び醬油である。最後の二、三品は重要なものでなく、二、三個人の思惑買によるのである。この國の銅は吾等の知れる限りでは最も良質で、多量の金を含有してゐる。これを長さ四分の一オーヌ〔一オーヌは一米突一八八〕太さ指位の棒に鑄つてある。一面は丸味を帯び、他面は平面になつてゐて、美しい色に輝いてゐる。この棒を百二十五リール或は一ピクロン宛の重さに分けて箱に收める。これを日本の役人、通譯、貨物係及び助手の面前で量る。一回の積荷は五、六千或は七千箱位ある。この銅はこの島のずつと内地から來るものである。これを特別の倉庫に集めて、おいて、船が凡そ半分程積荷を下すや、クウリ即ち日本の勞働者がこの箱入の銅を船にのせるのである。水夫がこの運搬の監視をする。それはクウリが内秘にこの棒を二、三本盗んで、和蘭人よりも高く拂ふ支那人に賣ることのないようにするためである。會社が日本から將來

するのは主としてコロマンデルの沿岸に賣り込む、この太さ指位にして重さ三分の一リール位の銅の棒の外に、小さな木の曲物に填めた未精製品の樟腦が多量にある。又會社は粗い絹の裏のついた幅広い絹の着物、陶器若干、醬油、酒及び乾菓その他のものをも買ふ。

今年會社が日本に送つた商品の主なるものは粉砂糖であり、次いで多量の象牙、染料となるブラジルの赤い材木、錫及び多量の鉛、少量の鐵棒、多量の上等更紗、各種の色和蘭製毛織物、セル、絹布、鼈甲、スキーン及びコスツスの根である。個人が自分の商賣品として持つて來るのは泊夫藍、テリアリ、甘草の液、蘭眼鏡、時計、一角獸その他の似たやうなものばかりである。銀を一定の價格だけ送ることは會社だけに許されてゐる特權である。これは相當の儲けのあるものであるが、個人がこれを賣ることは禁じられてゐる。和蘭語で書いた科學及藝術に關する書籍は競賣に附せられないが、然しこれは通譯と物々交換をして可なり

ツンベルグ日本紀行

利益をうる事が出来る。

和蘭の役人たちは又自分の商品として、未精製品の樟腦、上等の蘭鼈甲、一角獸の角、大小の時計、上等の更紗、泊夫藍、テリアク、甘草の汁、ニユルンベルヒ製品で例へば鏡の如きものを持つて來た。

ウニコルン
一角獸

一角獸の角の Kambang カンバン【競賣の意か】は本年は非常な高價を以つてなされた。以前には多量の一角獸の角が密輸入され、非常な利益を收めたものである。日本人はこの角に不思議な力があるものとしてゐる。命を永め、生活力を促し、記憶力を増進するに有効なりと信じてゐる。一言にして云へば用ひえざる所なき萬病藥として、凡ての病に使ふのである。これが和蘭人の交易品のうちに入れられたのは最近のことである。偶然な機會からして和蘭人はこれに關する智識をえたのである。長崎に住んでゐたある商館長が、歸るに當り、グレランド産の一角獸の美事な角を、親しくしてゐた日本の通譯に贈つたのであ

る。この通譯はこれを賣つて莫大な儲をした。これを知るや、和蘭人は歐州から集められる限りの角を集めるに努力し、これにより最始は莫大な利益を收めた。最始の頃には、一カチエット(一リーヴル四分の一)が小判百枚即ち六千リクダール【六百リクダールの誤であらう】に賣れたのであつた。しかし間もなく價は下り、七十枚になり五十枚になり續いて三十枚になつた。船長が幅廣の服を着ることが禁じられたので、本年は密輸入が出来ないため、一角獸の角をカンバンKonderynより競賣に附せねばならなかつた。角一カチエットにつき百三十六リクダール即ち日本銀一マースにつき角八マース及び五Konderynコンデリンとなつた。若しこれを内密に船中で賣れば、小判十五、六枚になつたのである。私がジャバから持つて來た三十七カチエット四テール六マースの角が五千七十一テール一マースになつた。このお蔭で私は負債を拂ひえたのみならず、千二百リクダールを自分の好む研究に費す

ことが出来た。【テール、マース、コンデリンに就いては間もなく説明が出るが、これは重量及び金額兩様に使はれる】

人蔘

一角獸の角と同じく少からず日本人から求められ、同じく高價を日本人が投ずるものは、人蔘Zenaiの根である。日本人はこれをニンシNinshiと呼び、支那人はソムSomと呼ぶ。支那人のみが良質にして天然なるものを供給しうるものである。支那北部ことに朝鮮に生ずる。和蘭人はその贗物を持つて来て、これと眞物とを交ぜるのである。佛蘭西人が支那に持つて来るものはこれと較べものにはならない。それは單にジンセGinsengの根に過ぎない。眞物の人蔘は本年は、良質の古き根一カチエツトにつき小判百枚に賣れた。品質の落るものは更に安價で賣られた。偽物の良質のものは白色で二股に分かれてゐるが、これを眞物と混ざる。贗物の密輸入は堅く禁じられてゐる。發見されれば、贗造を防ぐために、悉く焼き捨てられる。

禁輸出品

會社にも、個人にも亦輸出を禁じられてゐるものは貨幣、地圖、書籍である。書籍は日本に關するもの、日本の統治に關するもの、武器に關するもの、特に強力にして良質なること凡ての國の製品に勝る美事なる日本刀に關するものが禁じられてゐる。

陶器

日本の陶器は色に於いても形に於いても少しも愉快なところがない。野卑で肉厚く、支那廣東から出すものと比較してずつと劣等である。特長は燃えた炭火にあてても、容易に割れない點にある。日本の陶器は藁で荷造されるが、荷造が非常に巧妙で、途で只の一つも毀れることがない。

【次の衡量及び金錢の單位に關する二項は佛蘭西語譯にはないが、英吉利語譯から譯して補つて置く】

衡量

日本の衡量は次の如くである。一ピツケルPickelは百二十五パウンドとなる。一カチエツトCarjetは十五テール、一テールThaelは十マースMars、一マースは百

Konderyn
コンデリンである。

金銭の計算法は次の如くである。一テールは和蘭の一リクダールに近く、十^{Mas}マースに當る。一マースは百^{Konderyn}コンデリンである。

【テールは Tael, Thael 時に Tale と書く。印度の Tola がマレイに入つて Tail 或は Tahil となり、後に支那に入つて、重量の單位及銀貨幣の稱となつたものであると云ふ。一兩小判が約十テールに當るところから見れば、テールは普通は兩と譯されてゐるが當らないやうである。マースは Mace 或は Mas と書く。初めスマトラにて用ひらるゝ重量の單位で、マレイのテールの十六分の一に當るものと云ふ。後に歐洲から支那に行つた商人によつて支那銀貨テールの十分の一を指すに用ひらるゝに至つたものと云ふ。これを日本の錢堪定に用ゆる時は、普通夕目と譯されゐる。

コンデリンは Candareen, Quandareen, Cundryyn 或は Konderyn と書く。

マレイ語の Kandari から來たものであると云ふ。百分ノ一マースに當るのだから、日本語でなんと譯すべきものか一寸判断がつかない。

以上の語の語原は Henry Yule A O Burnell
ヘンリー・ユール及びエ・シ・バアネル兩氏共著の

Holson-Tobson: A glossary of colloquial Anglo-Indian words. に據つた。】

交易の結果、賣高が買高を超過した額は、これをカンバン錢と稱してゐるが、これは貨幣では支拂れない。貨幣の輸出は嚴禁されてゐるからである。その代りに金額だけの品物をとるのである。その時債務者は爲替を出すのであるが、これは年内に必要となつた品物、或は島の市場で買ふ品物で支拂はれるのである。然しこのカンバン錢はいつも大したことなく、且つ現金取引よりも安く見られる。この堪定を以つてしては品物の眞價の二倍を拂ふ覺悟をしなければならぬ。カンバン錢は日本の新年の初めでなければ決濟とならない。船の出發前に各々その計算をして、計算書を通譯の學舎に差し出す。その後計

算書がとぢられる。新年になつてから必要になつたものは凡て翌年の堪定に廻はされるのである。

和蘭人の交易は物々交換であるから、舟がバペンベルグに向つて出帆する前十四日目に、出島で市が開られる。和蘭商人は税を少し出してこの時に自分の商品を持ち出して、特別に造つた店でこれを賣ることを長崎奉行から許されてゐる。

個人が本年買ったものは次の如きものである。數樽分の水を入れて澄ますことが出来る、暗褐色の大きな土甕（バターヴィアで盛に使用される）樽詰の醤油及酒、絹の日本着物、扇、漆器、精巧な大きな白色又は色付の陶器、絹の細布、サバ製品【？】、白粉包、分銅。

個人の買
入品

第五章

日本に於ける支那人の交易

歴史

支那人は日本で太古から交易を營んでゐる。そして多分この國で交易を許されてゐる唯一の亞細亞民族であらう。この特權を和蘭人が共有してゐるのである。百艘乃至は二百艘の支那船が、各々五十人の乗組員を載せて、毎年大阪の港OSAKAに來たものである。この港に近づくには岩礁や砂礁があつてかなり困難なのであるけれども、それを押し來たのである。葡萄牙人が長崎へ出る航路を支那人に教へてからは、この港を撰むやうになつた。そして大阪は入港を禁じられたのである。

支那人の
取扱

支那から日本に來る商人は昔は自由であつたが、北京にゐる基督教

宣教師たちの密偵の疑をかけられてからは、この自由も制限されるに至つた。實際宣教師たちは支那で印刷したカトリック教の書籍を輸入しやうと努力したものである。現在では和蘭人と同様に不信の態度で厳しく取扱はれてゐる。時によると和蘭人に對するよりも支那人に向ふ時の方がずつと頑固なこともある。日本人は支那人をある小さな島に閉ぢこめ、猶出人に際し必らず點検するの要慎を怠らない。たゞ日本人は支那人に、和蘭人には許されない恩恵を與へてゐる。それは町に行つて寺で祈願をすることである。猶支那人には日常の用として日本貨幣を所持することが許されてゐるから、支那人は町の入口で日用品を自らなんでも買ふことが出来る。

支那の船が長崎に錨を下ろすや、直ちに先づ乗組員を悉く上陸せしめて、出帆の用意をする時までには、舟中に一人も残つてゐないやうにする。

積荷を卸すには日本人が自ら擔當し、次いで陸の極く近くに曳いて來るので、退潮の時には舟は海底の泥土に乾されてしまふ。翌年になると日本人がこれに新に商品を積んでやる。

支那人は將軍に使節を派遣するの許可を得てゐない。これは支那人にとつて非常に金銭上利益なことである。なぜなれば、途中の旅費から云つても、亦柳營で人々に分與せねばならぬ献上品から云つても、この旅は和蘭人にとつて非常に入費のかゝるものなのである。

支那と日本とは相接近してゐるのに拘らず、兩國民の言語は全く違つてゐて、互に少しも了解し合ふことがない。そこで支那人も和蘭人同様に通譯が必要なのである。

支那人は和蘭人の倍額以上の交易をする許可を得てゐるし、その航海もずつと短く又危険も少いが、その利得は和蘭人より少い。花銀として、日本人が長崎市の利益を計つて、支那人から徴するものがあるか

らである（時によると百分の六十になることがある）。日本政府はこれを商品に課する税として受け取るのではない。然しとにかく長崎の町民を肥さんがために、外國の商人の利益を少くする口實は種々設けるのである。

交易品

貨幣の輸出は嚴禁されてゐるから、支那人はその商品の代品として、漆器、銅その他の日本商品を持って行かなければならない。支那人の持つて来るものは通常、未精製品の絹、藥品類例ば人參の根、テレベンチナ、沒藥、カロンバクの木片の如きもの、鉛及び印刷された書籍である。然し最後の書籍は檢閲者が一讀の後宜しと認められたものでなければ、販賣は出来ないのである。

交易時機

これらの商品は、毎年三期に分かれて到着する、七十艘の船に積まれて来るのである。最初に到着するものは、二十艘よりなり、春に来る。そして續く二回の時も同様であるが、船が来ると新着品を賣り捌く市

が開られる。第二回のもものは三十艘よりなる一隊で、夏に来る。第三回は二十艘で、秋に来る。この時期外に投錨するものは、例令この港に来たものでも、如何なる小さいな商品でも陸揚げすることなしに歸らねばならぬ。

支那船の積荷を終り、出帆の準備が出来ると、日本の監視船がこれを港外に誘導する。然もずつと沖までつれて行かれる。これは支那人が手放すことが遂に出来ないで持ち歸らねばならなくなつた、商品を密賣するのを防ぐためである。

支那人の船は構造が非常に軽く、丈が高い。通路が一條船體より更に高くついてゐて、艙も舳も論外にそり上つてゐる。船尾は特くに大きく開いてゐる。舵及び帆が巨大なために運用が甚だ困難である。

私は支那人と日本人は相接せるに拘らず、前言せる如く、和蘭人同様に通譯が要る程、風俗習慣言語が極めて異つてゐることは、改めて云は

日支兩國
の風俗上
の差異

ないでおく。既に老練なる航海者たちによりそのことは充分に記述されてゐる。私はたゞ次の二三のことを注意するに留めておく。支那人は上着と大きなズボンズボンを穿いてゐるのに、日本人は巨きな一枚の部屋着にくるまつてゐる。支那人はゲートルゲートル或は布製の長靴と皮の甲をつけた短靴を穿いてゐる。日本人は素足で、踵が皮で出来た草履を穿くだけである。宗教上でも両者は違つてゐる。顔貌や顔の色は非常に似てゐて、文字は同じである。支那及び日本の宗派のうちには、似たやうなものがある。両者に共通な習慣もある。これは日本に属してゐる南方諸島に支那人が逃げて来たのに原因を歸することが出来る。南方諸島ではことに琉球島Likiepに多いので、この島の住民は今日猶支那皇帝に毎年貢物を献げてゐる。

第六章

長崎の町及び港の叙述——和蘭人に貸與されたる出島——出島にある和蘭人の倦怠及び苦難

概況

長崎の町は濠も城壁も城塞もなく、開け放しである。曲りくねつた街路のうちを、運河が流れてゐる。附近の山から落ちる水はこの運河のうちに入り、やがて港のうちに注ぐ。葡萄牙人の来た頃には、この町は小村に過ぎなかつた。外國の商人が蝟集するに従つて膨脹して行つて、遂に今日吾人の見る如き状態をなしたのである。町のうちには多數の寺院が高地に建てられ、勝景の地を占めてゐる。街路は各々その兩端に木戸があり、これにより隣接街路との交通を遮斷することが出来る。この木戸は夜間は閉ざされてゐる。各街は三十乃至四十

ラス【一プラスは約一尋の長さ】の長さを有し、これに三、四十の家屋が並んでゐる。この家はその街に住む一人の役人により監視されるのである。家屋は二階のものは少い。二階のものがあつても、二階目は極く低い。各區劃内に火災の際に必要な道具類を収めておく家屋が一軒宛ある。

市政

この町の市政を司るものが四種ある。その下にオトナ及び數階級に分かれる役人が相當の數ゐて、巧みに警察行政を司るのである。

長崎と外
國船

長崎は外國船舶の人港を許す唯一の港であつて、然もこの許可は支那人及び和蘭人に限られてゐるのである。若し他の國の船が暴風に襲はれて、不幸にも日本の海岸で難破するか、或は寄港をすると、直ちに江戸の幕府に巨細に互る報告がなされ、船は長崎港に曳船されるのである。

我々がこの港に到着した時、二十艘のジョング即ち支那船が非常に

Jongue

地勢

岸近くに錨を投ろしてゐて、干潮の時には海底に横はつてゐるのを見た。このうちのあるものは積荷をされて、直ちに出帆した。然し七艘はこの土地で冬を超すために残つてゐた。支那船は船の大きさに比較して乗組員の數が非常に多く、時には七十人乃至八十人に昇ることがあるから、長崎に面して、和蘭商館の傍にある、出島内で越年するものが六百人からある。

この町は四方を高い山で圍まれてゐる。山は港に向つて緩く傾斜してゐる。港は南北に延び、長さ千射程、幅四射程で、町に副つて弧を描いてゐる。海底は泥で、且つ海は深い。船は商館から一射程内に淀泊することが出来る。

干潮満潮の差甚だしく、山峻嶮にして、海岸は低く且つ出入の著しいことを認めた。港内には時には五十隻乃至百隻の日本船及び近在の漁舟が無數にゐることがある。日本船の漕法は我等の漕法と違つて

日本船の
漕法

ツンベルグ日本紀行

ゐる。特別に撓げられた櫓が一隻に一本乃至二本備つてゐて、日本人はこれを横さまに操る。この漕法は疲労も少いし、又船は非常に速く進む。

長崎奉行

長崎はこの帝國の五大都市の一つであつて、且つこの國に入ること許されてゐる外人との干係があるために、日本ぢうで最も商業の盛な町である。この町は將軍に直屬し、將軍は租税による収入を收め、特命を出して自分の名で二人の奉行を任命し、これに町及び和蘭支那兩商館に對する絶對の權威を附與する。この二人の奉行は昔は共に長崎に住んでゐたが、今日では毎年十月に交代することになつてゐる。職務期間の終を告げた奉行は休養期間を江戸で過すのであるが、江戸にはその忠實を證する人質としてその家族がとめて置かれてあるのである。奉行のきめられた俸給は年に六千リクダールのぼるが、この外にその役柄からして入る莫大な額がある。然し公儀に送らねばなら

出島の設備

ぬ献上品、各種階級の無数の役人及び家僕たちの生活を維持してやらねばならぬから、その収入の大部分は消費されてしまつて、少しも蓄財などは出來ない。

出島は一面から云へば長崎の町の一部となるもので、長崎奉行はその島を和蘭人に貸與し、家屋を建て、且つこれに適宜の修繕を加へるのである。借家人は自辨で、框を附し、床及び壁に被を附し、灰汁洗をしなければならぬ。一言にして云へば貸家人の欲する裝飾その他の愉樂の設備は凡て自ら拂ふのである。

橋

干潮の時には、この島は町とたゞ溝一つを隔てるのみとなる。然し満潮の時は橋を利用して陸地と交通する。島は長さ三百オーヌ幅百二十オーヌに過ぎない。かゝる小なる陸地に板圍ひを施し、これに二個の門を附することは容易な業である。町の側なる門は橋に面し、今一つの門は海に面してゐる。後者は外國船より積荷を卸し、又はこれ

に積荷をする時でなければ開かれない。前者は日中には日本人により衛られ、夜間は閉ぢられてゐる。この門を出入するものは門の近くに位置してゐる警固のものの検査をうける。

出島の家

會社の倉庫、病院、使傭人の住む家などがある。皆二階建て、二階だけに人が住んでゐて、階下は倉庫に使はれてゐる。猶厨庖、配膳室などと云ふ、一軒の家に必要なものも設らへてある。會社の畑には小屋がある。これらの間に三本の道がキの宇型についてゐる。防火的の構造になつてゐる會社の大倉庫を始めとして、凡ての家は木材及び粘土で建てられ、瓦で蔽はれ、紙の窓「障子か？」がついてゐて、藁の敷物が敷いてある。最近に會社の使傭人がバターヴィアから硝子窓入りの框を持つて來たので、部屋は明るくなるし、外の景色を眺めることが出来るやうになつた。海に向ふ木戸には、火災に際して必要な道具が備へられてゐる。その反対側の端に遊歩園があつて、こゝに二階建の望樓があ

通譯學校

る。通譯はこの島のうちに大きな家を持つてゐる。これを通譯學校と云ふ。會社の船が荷物の積卸をしてゐる間は、かなりの人數の通譯がこゝにゐるが、出帆後は毎日二三名より外は來ない。そして午後のかかり早い時刻に交代する。これは夜にならないうちに家に歸れるやうにするためである。

オトナ

この島のうちにオトナ即ち市の行政機關附屬の監察がある家がある。彼等はこの島のうちに起る凡てのことを監視して、奉行に報告をしなければならぬ。和蘭人が滞在してゐる間は、その人數は通譯の人數に劣らない。その後は残るもの一名乃至二名で、これも同じく毎日交代するのである。

出島の監視

凡てこれらの役人さては警固の人、通譯などは非常に深い注意を以つて、和蘭人を監視しなければならぬのである。警固役を島の三方の端においてある監視所に配置してある。和蘭人の出發後はそのう

ち一つを残して置くだけである。毎日夜晝となく度々島の周りに巡視を出す。和蘭人に許されてゐる猫額大の地の状況は斯くの如きもので、然も和蘭人はこの土地を離れることは絶対に禁じられてゐるのである。隔年に一年宛この土地で過ごさねばならぬ者にとつてこゝに滞在してゐることは倦怠に堪へないものである。

下痢

長崎及びその附近の地は九月及び十月に互る間は極めて健康上宜しくない。この時期には土地の人及び淀泊中の船にゐる外國人さへも普通頑固な下痢及び瀉り腹に罹る。私はこれは氣候不順の故と考へる。なぜなれば日中の息がつまりさうな暑さに引續いて、突然極外に冷しい夜が来るからである。土地の人の食物が亦この氣候の悪影響を助けてゐる。それは土地の人は肥後柿を不攝生に食べるからである。この果實は郊外から多量に持ち込まれるが、よく熟した時は極めて美味である。レイヌクロオドの梅と味が似てゐる。

第七章

著者の出島及び長崎に於ける視察——和蘭人の事業。千七百七十五年八月十五日より千七百七十六年三月四日に至る間。

役人との親交

船から陸に上るや、私が第一に努めたことは、通譯と親しくなり、且つこの小島に出入する役人達と親交を結ぶことであつた。私の醫學上の智識が彼等さては病氣にかかつてゐる親戚友人などの役にたつ機會は一切でなかつた。その上に私の態度に蟠りがなく解放的なので、大に彼等の信任をうることが出来た。私の注意は専ら藥品及び植物にのみ向けられてゐることがよくわかるので、交易検査役にも大して不安を抱かせることがなかつた。それに幸福にも私はこの國の野生の植物に非常に有益な効力のあるものを發見しえたので、この發見を

本算の發見

植物採集
の願出許可取消
の理由

利用して、一つの許可を受けやうとした。これは今まで嘗つて歐州人に許されたことがないので、即ち長崎の町の近郊を歩き廻つて、薬草及び種子を採集することである。この交渉は初めは私の希望以上に成功した。然し間もなく奉行はこの許可を取消してしまつた。その理由は極めて面白い理由で、同時に外人が如何にこの地で不信任で恐怖されてゐるかを證するものである。私が近郊に出て植物採集をする許可を願ふや、日本の奉行は新例を開くことを恐れ、歐州人の醫者に從來かゝる許可を與へたことがあるや否やを、日本の記録について調査した。しかるに餘程以前にある傳染病が慘害を逞しくした時、醫藥に缺乏を生じたので、和蘭の醫者が一人長崎近郊に本草を探しに出る許可を與へられたことが發見された。これで凡ての懸念は去つたわけであつた。しかるにこの件を更に調査したところ、この時の和蘭人は助手の醫者であつたことが發見された。そこで私が主任醫である

再許可

ことがわかつてゐるものだから、私はこの特權をうることを得ずと決せられた。日本人は殆んど信ぜられない程規帳面であるから、かゝる事情も屢々非常に重大なものと見做されるのである。日本人はその將軍の意思を嚴格に實施することを自負し、決してこれに勝手な解釋を加へたり、時宜に適應する如く變へて行くことをしない。私としては、この私に示された不許可の命に無關心である譯には行かなかつた。しかし決して失望することなく、一層切に願ひ出たのである。私は上級の役人に、主任醫は助手醫を経て來なければならぬのだし、助手醫は他日主任醫たることを願ひうるものなのだから、二つの間に何等の差の存するものでないことを切りと説明した。この様な正しい注意によつて長崎奉行の懸念は凡て取り除くことが出來たので、一度前に出た許可が再び私に下つた。然し時期既に遅く、私は二月になつてからでなければこの許可を利用出來なかつた。誠に残念ではあつたが、

この不運な不許可を取消すために秋を過ぎてしまつたのであつた。幸にして、多くの通譯が私の藥學上及醫學上の弟子になつた。そして私の指示に従つて、町で患者を診てゐた。そこで私は日毎の講習の謝禮として、彼等が附近の丘で見つけうる、あらゆる植物、花及び種子を望んだ。彼等と談話をしてゐる間に、日本の政府及び日本の風習について、貴重な智識を集めることが出来た。彼等は書籍及び科學や藝術に關する珍らしき品物を得させて呉れた。

八月十五日に家畜を船から下ろし初めた。例へば牡牛、牝牛、豚、牝山羊、羊及び鹿の如きもので、毎年バタヴィアから送るものである。歐州人はこの土地では新鮮な獸肉は如何なる種類のものもうることは出来ないのだから、商館の消費用として、又歸航の船の糧食用として、バタヴィアから持つて來なければならぬ。この家畜は出島内の厩舎に入れられる。この厩舎は夏季は開放され、冬季は閉ぢられる。飼葉は

家畜の陸場

木葉や草で、日本の奴僕が町の近郊から集めて來るのである。冬季にはこれらの獸類に米、藁及び木の若芽をやる。(日本人は羊も豚も飼養してゐない。牡牛、牝牛が少しあるけれども、極めて小柄のたちのものである。日本人はこの牛を時には耕作に使ふことがあるが、その肉を食へることはなく、又牛乳の用を知らない。)

家畜の飼素

この家畜に日に三度必らず持つて來てやる草を私は調査することを忘れなかつた。そのうちには極めて珍らしき植物を發見することが出来た。これは歐洲にある標本のうちに加へる價值が充分にあると、私は考へた。この發見をしたので、日本人が歐洲人をこゝに閉ぢこめておくことが、堪らなく苦しいものに私には思へて來た。私は自己等の飼つてゐる鳩の運命を羨んだ。商業上の好みから、又智識を増したい慾から、幾多の危難を冒して、この遠隔の地に引き寄せられた人間よりも、鳩の方が疑はれもせず、束縛も受けてゐない。

鳩を羨む

日常用品
の陸揚

ツンベルグ日本組行

十六日及これに續く日には衣類、家具及び葡萄酒、麥酒その他の食用品の如き外國役人の貯藏品が陸揚げされた。これらのものは商品に先立つて陸揚され、初めの三日間は普通この仕事をする事となつてゐる。

船の検査

九月四日に日本人は船の検査をした。個人の商品で賣品として陳列出来ないものも陸に送られた。續いて直ちに賣拂ふべき商品の運搬に従事した。陸揚げの混雑中に忘れて來たものは、船から出すことも出来なければ、交易品のうちに入れることも出来ない。やがて日本人は綿密に船を検査する。船艙の底と火藥庫が除外されるだけである。

この月の残りの日を凡てかけなければ、會社に屬する商品を悉く陸揚することは出来ない。

銅の積荷

これが半分程陸揚されるや、直ちに箱に密封した銅の棒の積荷が開

始される。本年會社の船で日本へ航海して來たのは我等の船一隻であるから、普通の積荷の上に更にその分量を加へたものが積荷された。即ち六百七十箱である。一箱は各々一ピツクル或は百二十リールブルの重さである。

貴人の訪
船

我等は船上に多數の貴人及び長崎市の二人の奉行の訪問をうけた。彼等は好奇心からして、我等の三層甲板の旗艦を見物に來たのである。これほど巨きく又美しい船が日本に來たのは數年間絶へてなかつたことなのである。和蘭商館にこの三十年間屬してゐる一人の通譯は、かゝる船は未だ見たことがない旨を語つてゐた。

水夫の死

この頃に水夫の一人が斃れた。外の病人と共に島の病院に連れて來られてゐたものである。長崎の奉行がこのことを知るや否や、埋葬の許可を與へて呉れた。日本人が數名死體を檢視する役目を受けた。彼等はこの役目を極めて正確になし遂へた。その後彼等は死體を木

ツンベルグ日本組行

の柩に納め、港の對岸に運んで、そこに埋葬した。彼等の習慣に従つて火葬するためにもなく掘り出されると云ふ人があつた。これについて私は確かなことを知ることが出来なかつた。

代官の交

私は暫くの間はバペンベルグ〔高山或は高鋒島〕の直ぐ傍にゐる船中に起居してゐなければならなかつたが、遂に十一月になつて、私に任を譲つてパタゴニアに歸る醫師と交代することが出来た。私はこの土地に少くも一年間は住む覺悟をした。この人が船に来てから僅かにして船は帆を揚げた。かくて十四人の歐洲人が、奴隸數人及び日本人若干名と共に、この世の他の部と引きはなされた孤獨裡に、出島の狭い壁内に閉ぢこめられて、獨り居残ることになつたのである。

滞留歐人の精神状態

餘生をこの孤獨の裡に送らねばならぬ運命の歐洲人は、全く生きながら埋葬されたと同様である。國々の大革命の噂もこの地までは決して達しない。日本の新聞、又他の國の新聞はもとよりのことゝに

滞留歐人の日常生活

は達しない。この世界を舞臺として起ることに一切預り知らず、この地で、完全に精神的零の状態で坐食することが出来る。精神は一切糧を與へられない。意思は皆無である。最も賢明なる方法は、一切かゝる重大なる吾人の能力を眠らせ、命ずる必要なくたゞ命のまゝに服従しておればよい。云はゞ土地の人の能力にこの身を合致せしむるのである。印度會社の商館のあるところいづれの地でも、凡ての歐洲人がする生活法は少くもかゝるものである。彼等は誠に笑ふべき、極りなき贅澤をして、この堪へ難き束縛の填め合せをするのである。

この地に於いても、パタゴニアに於ける如く、島の周圍を廻り、二本の道を僅かばかり散歩をした後、毎夕を一同商館長の許に過すのが習となつてゐる。この訪問は六時より十一時まで、時には深夜に至ることがある。これがために生活は全く單調となる。かゝる生活は、パイプと煙草入に凡ての快樂を集めうる、無氣力の人のみがよしとする生活

である。

日本人の
奴僕

和蘭人が奴隷を使ふのは、室内の給仕及び家内の雑用に限られてゐる。他のことは凡て日本人がして呉れるからである。日本人は入用な食量及び家事用具は凡て整へて呉れる。或る者は料理方であるが、和蘭風の料理にうまく慣れてゐる。バターイアに於ける如く、こゝでも盛に米を食べる。しかし長崎では毎日小麦で麵麩を作るので、それを島の歐洲人に持つて来て呉れる。他のものは奴僕で、かなり和蘭語をよく話す。然し彼等は通譯の仕事はしない。奴僕は商館長に四人、秘書に一人、醫者に一人與へられ、幕府へ行く旅に伴つて来る。和蘭人が人夫を必要になれば、奉行は出島に行く特別の許可を人夫に與へるのである。

火鉢

寒氣が酷しくなり、風が東方及北方から激しく吹いて来ると、部屋に火を焚く。部屋の入口及窓はうまく閉まつてゐない。燃料としては

炭がある。これは町から運んで来て呉れる。これをよく熾こして、幅広い縁の大きな銅の鍋に入れて、部屋の真中に置く。これで暖氣を數時間保つことが出来る。

滞在歐人の
費用

醫師、秘書、助手その他會社の役員は各々二室乃至三室の部屋を持つてゐる。この外に倉庫を持つてゐて、こゝに住むことも出来る。然し彼等は自分の費用で部屋に裝飾をしたり、家具を設へたりせねばならぬ。各員の食事は正午及び夕暮に商館長の許に用意され、これは會社の負擔である。斯くの如くて彼等の費用は、女に金を使つたり、上等なお馳走をお互の間でさへしななければ、大した額に上ることはない。船がツンベルグの傍に碇泊してゐる間に、多量の銅樟腦その他の個人所有の商品を運び込んだ。然し積荷は二日のうち一日だけである。猶水その他の航海中の貯藏品をも積み込んだ。

個人買品の
積込

各階級の役人及び通譯は積荷に臨席するために困難な海上約一哩

行かねばならなかつた。猶監視船を配置してゐるが、然し和蘭人を監視するのには遠すぎる隔れた位置におくのである。そこで和蘭人は返して貰つた小舟を利用して、近くの數多の島に散歩をすることが出来た。この時従いて来る日本の役人は、和蘭人がその島で遊んだり、好みのまゝの所に行くのを別に妨げはしなかつた。人が棲んでゐる大きな島に、和蘭人が少し長い時間留まつてゐると、監視船が監視のためにこの島に近寄つて来る。村の人たちは我々を驚いた顔で眺め、見慣れない我々の圓い大きな眼に驚く。それで彼等は我々を見ると和蘭大目と叫ぶのである。

船上に残つてゐなければならなかつた時を利用して、私は附近の島々及びバペンベルグで植物採集をした。秋の間に種子、植物及び異邦的な灌木を多量に集め、これをバタヴィアに歸る船に積んだ。そこから歐洲に送つて貰ふのである。

千七百七十五年十月十四日に和蘭船は長崎港からバペンベルグに曳船され、そこに投錨して、残りの貨物を積むことになつた。

バペンベルグ【日本名は前出。天使教徒山の意】は尖峯よりなる小島で、その岸は二方は共に斷崖絶壁である。然し他の二方の海岸から上陸が出来る。頂上に十五分かつらずして登ることさへ出来る。この島の名は、日本人が葡萄牙僧に宗教迫害を加へた際に、葡萄牙僧がこの島から海に投げこまれたのによるのであると云ふことである。この山の麓に、積荷を殆んど終り、方に風を待つて帆を擧げるばかりになつてゐる、支那船數隻を見た。

フィシエルゼイランド【漁夫島の意。鼠島？】はバペンベルグの直ぐ傍にある島で、長く平たい一帯の丘からなつてゐる。この二つの島には人が棲んでゐない。役目柄私は、バタヴィアに向つて發たねばならぬ、前任者と交代するまでは船上にゐなければならなかつた。出

帆の日は奉行によつて定められる。そしてこの命令は、風が如何に逆風であらうとも、如何に暴風が吹き荒れやうが、少しの遅待もなく實施される。この日は風が全く反對であつたので、吾等の船を曳船するの無慮百艘以上の小舟を使はねばならなかつた。大きな船に幾本かの綱でつなげられた、幾筋かの小舟の長い糸が大船を運かさうとし、日本の漕手が調子をつけた懸聲を出して元氣をつけてゐる光景は一寸描き出し難い。

船の人が錨を上げるや、その火藥、武器及圖書入の函が返附され、又病院にゐた病人が船に連れ返へされる。

帆を揚げるや、長崎の町、商館及び二隊の近衛隊に敬意を表するため、大砲が放たれる。

千七百七十六年の一月一日に我々は新年の祝をした。多數の日本人が我々の樂を共にし、この祭日を一層愉快にする助をして呉れた。

大地は全く赤裸で、一草の残つてゐるものがない。數日前から酷しい寒氣が續いたのである。然し正午には上級の番所衆、下級の番所衆、オトナ、通譯、副通譯、訪問者、検査役及び印度會社の交易に使はれてゐる他の日本人がやつて來た。皆美々しく禮装をして商館に來て、新年の祝辭を述べた。皆商館長を特別に訪問したが、館長は彼等を饗宴に引き留めた。料理は凡て歐洲風に設へてあつたから、我等の賓客は大して之を味ふことがなかつた。實際スープは誰れも食べたが、牛乳入の焼豚、ハム、サラダ、サンドウィッチ、ツウルト及びその他の生菓子類の如き料理は一寸味ふだけで満足してゐた。彼等がかく小食なるに拘らず、皿の上には何物も残つてゐなかつた。それは、彼等は獎められる物を一枚の皿に入れ、これが一杯になるや、これを町に送るのである。この皿には紙が添へられてあつて、この贈物の宛先の人の名が書いてあつた。かくの如くにして數枚の皿が送られるのである。日本人は肉、

タ或は鹽で貯へられた食品は普通食べない。かゝるものは或る病の治療薬として貯へておくのである。例へば鹽バタの團子を製つて、これを肺病の薬として毎日飲むのである。食後に我等は熱い日本酒を饗應した。これを漆塗の木盃で飲むのである。

この大饗宴に際し、商館長は酒の酌をし、又島の娘の對手となるために、數名の娼婦を町から呼んだ。食後にこの女たちはいろ／＼の食品を四角な小さな卓にのせて人に奨めた。この卓にはかなり上手に出てゐる松毬が一つ宛飾つてあつた。松の葉は青絹で出来てゐて、これに軽く綿の毛が冠らせて、雪を形象つてあつた。この女たちは我々に酒の酌をするにこの國の風に從ひ、踵の上に腰を下ろしてして、起立してしない。その夜のうちに數番の日本の踊をした。かくて午前五時に我等の賓客は辭し去つた。(この娼婦のことは再説する考である。特に一章をこのために費すつもりである。その私的生活は知つてお

く價值がある。)

同じ頃の事であるが、一つの事件が私に起つた。事件それ自體は大した事ではなかつたのだが、この爲めに私は非常に不安を感じ、迷惑を蒙り、この平和な孤獨を亂だされた。

私の資格では、自分の用をさせるために、奴隸を買ふことは出来ないのだが、貨物上乘が親切に自分の奴隸を一人借して呉れた。それでこれを翌年この人が連れに来るまで私が保管して置かなければならぬといふことになつた。この奴隸はバタヴィアに妻子を置いてあつた。それで今年はこの可愛い者と再會することを楽しく期待してゐたのであつた。然るに豫期が外れたので失望して、主人からどうして貰ふことも望めないの、どうしたの、だか、又なんで逃げたの、だかわからないが、逃亡を企てて、影をかくしてしまつた。最初の日にはたゞ仲間のうちを探して見るに留まつた。しかしこれは無駄だつた。翌日になる

亡
奴隸の逃

と通譯及び出島にゐる日本人は更に精しく探し廻つたが、これも前日同様何等の効がなかつた。最後に三日目になつて、長崎奉行は町から各階級の通譯及び番所衆を多人數寄こして、その全日を搜索に費した。漸く日暮になつて、この男を古い倉庫の隅で見つけ出すことが出来た。若し發見出来なければこの地方全部を搜索する命令が出る所であつた。事件は江戸の幕府に報告された。

日本人は國內に外國人を入れることを恐れてゐるのだから、その騷は大變なものであつた。國內に入ることは不可能なことは云ひ難いが、とにかく非常に困難なことである。この逃亡は寛恕しうることであるが、然しこの爲めに奴隸は不幸にも嚴罰をうけなければならなかつた。彼は棒で打たれ、鐵鎖をつけられた。日本人はこの處罰を以つて満足したので、事件は無事に解決した。

總決算

一月二十日に和蘭人の勘定の決算をした。和蘭人の所得となる凡

植物採集

ての爲替は清算された。通譯、商人、買受人その他凡て要求すべき債權を持つてゐる者が會計の事務室にやつて來た。凡て金錢を受けとるものは本人が出頭しなければならぬ。代理者には支拂はないからである。

二月七日に私は初めて長崎近傍を植物採集のために歩いた。漸く奉行から得た許可に従つたものである。通譯、下級通譯、各階級の番所衆、給仕數名と、更に使傭人の一群が私に伴いて來た。この大勢のお伴は可なり私の失費になる。途中にある茶亭で茶菓を供しなければならぬからである。時には失費が十六リクダール或は十八リクダールに上ることがある。然し私は彼等の歩き方の速度に自分の速度を合はせてやるだけの親切はなかつた。且つ彼等は私に従つて丘を越え、山を越えねばならなかつた。私はこの散歩を一週必らず一回、時には二回した。これは私が隨行して行つた和蘭使節が江戸に出發するま

で續いた。

参府準備

出發の時期も近づいたので、二月十一日から江戸行の旅の支度に取りかゝり出した。使節は陸路を行くだけでも品物はいろ／＼下の關、兵庫及びその他の港に海上を経て送られた。この日一隻の大きな船に瓶詰の葡萄酒、瓶詰の麥酒、火酒の箱、庖厨具、歸途に買ふ豫定の商品を入れる空箱を澤山積み込んだ。この舟は下の關に向ふ筈で、そこで我々を待ち合せ、そこから我々を兵庫まで運んで來れる豫定である。

献上品

この日及びこれに續く數日は献上品の整理に費された。將軍、世子、元老たち及び幕府の主なる高官たちに贈られるものである。献上品は色及び質を取り交ぜた毛織類、上等の縵紗絹物などである。これらのものは大きな箱に荷造りされたが、これはうっかり水に濡らしたくない。そこでこれを雇ひ入れた動物の脊にのせて、三百二十哩を運ばねばならぬ。

日本の大晦日

二月十八日は日本の大晦日に當つた。日本人は前日及びこの日を勘定の決算をして、この年の仕事に結末をつけるのに費す。この日以後は新しい勘定を初め、これが六月まで續くのである。六月に又總勘定をする。

日本人の利息

日本人は支那人と同じに高利を食ふ。一割八分乃至二割の利息である。新年になる前に支拂を請求しない債權者は債權を失ふのである。

日本の元旦

日本人及支那人の新年は十九日【歐洲曆】から始る。新年になると各人は晴衣を着る。普通白に青の碁盤縞をひいた美しい衣で作られる。各人は一家を引き率れて廻禮に廻る。かくてこの月一杯は祝宴と娛樂に殆んど費されるのである。

繪踏

二月二十二日【日本曆正月四日】及びこれに續く日には、かねて世に知られた儀式がある。これは純良なる基督教徒にとつては誠に悲

しみに堪えないものである。日本人は脚下に十字架及び基督、マリアの像を踏むのである。この不思議な儀式の模様について知りたいと切に願つてゐただけけれども、江戸の幕府に行く吾等の旅の準備を相談しやうとして町の奉行の許に赴いた時に、實見の機會を捉へえた和蘭の役人が一人あつたのを知つたに過ぎなかつた。この事は、和蘭人は基督教徒の間に最も尊重される畫姿を足で踏んだ上でなければ日本に入國を許されないのだと、主唱する二三の著者の笑ふべき又誤れる考の當らざることを明に證するものである。私は更に云ひ加へて置く。和蘭人は、最も小心なる良心が驚くやうな儀式すら、ならん要求されることはないのである。問題の儀式は、以前に基督教が根を張つてゐたあらゆる地方の日本人に課せられるに過ぎない。政府はこの方法により、この宗教が完全に根絶せることを證し、又この宗教をこの國に入れたる葡萄牙人に對する怨恨の情を不朽に傳へんとするので

ある。奉行及びその部下を除く凡ての住民は前述の畫姿の上を歩まねばならない。検査役は各區劃の住民を集め、その名を呼び、事が順序正しく謹直に終るや否やを監視するのである。この儀式は長崎で四日間續けられる。續いて畫姿は近郊に運ばれ、その地にて同じ儀式がなされるのである。凡て終つた後に、翌年まである箇所には保管される。畫姿は銅で出来てゐて、半オーヌの大きさである。

商館長の
暇乞

二月二十五日に商館長は荷物上乘、助手數人及び通譯を引き率れて町に至り、江戸に向ふに當り奉行に暇乞を告げた。

荷物の檢
査

三月二日に我等の荷物は検査をうけた。藥品を納めた箱は直ちに倉庫に送られ、我等の出發の時まで、こゝに密封の上保管されるのである。この箱は通常かなり大きい。これに納めた藥品は醫師の支配してゐる製藥所で作つたもので、製藥所は醫師の棲家のすぐ傍にある。

第八章

和蘭商館より江戸なる日本の行政皇帝【*Empereur Civil*】將軍のことに許に派遣されたる使節の紀行。千七百七十六年三月四日より六月二十五日に至る。

出發

千七百七十六年三月四日【安永五年一月十五日】に使節は出島を出發して、江戸に向つた。この出發は普通日本の年の第一月十五日或は十六日と定められてある。使節は三人の歐洲人だけである。使節フェイト氏使節隨行の醫師の資格を以つてこれに従へる私及び彼の秘書コオレル氏 (*Kohler*) である。我々の隨行者は仲々多い。二百人に上る。そのうちには役人、通譯、人夫、下僕その他があるが、凡て日本人である。町と商館とを結ぶ橋の際にゐる警固隊の前を通る時、一同は

使節及隨員

見送

綿密な検査を受けた。然し密封されてゐる我々の行李及び手荷物はそのまゝ通過した。凡ての和蘭人及び町のオトナ、上級及下級通譯、その練習生、主任及び副給仕、番所衆及び副番所衆、クローリ或は人夫の監視者、その他の商館の用をする日本人全部が我々に従つて、共に長崎の町を横切つた。日本人たちは町の限界外にある寺の處まで我々に従つて來た。こゝで我々は一同に酒を振舞つた。我々の旅に加はらない日本人たちは、道に添つて、位に従つて列をなし、長さ半哩に及ぶ垣を兩側に造つた。この間を我々は通つて行くのである。かゝる敬意の示

隨行の番所衆

し方は和蘭人の虚榮心を少なからず悦ばした。長崎の奉行は一人の番所衆をして往も還も使節一隊の嚮導を務めしめた。この役人は大きなノリモノ (*Norimon*) に乗つて旅をした。そしてその尊きことを示すために槍を一本先行させてゐた。この人の命を實施するために數名の副番所衆が添へられてあつた。第一級

通譯は、かなりの年配の人であつたが、道中の勘定及び心附をする役を擔當してゐた。その賢明なる遣方及びその儉約振りは全く賞讃する價值がある。その實は、この方がこの人の得にもなるのである。この一隊の費用は和館商館が負擔するのであるから、會社の費用を節約すれば、會社はその善行について多大な賞與を與へるのである。この通譯は駕籠 (Cangso) で擔がれて行つた。

商館附屬の二人の日本料理人が和蘭人の食事を調べた。和蘭人は使節と卓を共にした。長崎奉行は我々に、多くの使用人のうちから和蘭語を了解し且つ話しうる六人の日本人をつけて呉れた。

料理人は常に一隊に先んじて出發し、正午なり夕頃なりに、我々が行を停めるところに着くと、食事の用意が出来てゐるやうになつてゐた。彼等は必要なる食料を持つて行くのみならず、テーブル一基、折疊式椅子三脚及びテーブル掛一枚などを持つて行くので、我々が着いて見る

といつても食卓の用意が出来てゐるのを見るのであつた。彼等には筆生がついてゐて、委細を記し、費用を録することを役としてゐた。

使節、その秘書及び私は美事に漆で塗つてある上等なノリモノに各々のせられた。ケムペル (Koempfer) の時にはこれより待遇が悪かつた。なぜなら、この醫者及び使節の秘書は寒氣その他天候の難に曝らされて、馬で旅をしなければならなかつた。

ノリモノは馬車の胴體の一種の如きもので、薄き板及び竹枝で出来てゐる。前方に窓があり、兩側に入口がある。そのうちに樂に坐ることが出来るし、膝を少し屈すれば横になることさへ出来る。内部は絹の上等な布及び切つた天鷲絨で張つてあつた。底には天鷲絨の被布をかけた天鷲絨の褥がある。脊及び兩肘は長枕に倚らせるのである。中央を穿つてある丸形の布團の上に坐る。前方に小卓が一個乃至二個あつて、こゝに文具、書籍その他の物をのせて置くことが出来る。

空気の流通を計るために入口の窓を下げることも出来れば、これを帳及び竹の巻簾で閉めることも出来る。私はこれほど便利な乗物を見たことがない。方に移動する部屋の如きものである。餘程長い間このうちにゐなければ疲は覺えない。箱の外側には漆を塗り、晝で裝飾がしてある。屋根の上を棒が一本通つてゐて、これによりこの乗物を肩で擔ぐことが出来る。輿夫の人数は旅人の階級に應じて定まるのである。少くとも六人はゐて、時には十二人以上のことがある。輿夫の半数は他と交代するために空手で歩くのである。彼等は時々歌を唄つて、自ら慰めとし、一方歩調をとる。

道具類

海路により我等より先行せしめた品物の外に、猶我々の衣類を入れた小形の行李、提灯、日常に消費するに充分な量の葡萄酒及び和蘭の麥酒を多量、道々茶を飲むために一日中何時でも茶の用意が出来てゐる爲めに日本製陶器の茶道具一式などと云ふものを馬や擔夫に負はして

蘭人の寝具

行つた。歐洲人は胃を傷ひ易いこの飲料よりも葡萄酒か麥酒を一杯のむ方を好んだ。そこで我々は常にノリモノのうちに葡萄酒一本に今一本麥酒と、それに長方形の漆器にバター入のサンドウィッチを入れ、たものを添へて、足の先に置いておいた。

旅人は凡て自分の寝具を携帯しなければならぬのであるから、吾々も自分等のものを携へて行つた。寝具は掛布團、クッション及び敷布團からなつてゐて、絹布は透織の天鷲絨で作つてあつた。凡てこれらのものは、印度會社は富裕で勢力があると云ふ者を深く浸みこませることが出来るやうに、美しく飾つてあつた。

同行の日本人たちは徒歩又は馬上で旅をした。各々圓錐形の笠を戴き、これを一本の紐により顎の下で結びとめ、扇子、傘及び時には羽毛の如くに輕き油紙の幅廣きマントを携へてゐた。馬子及び最下級の下僕の如く常に徒歩で行くものは、履物として極めて薄きプロツカン

日本人の旅行法

一行

(Brodequins) 【脚絆の意か】を穿ち、藁の靴を數足持つてゐる。身輕になるために、彼等は衣類の尻を端折つてゐる。

多數のあらゆる階級の人が、かゝる大人數な一隊を作つて、或る者は徒歩で、或る者は馬上で、あるものは輿で行く、その光景は外國人にとつて極めて愉快にして且つ極めて物珍らしきものであつた。到る所で我々はこの國の貴顯と同様の敬意を拂はれた。我々は綿密なる注意の下に警固されてゐたから、何ら危険なる事件の起る心配はなかつた。我々は極めて正確に又念を入れて待遇されたから、何等この上望むことはなかつた。我々が必要を感じずる前に凡てのことは爲されてしまふ。そこで我々は飲み食ひ讀み書きなどして樂み、或は眠り、或は輿に身を置くより外にすることがなくなつてしまつた。

最始の日には我々は長崎から二哩の地にある日見の傍を通過した。更らに一リユー寧しる一哩と云つた方がよからうと思ふ距離を進ん

諫早

日本の宿の待遇

で矢上^{Tsugami}に達し、矢上より四哩の地にある諫早^{Tsahira}にその夜は宿つた。

我々は矢上で晝食をした。この土地で、私のこれまで度々の旅のうち経験したことのないやうな、懇懃な態度で遇された。この國一般の風習によつて、宿の主人が途中まで出て来て我々を迎へた。そして想像しうる限りの敬愛なる態度で、我々にその宿に來らんことを懇願し、我等を歓迎すべき旨を力説した。我々がその乞を納れてやると、急いで我等の嚮導をつとめるのである。我々がそのうちに宿に到着すると、小さな卓の上につまらないものを載せて我々にすゝめ、これに續いて茶を供し、又喫煙の道具を備へるのである。我々はこれには一切手をふれなかつた。次いで我々の部屋ときめられた部屋に通されると、そこには既に食事の用意が出来てゐた。食慾を促すために、火酒を一杯飲んだ後に、我々は晝食を認め、珈琲を飲み、煙草を喫む人が煙管に煙草をつめて火をつけるや、直ちに行を續けることにした。

小遣

この土地に来て、我々は日本貨五十テールを渡たされた。和蘭貨にして同じ額のリクダールに當るものである。旅行途次の不時の費用の料として、和蘭會社がこの僅かな手當を出して呉れるのである。うまく考へてあることで、一文も後には残らないやうにしてある。これは私が初めて見た日本貨であつた。我々は既にこの手當を使ひこんでゐた。年玉として出島で私の奴僕に與へたもの、及び私のノリモノの與夫に與へたもので既に十リクダール以上の額に上つてゐた。翌三月五日には更に旅を續けた。三哩行つて大村^{Omura}で晝食をし、更に五哩先の彼杵^{Kishiro}で宿つた。ケンベルは千六百九十一年に第一回目に幕府に行つた時に、外の道から彼杵に行つた。そして彼は大村灣を渡つてゐる。然し我々は、大村灣を渡ることを避けるために、諫早を通つて大分迂廻をしたのである。しかしケンベルが翌年第二次の參府をした時に通つた島原^{Simabara}の大灣を通ることはしなかつた。

大村

彼杵

嬉野

牛津

温泉

六日には朝の中に三リユー歩いて嬉野^{Oribe}まで行き、そこで硫黄泉を見ながら、武雄^{Takikyo}で晝食をするまで更に三哩半歩いた。午後には鹽田^{Utsunomiya}の近くを通つて小田^{Oda}まで三哩半。そこから更に宿をとつた牛津^{Ushiosoy}まで二哩半。

温泉はむしろ沸騰泉といふべきものであるが、これは皆閉ざした一室のうちにあつて、これに附屬して、病人の便宜を計つて、綺麗な家が置いてゐる。病人は湯舟のうちに坐る。管が湯舟まで來てゐて、この管の活栓をねぐれば水なり湯なり望むものを入れることが出来る。同じ土地のうちに便宜な部屋が澤山あつて、こゝで入浴後休んだり寝たりすることが出来るし、又景色のよい散歩場もある。日本にはこの温泉の設備の數は非常に多い。日本人は、梅毒、中風、皮膚癬、リウマチ、其他の病氣になると温泉に入るからである。

鹽田の土

鹽田は燒のよい褐色の土甕の産地として知られてゐる。この土甕

は數噸の水を容れうるのだから、私の知つてゐる限りでは一番大きなものである。和蘭人はこれを非常に澤山買ひ入れて、バター、グアイアその他の印度の會社所在地に送り、その地でよい價で賣る。土甕は日常の飲用水の容器として使はれるのである。水はこのうちに凡て渣を沈澱させてしまふから、このうちに衛生的に清冷純料な水を貯へることが出来る。

肥前

出島を出て以來山間の困難な道ばかり通つて來たが、一度肥前Fusenの地に入るや、眼に入る土地は豊饒であり、村落も相接し、且つ注目すべきものが多くなつた。ある村落になると半哩の長さを有し、且つ隣村とたゞ小川一流橋一本を境としてゐる。

この地方は到る處よく耕され、米田その他を見ることが出来た。

肥前の地も亦美事な陶器を以つて知られてゐる。私は既にこの陶器を市場又は商館で見つてはゐる。然し私は旅行の途すがら原産地で

肥前の陶器

出来るだけこれについて智識を集めることを忘れなかつた。この陶器は眞白な極く上等の土で捏つたもので、その勞作は非常に手數のかゝるものである。然しこの陶器はこの上もなく白く且つ透明なのであるから、その勞は充分酬ひられるのである。

嘉瀬川

七日に我等は嘉瀬川Kassagawaと云ふ大きな川を横切つた。こゝから一哩先Kanasakiに佐賀の町がある。一哩半の長い町である。更に三哩行くと神崎Shinakaと云ふ佐賀に比すればそれほど注目すべき町でない町に來る。我々はFio aburaヒヲサバヒヲサバ【目達原メダハラのことか】に至る半分道のところで晝食をした。その後神崎から二哩の地なる中原Nakabara更に一哩餘なる轟木Fodorikiを経て、田代Tayaseに宿つた。こゝは轟木から一哩の地である。

佐賀

佐賀はこの地方の首府で、濠と城壁に圍こまれた城があつて、この城にこの地方の大守が住んでゐる。町の入口に警固隊を配置してある。この町は日本の他の町と皆同じに規則正しい形に出来てゐて、その街

路は皆廣く且つ整然と互に並行してゐる。運河が數條各方向にこの町を横貫して、街路内の水利をなしてゐる。

村落と都
會との區
別

日本の村落は町と同じ位に長いのであるが、容易に兩者の區別は出來る。村は一本の街路よりなく、町には數條の街路がある。町は堀や塀に圍こまれ、大抵は城がある。

佐賀地方
の婦人

この地方の住民は出島の人と較べると體格が非常に劣つてゐる。この差は婦人に於いて殊に甚しく感ぜられる。婦人は體つきもかなりよく、顔はむしろ好感を與へる方であるが、眉を取つてしまつて不具者になると云ふ、自分を醜くする術を心得てゐる。この毛を剃ることは、長崎に於いて齒を黒く染めると同じく、その女が夫の保護下にあることを示すものなのである。

田代

我々は田代に泊つた。ケンベルは當時縁起の悪い土地としてこの地に足をとどめることを禁じられたと稱してゐるが、我々はそれを顧

悲劇的事
件

みなかつた。我々が今してゐるやうな旅の途上にある悲劇的な事件が嘗つて起つて、それによりこの迷信的な考が初まつたのである。番所衆と主任通譯とが口論をした擧句、番所衆が通譯を殺し、續いて自ら刃に伏したのであると云ふ。

飯塚

三月八日には凡そ十哩を進んで、飯塚Iesakaに行つた。途上に非常に高い山や大小の村落があつた。先づ原田Harda、二哩の地、續いて山家Tamayo、一哩の地、我々はこゝで晝食をした。この地と冷水峠との間に、高い一哩半に互る山がある。冷水峠は景色のよい所で、こゝで休憩して、我々は役人達と酒を酌み交した。この國の習慣に従ひ、宿の主人に僅かばかりの心附を與へた。凡そセマース五コンデリン程である。そこから一哩半行つたウルシニOutsini【?】で輿夫は一休みした。

冷水峠

筑前の國を通る間はいつても、この國の太守が我々に敬意を表し且つその領土内で我々の嚮導を務めさせるために派遣した、一人の役人が

旅中の外
人の待過

付き添つてゐた。商館内で歐洲人が卑しいもの扱にされ、又日本人が外國人を蔑視してゐることは事實であるが、我々の旅行中往きも還も到る所この上なく好遇されたのみならず、むしろ尊敬の意をさへ示して呉れたことも又事實である。この國の大守たちがその伴揃をして參觀する時と同様に名譽ある取扱をうけたのである。國々の境に我々が到着すると必らず役人が一人その國の大守から派遣されてゐて、人馬舟に對して必要な援助をなし、且つ次の國境まで我々に隨いて來て、そこで隣國の役人と交代するのであつた。住民はその領主に對すると同様に丁寧に我々に敬禮し、且つ敬意を表するのであつた。即ち住民は身をかがめて、その額を地につけ、時には我々に脊を向けて立つのである。これはかなり奇妙なる方法ではあるが、これにより自分は貴下の如き高位なる人を正視する價なきものなりと信ずる旨を表はすのである。この王國內いづこに於いても道路は非常によく手が入

つてゐて、道幅廣く且排水のために溝がついてゐる。和蘭人同様に各國主は年に一回參觀の旅をしなければならぬ故に、その通過前に道に砂が撒かれ、掃除をされ、塵埃馬糞は悉く取り除かれるのである。暑氣甚しい時には砂塵を鎮めるために撒水するの注意さへする。又秩序を保ち、旅人間に喧嘩口論なからしめんために、首府の方向に赴くものは道の右側を歩み、首府の方向より還るものは左側を歩むことを強制する規則を設くる位に、深く注意を拂つてゐるのである。歐洲の如何なる國に於いても、日本に於ける如く、愉快に且つ容易に旅をしうるよきなきことを斷言しうる。尤もこの國では歐洲の如く道路を破壊する馬車の用を知らないのだから、それだけ道路の維持が容易である。日本の道路は普通生垣が兩側についてゐる。生垣のうちに茶の樹があるのを屢々見ることが出来た。

里程は棒杭に記されてゐる。同時にこの棒杭が四辻にある時は、旅

人が道を迷はないやうに道標にもなつてゐる。

日本人を漸く野蠻の域を脱したのみで、我々が自負してゐる文明の高き位置には遠く離れてゐるものと、多分信じて居られるだらうと思ふ大部分の讀者諸子は、かくの如く注意と要慎の行き届いてゐることに驚異されることと思ふ。然し歐洲の道路が放任されてゐるのに反して、日本の道路はあらゆる點で愉快な趣を呈してゐることは、正銘の事實なのである。又この賢明なる設備をして呉れた行政者の名が大石に刻されて残されてゐる如きことがないのも事實である。それも、この行政者が凡て自分の義務を遂行したに過ぎないと信じてゐるからなのである。凡て道路の里程は江戸なる日本橋Nipponbashiから起算してゐる。

この王國內ではいづこにても馬車の用は全然知られてゐないことは既に述べた。裕な旅人は馬で旅をするか、或は駕籠又はノリモノで

輿がれて行く。貧しき者は徒歩で行くのであつて、藁製の靴、換言すれば上皮なき底だけの靴を穿き、これを藁の紐で結びつけてゐる。猶彼等は半長靴とも云ふべき編上靴様のものを穿いてゐる。これは釦を以つて腓脛の後でとめられてゐるか、或はその上部で紐で結びつけられてゐる。【以上の記述は草鞋脚絆のことと思はれる】長い着物の代りによく布製のズボンを穿く。これは腓腸のところまで来てゐる。武士はズボンを腿の中程で絞めくゝる。【以上前半は股引のことか。後半は袴のことか】。馬で行くものの姿はなかなか面白い。一頭の馬の上に乗る所がいくつもあることが屢々ある。時には一頭に一家揃つて乗ることがある。父親は鞍の中央に、兩脚を馬の頸に添つて延ばして乗る。その妻は片側の籠のうちに入り、子供たちは今一方の側の籠にのる。徒歩のものが一人馬の手綱を曳いて行く。

富裕なるものはその富の程度と卑賤の程度とにより駕籠或は可な

駕籠

ツンベルグ日本紀行

り大きな立派な椅子で輿がれて行く。駕籠の甚だ小さいものはそのなかで踵の上に坐らねばならぬからかなり窮屈である。それに小さな駕籠は四方が開いてゐて、且つ小さな天蓋よりない。これには二人しか輿夫がついてゐない。

ほんとの駕籠は今話した椅子よりも大きく且つ樂であつて、四方が鎖ざしてあるが、決して絢爛たるものではない。これは略四角型である。

乗物

最も綺麗で最も樂なのはノリモノであつて、この事については既に述べた。これには數人の輿夫が要るから、これを使ふのは高位の人に殆んど限られてゐる。どこの宿屋にも輿夫が澤山ゐて、使つて呉れと頼む。彼等は非常に長い距離を非常に重い荷を持つて歩いても平氣である。それと云ふのが、彼等は乗物と旅人とを擔ぐのみならずその上に、屢々棒の先又は竹の先に結びつけた包を肩にして行くことがある。

輿夫

るからである。彼等は均らして一時間に一里行き、一日に十里又は十二里を行く。

九日も旅を続け前夜の宿泊地から三哩半距つた所で直方川Koyanossuを越え

ねばならなかつた。更に一哩半先の木屋ノ瀬で晝食をした。三哩先に黒崎Kotosakiがあり、又三哩先に小倉Ko'ouraがあつた。

小倉

この最後の町は日本中で最も大きな又最も商業の盛な町の一つで、長さ一里に亘るものである。一流の河がこの町を横切つて海に注いでゐる。不幸にして港を舟が混雑するまゝで、放置してあるものだから、小舟か小型の船でなければこの港には入れない。町は横長の方形なしてゐる。町の入口には悉く警固隊を置いてある。町の一端、河の近くに、この國流に堅固に固めた城があつて、濠と城壁に圍まれ、高い櫓がその側面を固めてゐる。小倉地方の大守がその隨臣と共にこのうちに住んでゐる。

ツンベルグ日本紀行

この町の手前まで二人の若い紳士が大守の命で我々を迎へに來てゐた。二人は吾々と共に町を横切つて宿まで案内をして呉れた。その宿では心地よく宿り、且つよく待遇された。我々は翌日の午後になつて初めてこゝを發つた。

永年の習慣に従つて我々はこゝで一テール五マース即ち約一リクダール半の心附を、長崎の長官が我々の旅行中の用をするためにつけて呉れた奴隷たちに、分配した。

我々はこの宿で奥の棟を占領した。これがこの家の最もよい場所なのである。灌木、草叢鉢植の植木及び花で裝飾した庭に臨んでゐて、こゝを散歩することも出來た。すぐ傍には外國人用の浴室の設備もあつた。

普通にこの庭を飾る植物は野生の松、印度躑躅、印度菊等である。猶私は二つの植木に注意を向けた。一つはオクバAnkuba【アラキのことか】

庭

祝儀

と云ひ、他はナンデナNandina【ナンテンのこと】と云ふ。共にこの國の迷信によれば、植えられた家に幸福を齎すものとされてゐる。家の往來に面した部分は仕事場或は店をなし、料理場及び家人の居間は内部にある。外國人はこの家の最も退きこんだ最も靜かな部分を占めてゐるので、往來の騒音に煩はされることは決してない。

家は一般に廣いが、二階以上のことはない。その階下だけに人が棲んでゐて、他は納屋に使ふ。家の外部は誠に奇妙な趣を呈してゐるが、然し非常に清潔である。竹片と漆喰とを併せ用ひて檻の如きものを形作るやう巧みに配置してあるので、一見石造なのかと思はれる。内部は持主の好により數室に分かれる。この内部の各室を分ける側壁は單なる襖であつて、これに丈夫にして且つ透明な紙を貼りつける。この襖は上下の板敷に造つた二條の溝により迅速に且つ正確に開閉が出来る。これにより我々の旅の間我々の爲及び付添の人の爲めに

家内の模様

寝具

直ちに部屋を造ることが出来たのである。食堂も決して忘れられてゐなかつた。これは他の部屋よりも大きい。この襖は直ちに穿めたり外したりすることが出来る。隣室同志は互に隣の部屋のことはいく見えぬ。然し話聲は明瞭にきこえる。日本人は家具を使はない。立派な寝臺もない。そこで我々も單に疊の上に敷布團及び掛布團を敷かねばならなかつた。我々に付添つて來てゐる國人も同じやうにするのである。彼等の寢床は我々の寢床よりずつと早く準備することも出来るし、片づけることも出来る。我々の心地よい柔かな長枕の代りに彼等は漆を塗つた圓筒形の木片に頭をのせるのである。そしてこれによりその結髪を少しも亂すことなくすむのである。彼等の着物は同時に掛布團となるのであるが、朝になればすぐ之を着て、帶をしめる。そこで朝の支度に長い時間を費すことのないのを想像しうるであらう。彼等は亞細亞の他の民族と同じく、卓子や椅子の用を知

調度

らない。彼等は部屋の板敷を蔽つてゐる藁の敷物の上に脚を交叉して坐るのである。旅客一名宛の前に、各々皿一枚と漆塗の碗と食器とを載せた低い四角な卓【膳】が置かれるのである。

この邊で話を切上げて、讀者を再び我々の旅につれ戻らう。我々はこの宿で全く監禁の目にあつた。と云ふのは我々は町を歩き廻ることとは全然許されなかつたからである。かくて我々は好奇心を満足することを得ずに十一日の夕方この町を出發した。我々は帆前船で Simonoseki 下ノ關灣を渡つた。人の言によれば幅三哩であると云ふことである。その夜はある宿屋に泊つた。

下ノ關海峽

太閤遭難
記念碑

小倉と下ノ關との間に、干潮の時には非常に高く水上に出るが、満潮の時には頂上が水面とすれ／＼となる岩が見える。太閤帝が乗つてゐた船がこの岩に衝突し、こゝで難船した。太閤は幸にして助かつた。然し船長は自分の不器量を歎いて、この國の残酷なる習慣に従ひ切腹

下ノ關港

をした。この悲慘な事件を記念するため一オーヌの大きさの四角な切石がこの岩の上に置いてある。

下ノ關はこの國の太守の住んでゐるところでもなければ、又この帝國の大官のゐるところでもないのだけれども、その占むる位置からして重要な場所となつてゐる。その港はよく知られてゐて、且つ非常に出入が激しい。こゝで大小様々の型式の船三百艘を見ることが出来る。東海岸と西海岸に互つて沿岸貿易に従事する商船は、凡て往航或は歸航に當り、この港に商品をいくらか置いて行く。それに暴風の際或は逆風に逢つた際にこゝは安全なる避難所となる。

下ノ關の
商業

この町にとつては陸上の商賣も亦利益を齎すことに於いて海による商賣に比して決して劣らない。この帝國のあらゆる地點から商人が群をなしてこの土地にやつて来る。この土地では各種多量の物品を手に入れることが出来る。これは外の土地では得がたいことであ

遊廓

る。ことに揃つてゐるものを得ることは出来ない。なぜなれば他の町や港の商賣は主としてその所在地なる國の商賣又は産物に限られてゐるからである。

日本人は外來の人に對し親切であり且つ行き届いた待遇をするから、この土地の如く人の出入の激しい土地に、彼等にとつて必要缺くべからざるものと考へられてゐる、ある設備を設けないうで置きはしない。そして日本人はこの設備を決して不道德だとは感じないのである。旅客は下ノ關で淫蕩を目的とした家を見出すことが出来る。しかしこゝに近づくことは和蘭人には禁じられてゐた。我々は町の街路を歩くことのみしか許されなかつた。入口は皆堅く鎖されてゐた。

下ノ關の
位置

日本國をなしてゐる諸島のうち最も大なる島なるニボンと呼ぶ島【本州のことなり】の一端に下ノ關は在る。この島には二人の統治者の首府が二つある。一本の大道がこの町から江戸に通じてゐる。し

かしこの道は非常に險阻で且つ山が多いから我々はこれを探らなかつた。

アハ海苔

この海岸で海産植物の一種で、日本語でアハ海苔と云ふものを探る。これを乾かして、焼いた後擦んで粉にする。その結果出来た細粉を煮た米と一緒に食べるか、或は味噌汁Misoに交せて食べる。

西班牙煙草

支那人がこの土地に西班牙産の煙草と同じ位上等な煙草を綠色透明な壘に入れて持つて来る。これを土地の人は加答兒を癒すために服する。寒氣と暑氣とが交互に来るのでこの種の病が非常に多いのである。

商品注文

我々は歸路に持つて行くために二つの重要な品物を利益ある方法で約束してゐいた。一つは米で、この地から極めてよいものが出る。他は炭で料理場用及び部屋の保温用に使ふのである。

乗船

三月十二日に我々は大きな日本船に乗り込んだ。これは九十尺の

船室割

船長を有し和蘭會社が毎年兵庫兵庫で借り入れるものである。會社は百三十哩弱の航海に四百八十クダールを支拂ふのである。この航海は風の都合がよければ八日以上はかゝらないのである。今一つの船が隨行のものと荷物をのせて豫備船として我々に従つて來た。

我々はキャビンを占領した。番所衆達は片方の舷側の特別な一室を占め、和蘭人は反對舷の大部分を占めた。元來この船のこの部分が二つの部分に分かれてゐるからである。一部は極めて狭い部屋になつてゐて、これを使節一人のためにあてた。秘書と私とは今一つの部屋に寝たが、これは前の部屋に比しやゝ大きい。なほこれを食堂に使つた。通譯及び使傭人はこの船の残りの部分を占めた。この船は日本の造船所で出来た船のうちで最も大きなもの一つである。船幅は船尾に於いて約二十五尺あり、船尾の中央に大きな穴があいてゐる。これは自由に取り脱すことが出来る、この船の舵が法外に大きいから

乗船の構

である。この奇妙な船形は政府の命じてなさしむるものであつて、この規定から外れることは堅く禁じられてゐる。かくの如くにして日本船が沿岸を離れて大洋に出ることを防いでゐるのである。龍骨は前も後も非常に高く上つてゐる。この般は樅材又は杉材で造つてあるが、歐洲人の船に比すれば堅牢さに於いて甚しく劣つてゐる。平穩な天候の日に使ふ只一本の帆柱がある。櫓でもつて可なり早く走る。港に泊るときは、二本の杭の上に船體をよせかけるが、この杭は錨の代りを務むるものとして特別に植え込まれたものである。そして帆柱を甲板の上に横たへる。少しでも寒かつたり雨が降つたりすると、船全體に帆を張り擴げるが、これは乗組の人にとつて非常によい避難所となる。甲板はあるが、その大部分はキャビンになつてゐる。それでその屋根が又今一つの甲板になつてゐて、その上を歩くことも出来るし、又この上に帆柱を寝かすのである。大きな船及び帆前船ではこの

キャビンはかなりの人数の人を入れることが出来る。このキャビンを家の内部と同じに數室に分けることも出来る。各室は板敷の上に藁を敷いて、大變工合よくなつてゐる。このキャビンの幅が船より大きく、兩舷外に裕に一オースは飛び出してゐる。これは餘り見かけのよいものではない。内部は舷側に穿たれた窓から明をとる。

我々は漸く家屋Kamiroに向つて發航した。家室は下ノ關Nakastinaから三十六哩の地點である。更に七哩を行くか行かぬうちに、逆風が起つたので、長島に碇泊しなければならなくなつた。風は鎮まるどころでなく、暴風になりさうなので、錨を揚げて、十四哩を逆航し、初め我々が碇泊しやうと思つてゐた港よりも更に確かだ便宜な港に避難しなければならなかつた。我々は上ノ關Kaminosekiで三週間待たねばならなかつた。即ち風が激し過ぎない順風に代るまで待つたのである。氣温が非常に下つて、部屋の内に火を焚かねばならなかつた。これだけ注意をしたに拘らず、我

地ノ家室

々は風邪に罹つてしまつた。

長い間待つた後漸く順風が吹き出した。我々は錨を上げて地ノ家

Djino-Kamoron

室に真直ぐに向ひ、こゝに入港した。この短い間の海を渡る間、我々は

大小様々な島の間を行つた。この近海は島で一杯である。

日本人の

沐浴

船が錨を下ろすと、いたる所で日本人は急いで上陸して沐浴する。

旅にある時も家にゐる時も、彼等は一日として體を洗ふのを缺かした

ことはない。町のみならず村落にも公衆風呂がある。貧しき者も數

リアルドを費せばこゝに入ることが出来る。沐浴者の儉約振りにも

罪があり、又人々が驚くほど無感心な故もあるが、切角外の國民のうち

なれば清淨を保つものとなるこの風呂も、この土地では水痘その他の

如き傳染病の盡きざる源泉となつてゐるのである。同じ湯が屢々數

人に共同なのであるから、その結果起る不都合は容易に推察すること

が出来来る。我々は航海を續け、無數の島を渡つて、二つの國の間の狭い

水道を通つて、御手洗まで行つた。

Mitcara

御手洗

御手洗の港は廣く且つ安全である。それで時々疾風の時に多數の

舟がこゝに避難しに来るのを見ることがある。

我々は今起つた風を利用して、困難にして危難多き航海を續け、兵庫

に行くのに二十六日を要した。

天氣のよい日には無數の鴨を見た。特に支那産小鴨と呼ばれる種

鴨

類のものを見た。この鳥は銃聲に別に驚かない。遠くから見ると小

い島のやうであつた。我々が近づいても逃げやうとせず、我々のうち

に彼等の最も恐るべき敵のあるのも知らないやうであつた。實際私

はこの鳥に大分殺生をした。食べたいためでもあり、又樂むためでも

あつた。

兵庫は大阪灣に臨み、海上十哩乃至十三哩を距て、大阪に面してゐ

る。この町は南にむいて開いた非常に廣い港を持つてゐる。この方

ツンベルグ日本紀行

向に開いてゐるために、この港は非常に危険なものとなり、平家帝が堤防を築いて波濤の激しい力を挫くに至るまでは、船は不安な氣持でこの港に投錨したものであつた。この堤防は莫大な額を要した。無数の人夫がこの爲めに命を隕した。この堤防は海面の上に極く僅かしか出てゐない。これを迂廻して港に入る時に、私がこの堤防を砂丘かと思つたのも無理もない。港のうちには百隻以上の船がゐたが、皆我々の如くこの港に入つて、大阪行の各種の品物を降ろすものであつた。この大阪に行くのに通らねばならぬ入江は浅い。従つて大きな船を行るに應はしくないのであるから、兵庫港の重用なことは察せられる。この町は、長崎の如く、港に添ひ、海岸及び附近の山の上に擴がてつてゐる。大きな美しい町で、殊に人口が多い。

ケムベルはこゝで小舟にのつて大阪に向つた由を物語つてゐるが、我々は自分の大きな船を離れて、^{Kansai}神崎に行く道を進み、そこで新に大阪

西ノ宮

行の船に乗つた。こゝから大阪まで六哩に過ぎない。^{Anagasaki}

神崎

四月八日の午前に我々は西ノ宮^{Ishonima}で晝食をした。續いて尼ヶ崎に行つた。海岸にあつて、堅固に城が築いてある。そこから二哩先で一休みしてから、更に一哩行つて、神崎に着いた。神崎は大きな川の傍にある村落である。こゝからある川口まで船で運ばれたが、この川は大阪の町を横貫した後大阪灣に注ぐ大きな川である。

淀川通航

我々が宿る筈の家の主人が舟で出迎へに来てゐた。我々は彼と共に兩側にある隣接町村の間を通つて川を遡つた。川岸に繋がれた舟の數から見ても、如何にこの町が商業の盛な土地か合點される。多くの橋、木戸、さては兩岸におかれた監視隊を通過した後、町の中心に出た。

大阪の宿

宿の工合も非常によく、又全くよい待遇をうけた。宿の主人はその晴着を着て、慇懃なる様子を、甚だ愛想よく又敬意を籠めた調子を以

密柑

つて、我等が困難なる旅を早くも無事に終つたのを祝する旨を、通譯を通じて述べに來た。その召使の一人は贈物を、曩きに私が述べた、四角な小卓にのせて持つて來た。贈物は美しい蜜柑で、その一種は皮が厚く、他は小さくて *Mican* 【蜜柑】と呼ばれ、これは皮が薄い。それに柿が少しである。贈物は丁寧に折つた一枚の紙に蔽はれ、紙は金を塗つた紙撚で結びつけてあり、その紙撚の先には、そこに貼りつけてある海藻の一片が垂れ下がつてゐる【熨斗のことなるべし】。同じ海藻の細片がその周りに散らしてある。これは一つの儀式であつて、賓客に對する敬意を表するものなのである。

熨斗

食膳に *Abramo* 【アイナメのことか】と云ふ肉の多い魚を出されたが、私は非常に美味だと思つた。

祝儀

大阪に着いてから船長に船賃を支拂つた。彼は我々をその舟にのせて兵庫まで巧みに連れて來て呉れ、又荷物をこゝまで運んで來て呉

大阪滞在

れることを引き受けて呉れたのである。私は一個人として彼に六テール七マースを與へ、水夫に六コンデリンを與へた。この外我々は各々、そのノリモノに世話をして呉れた人々に三テール、政府が我々につけて呉れた奴隷たちに六テールを與へなければならなかつた。凡てで凡そ十六テールになつた。

我々は大阪には二十四時間しか停つてゐなかつた。我々は數軒の商人の店に行つて、歸りに持つて行けるやうに、いろ／＼注文を出してあいた。その時見本を残しておいて、これに従ふことを命じてあいた。その主なるものは銅製或は漆器の昆虫、大小各種の扇書寫用の紙及び壁紙、その他この國の名産品類である。

大阪

大阪は日本の五大帝都の一つであつて、將軍に直屬してゐる。こゝには長崎と同じ行政が施かれてゐる。奉行が二人居て、互に交代し、交代にこの町及び幕府に住んでゐる。海に臨み同時に全國の中央に位

置を占めてゐるものだから、日本ぢうで最も殷賑な場所となつたのである。商品は各地からこの地に集り、且つよい値に賣れる。製造者及商人にして富めるものは、こゝであらゆる投機の方法を試みる事が出来る。往來に臨む家の地階は仕事場又は店となつてゐて、その美術的な陳列は觀客を惹きつける。我々がこの町に來るために帆船で遡つて來たエド川^{Edogawa}【淀川のことか】は縦にこの町を貫き、商業に利するために穿たれた多くの運河により縦横にこの町のうちを走つてゐる。この運河及び河を日本の杉材で造つた橋で通る。橋のあるものは五十プラス乃至六十プラスの長さを有するものがある。

この土地にはあらゆる種類の享樂機關があるので、富裕な人が群をなしてこゝに住居を定めてゐる。この人たちが金を使い、工人が工作に従ひ、商人が活動するので、大阪は日本の巴里になつてゐる。

大阪城代

城はこの町の一端にあつて、この國の様式に従ひ堅固に築城されて

ゐる。多分一哩四方はあるだらう。町の奉行とは全く別個な城代が二人ゐて、互に三年宛交代にこの城の指揮をする。當時職についてゐないものは幕府に留まつてゐるのである。この城代が大阪に着くや、前任者は直ちにこの地を發してその任を將軍に報告しなければならぬ。——然しこの邊で話を我々の旅のことに返さう。

大阪出發

都【京都のこと】に行くのには猶十三哩あるので、我々は九日の朝早く出發した。

人が我々を起しに來た時はまだ夜が明けてゐなかつた。一杯の珈琲を啜り、バター入りのサンドウィッチを用意するのがやつとの時間しかなかつた。まだ非常に暗いので、松火を持った人たちが、歌を歌ひながら、我々の先に立つて進んだ。大阪から二哩の守口と云ふ村^{Morikuts}に着いて、輿夫は一時休んだ。それから、これより大きな今一つの村の枚方^{Fushika}まで一息に行つた。これは三哩先にあつた。我々はこゝで茶菓をとつ

た。次には淀^{Toto}で休んだ。こゝは一哩先にある。我々は淀から一哩少し上の伏見で、非常に時過ぎた午飯をした。伏見は豊かな美しい小さな町である。この町の橋を淀橋^{Toto-bridges}といふ。この王國內の最も大きな橋の一つで、長さが四百歩ある。この町を護る城は町の一端に美事に築かれてゐる。皇族「徳川家直系の人のこと」が一人こゝに住んでゐる。

伏見

伏見は單なる村に過ぎない。然も長さが三哩あつて都に續いてゐる。實を云へば伏見は都の接續町村なのである。和蘭國內を除いては、これほど愉快な旅をしたことがない。和蘭の景色は、この時幸にして眺めて通ることを得た景色に少しも譲るものでないと私は思ふ。この美はしき景色を簡單になりとも畫にして諸子に見せることの出来ないのは残念で仕方がない。然し田畑は巧に耕作され、數多の村落が相接して、旅人はよくその境界を定めえない、美しい景色をどうして

車

私のやうな未熟なものが畫にしやうなどと云ふ大膽な眞似が出来やう。この日一日ぢう我々は田舎の道を行くと云ふよりも蓋る町中の街路を運ばれるやうな気がした。

初めて私は車を見ることが出来た。この車輪のついた乗物は、日本で唯一のものであるが、都近傍でなければ使はれてゐないものである。この車は小さい。そして一つの木片を穿つて造つた車輪を三個より有してゐない。二輪は後部にあり、一輪は前部にある。それに磨滅を防ぐために繩が巻いてある。この車輪のうちには全く歐洲流に出来てゐるものがある。線棒と車轂がついてゐるが、然し鐵輪もないし、又非常に華奢である。町のなかで、二輪の車で只一頭の牛に曳かれてゐるものを見た。これは前者に比し一層粗雑なものである。馭者は往來の低い側以外は通るべからずと厳く命ぜられてゐる。然しその車の數が非常に多いので、混雑を避けるために、我が家を朝に出て、午後で

掛茶屋

なければ歸つて来てはならないことが亦嚴命されてゐる。
どんな小さな茶屋にもいつも米の粉で作つた白か緑の小さな菓子がある。旅人や興夫はこれを買つて茶と共に食べる。茶はいつも飲めるやうに用意されてゐる。

都の宿

都では我々は宿の二階を占領した。こんな高い處に宿することは平常ない。我々は大行李を開いて、白い下着類、衣服その他江戸までの旅路に必要なものを取り出す許可が與へられた。

所司代謁見

都滞在の四日のうちに、この町の大裁判官【所司代のこと】及二人の奉行から引見された。彼等は我々に緑茶、煙草及び菓子の饗應をした。この謁見に往くのに例のノリモノでつれて行かれた。我々は彼等に和蘭會社の名で贈物をした。

都の形勢

都は日本の一番古い首府である。同時にこの王國內の最も股賑にして又大なる町の一つである。その占めてゐる位置の干係からして、

この利益の大部分を享樂しうるものであることは疑はれない。全くこの町はこの國の殆んど中央に位し、獨逸里程一哩の長さ、半哩の幅を有する平野のうちにある。商人達はこの地に熟練した労働者及び工人を集めてゐるから、實用品、或は贅澤品をなんでも手に入れることが出来る。ことに漆器、天鵞絨、絹布、銀器、銅器、醤油、毛織物及び秀れたる武器を手に入れることが出来る。

貨幣鑄造

猶この土地で彼の日本の美はしき銅を精製し、これを溶かして、凡ての貨幣を鑄造するのである。

神職

Dairi.内裏朝廷に屬してゐる僧職の人々は文學を盛んにすることに従事し、彼等是一種のアカデミーを作つてゐる。猶日本の圖書は概ねこの町の印刷所から出るのである。

小遣錢

この土地で我々は一等通譯から三百リクダールの金を、新しく鑄造された小判で受取つた。これは途で商品や珍奇な物を買ふためであ

商人に注

る。秘書及び私は、カンバン錢【借金^{の意か}】として貰つた、この金を長崎にある基金から差し引かれねばならなかつた。こゝで我々に逢ひに来ることを許された多くの商人から訪問をうけた。我々は醬油製品、漆器、扇その他の小さなものの注文を出してゐた。

都出發

四月十四日に我々は都を出發した。一哩も行かないうちに蹴上^{Kesugi}で一休みした。今少し行つたヤコチャヤ^{Taco Tchaya}【奴茶屋^か】でも一休した。この休場から一哩以上はない走井^{Pasiri}を過ぎてから、更に一哩行つて石場^{Taira}或は大津^{Otsu}と云ふ所に出て、こゝで晝食をした。大津は同名の湖の畔にある。この湖の幅は極く狭いが、長さは非常に長く、少くも四十里はある。この國の古い記録によれば、この湖は地震により一夜のうちに出来たと云ふことである。大地が急に低くなつて、水がこの上に溢れたのだと云ふ。この湖は商品の運輸を利すること多く、又この附近にあ

琵琶湖の

る土地の間に盛な交通の道を開いてゐる。

この湖は軟水のみなのであるから、このうちに鮭を發見した時は私は大に驚いた。東印度地方に於いてはこの魚は皆無と云ふ程でなくとも、とにかく非常に珍らしいものである。私が初めて見たものは十リーザルに近い重さがあつた。この後の旅次にこの魚が屢々食膳に上された。我々は歸りに持つて歸るために、これを燻製にした。然し

草津

歐洲の鮭に比すれば、燻製法も下手なれば、大きさも小さう。午後には一哩行つて瀬田^{Fuketsu}に着いた。更に一哩先に月ノ輪^{Zukinowa}があり、我々が宿をとつた草津^{Kousats}は更に一哩餘先であつた。草津には少くも五百軒の家乃至世帯がある。瀬田の近くで一つの川を、長さ三百五十歩の橋で渡つたが、この橋は日本流の築造法によつたものであつて、裝飾に富み且つ欄干がついてゐる。この橋は小さな島の上を通るが、この島と村は極く狭い枝流で距てられてゐるだけであつた。

翌日の四月十五日は全日、富裕にして豊穰な近江ノ國のうちを十一哩以上歩いた。村や町は相接して、絶間がない。こゝにはたゞ通過した主なる場所の名を擧げておくに止めやう。梅ノ木、石部、夏見、泉、水口、大野、マツウ【松尾か】、ヒチヨマ【土山の誤記か】、猪ノ鼻、澤及び坂ノ下である。晝食は水口で認めた。これはかなり大きな町である。途々多くの日本人が和蘭醫を訪ねて、薬を貰ふものがあつた。その大部分は瘰癧、下疳、或は花柳病の患者である。微毒患者は大部分應急の處置を缺いてゐるから、不治のものと思つた。

その夜かなり晩くなつて伊勢國に入り、關町に宿をとつた。

十六日に我々の通つた路はこれまでに比し、一層變化に富み且つ美しいものであつた。伊勢の國は人口豊かに、又豊穰で且つよく耕作されてゐて、道の兩側は殆んど到る處人家である。村と村とはこゝでも亦相接してゐる如く思へた。しかし乍ら我々が視覚で樂むところも、

嗅覺のために高い税を拂はされてしまつた。云ひ換えれば、大氣の耐へられぬ悪臭のために、景色の美はしさは見てゐられなくされたのである。我々はノリモノの扉を殆んど絶えず閉めておかなければならなかつた位である。その理由は次の如くである。各人家の便所が往來の方に向いて開いてゐて、往來のものが地並に埋けた甕のうちに放尿が出来るとなつてゐる。この糞便及び土地の肥料として堪念に積めてある汚物は、殊にこの大暑には、堪まらぬ耐へ難き腐敗臭を發散させる。これを消すことの出来る香料もなければ、防臭剤もないのである。この溜場は農業には有用なものに違ひない。しかし如何なることがあるとも、それから發散する不都合にして望ましがらざる悪瓦斯の償とはならない。ことにこの悪瓦斯は目を襲ふ。若い者は大部分老人は全部臉に血が滲み、傷が出来て、膿を持つに至つた。

四日市

つた。これは大きな町である。その前にノシン【不明】カミルイヤ
ミ【龜山のことか】^{Morinosta Sono Soutski}森ノ下、庄野、スツキ【杖衝か】^{Oiyaki Tokats}追分、四日市、これは
大きな町である、^{Tomida Matsdera}富田、松寺を通つた。

四日市から江戸に至るまで、我々は殆んど常に海岸に沿つて行つた。
そして數多の大きな川を徒涉したが、これは大雨に際し出水するので、
橋が懸けられないためである。

コマの比
丘尼

四日市で我々は三人の乞食尼僧に迎へられた。尼達は一人一人我
々のノリモノに引き添つて歩き、和蘭人から幾分なりと喜捨を得やう
とした。我々は尼達を永く待たせることなく、すぐ美しき銀貨を與へ
た。この喜捨を得た後も、尼達は執拗に數里の間我々について來た。
そこで我々は紐に通した、^{Sei}ゼニと稱する小銅貨に金貨を換え、時々その
二、三枚を與へた。

この女の人たちは非常に若い女のやうに思へた。十六歳乃至十八

桑名

歳位であらう。その禮儀正しき態度、その端正なる服装は、その職業に
似合はざるものであつた。通譯の言によれば、この娘達は、^{Tanimas}山伏と稱す
る山に住む僧の娘であるといふことであつた。通譯たちは、若し私が
この女たちの日常生活を知つてゐるならば、前言した不似合な點が一
層私に堪まらないものになつたらうと斷言した。この娘たちは、毎年
伊勢の社に税を拂つて、^{Komano Iikoumi}目こぼしをして貰つてゐるのである。この憐
れむべき女たちは、この國で^{Komano Iikoumi}コマの比丘尼と云ふ名で知られてゐる。
我々は桑名の美しい廣い宿に泊つた。この町は^{Ovahi}尾張の大きな美し
い町で、堅固に城で固めてある。尾張は將軍と特別の干係がある貴族
に屬する最も富める國の一つである。この町は濠と城壁に圍まれ、高
き櫓が散在してゐるが、これが甚だ美しい眺を呈してゐる。町の城壁
に細長い穴があけてあつて、城の兵士はこゝから、敵の矢に身を曝すこ
となく、矢を射かけることが出来る。

四月十七日には宮灣Mia【熱田灣のこと】を渡つたが、幅約七哩はあるだらう。この渡は特に書く價值がある。

我々は桑名で附添の人及び荷物と共に大きな船に乗つた。然し宮の港の入口に着くと、水が非常に浅いため、數隻の小舟に分乗しなければならなかつたが、然もこの小舟の底も水底に觸れた。二人の男が水のなかを歩いて、手で舟を押した。そこで我々は水の上でも陸の上でも永い時間をかけてしまつた。

宮は海岸にあるけれども、舟はこれに近づくことが出来ない。舟は相當離れた距離に止まらなければならぬ。かなり澤山の數の舟が錨を下ろしてゐた。

この町には城はない。然し商業の盛なること、人口の多いこと、他の町に劣らない。大通りの先が川添Nagataひの街道になつてゐるが、これが宮から二哩先の尾張國の首府なる名古屋Nagoyaに行くのである。

午食後、池鯉鮒Felirionで宿をとるために出發した。池鯉鮒は四哩先である。我々は笠寺Kassadera、鳴海Marumi、前後Shinjo、イモカハImokawa【今川か】を通つた。

四月十八日には岡崎で晝食をした。岡崎は三河國の要塞地である。こゝに来るまでに牛田Ousida、オサマOsama【大濱の誤記か】、矢矧Iatagiriを通つた。晝食

後この町の木橋を見に行つたが、これは日本ぢうで最も長い橋として知られてゐるものである。百五十八ブラスあつて、小判三萬枚、凡そ三十萬リクダールを要したものである。この國の領主は城のうちに住んでゐる。城は高さ櫓と立派な城壁でもつて堅固に固められてゐる。

午後にはカキノイコKagunoico【不明】、藤川Fousikawa、本宿Motoshiku、赤坂Akasaki、御油Goion、デアカセンDiakasen、Iootsida

【不明】、四谷Totsidaを経て、ヨッシンYosshin、ダDada又は吉田Tosidaに行くまでに七哩餘を行つた。

この地方はこれまで通つて來たなかで一番山坂の多い土地かと思はれた。これまでは豊穰でもあるし、又よく耕されてある平野や谷間を通つて來たのである。

新居

濱名湖

新居の關

舞坂

十九日の正午に我々は新居Arayに着いた。これは城壁に圍まれてゐない小さな町で、大きな灣の岸にある【大きな灣とは濱名湖のことである】。その位置及び外見の秀れたる如く深さも若し相當なれば、恐らく之れ以上確な港はあるまい。歐洲流に築城すれば難攻不落のものとなすことさへ出来やう。吉田からこゝまで五哩ある。こゝまでにInouriイムリ【飯村か】Fuegava二川、一里山村、白須賀及び元白須賀Moto-Siraskaを通つた。旅人全部ことに參観途上の諸侯はこゝで將軍の役人により検査をうける。國內に擾亂を起し或はこれを助ける危険ある故に、入れることを厳しく禁ずべきものの一つとして、武器を携へた女子が擧げられてゐることは一驚に價する。

晝食は美味だつた。我々の荷物は凡て検査をうけたが、極めて丁寧であつた。我々は將軍の役人を訪問した後、底の平たい舟に乗つて、灣の對岸に渡り、舞坂Matsakiと云ふ町に入つた。午後にこの町を發つて、七哩先

見附

掛川

大井川

見附Mitakeに行つて宿をとつた。その前に篠原Sinoyaraニンプツドオ【念佛堂かと思はれるが不明】Tammamatsタママツ【濱松の誤記】これは大きな町である。チンジエンマツ【天神松か】を経てこゝでチンヂン川Tindjengwa【天龍川か】を渡るために舟に乗り、そして最後に池田Ikedoダイソオイン【大〇院の二字は判斷出来るが不明】を通過した。

翌四月二十日には午前四哩行つて掛川Kakegawaで晝食をした。これは重要な町で且つ城がある。これまでに三香野袋井Mikano Foukouroy、名栗Nakou-i、ヒラ川Piragawa【不明】、船川Shunawaを見た。午後にはヤマハノJammalano【不明】、日坂Nisaka、菊川Kikougawa、金谷及び大井川Oyegawaを通つた。この川は掛川から四哩の地を流れてゐる。この川はむしろ早瀬と云ふべきもので、この地方を通じて最も危険なものである。大雨の時には恐ろしく水量を増す。その流は甚だ速く、且つ眞直に海に注いでゐる。川水が近くの巖を缺いて運んで來た小石で川原が充たされてゐる。

橋を架けることが出来ない河川を容易に旅人に越させるために、日本の政府のとつた賢明なる方法は全く感ずるに餘りある。必らず舟又は擔夫がそこにゐて、いつでも對岸に連れて行つて呉れるやうになつてゐる。流の加減で舟を使ふことの出来ない場所には特に深い注意が拂はれてゐる。この時には擔夫の數が非常に多くなる。この人たちは川底を熟知してゐて、旅人を肩にし、その頭上に旅人の命を引き受けるのである。渡河の賃金は流の深さ及び長さにより異なる。しかし決して法外な價を要求することはない。

我々の渡河の準備を見てゐると、私は少し不氣味に感じた。他の人夫により、そんなに強くはないが、激しい水の勢に押し倒されないやうに支へられ、又帶の邊まで水につかつてゐる男に擔がれて、ノリモノでこの河を渡るのは、決して平氣でゐられるものでない。我々の馬匹及び荷物を越させるにも同様の注意が拂はれた。我々はノリモノを擔

いだ渡河人夫に一人にゼニ二錢宛を與へた。無事にこの渡河をすま

Simada

すと、我々がその夜宿つた島田までは半哩よりない。これは長さ四分

の一哩の村落である。我々はこゝで二日二晩休息した。そして四月

Ieseri

二十五日に十哩以上を行つて、江尻に宿つた。その途中いろ／＼の村

を通つた。例へば瀬戸—*Ceto*—藤枝—*Fousida*—アブミ—*Avoumi*—【燈か】岡部—*Okabe*—宇津ノ谷及び晝

食をした丸子—*Mariko*—續いて安部川—*Abikawa*—府中及び栗原である。

Gounihara

四月二十四日には十三哩を歩かねばならないので、早曉に發足した。

Kambara

前夜の宿から四哩先の蒲原で晝食をした。その前に江尻—*Ieseri*—ノアツキ

【不明】オキツノフラサワ—*Okitsunofurasawa*—【興津及び倉澤か】及び由比—*Iouhi*—を通つた。

午後には舟で富士川と云ふ大きな川を渡つた。注目すべき所はミト

—イチバン—*Isiban*—【本市場か】或はシロサキ—*Siro-Saki*—【不明】吉原—*Tosiyara*—柏原—*Kasiyabara*—一本松

原—*Farra-Noumatso*—沼津—*Kisigaya*—及び三島である。

原までは海岸傳ひに来て、そこから、杉その他の樹木に富む廣い山地

ツンベルグ日本紀行